

平成18年度

**小・中学校学力調査結果及び
優秀実践校研究実践報告書**

～小・中学校学力向上推進事業～

宮崎県教育研修センター

はじめに

平成17年9月に、国立教育政策研究所教育課程研究センターから『平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査』結果の概要及び教科別分析が公表され、そこから得られた課題に対する調査・分析としての「特定の課題に関する調査（国語、算数・数学）」の調査結果が、平成18年7月に公表されました。これらの分析において、学習指導要領における各教科の目標や内容に照らした学習の実現状況、教育課程や指導方法等の工夫改善について、今後の指針が示されました。また、平成19年4月には「全国学力・学習状況調査」の実施が計画されるなど、学力向上に関する取組が具体的に推進されるとともに、関心も高まってきております。

本県においても、「宮崎の教育創造プラン」の具現化のために取り組んでいる「明日の宮崎を担う子どもたちを育む戦略プロジェクト」も2年目となり、学力向上に向けた対策も様々な事業を展開しています。特に平成17年度から行われている全国規模の学力調査の結果を基に、各学校では細かい分析が行われるとともに、各教育事務所単位では教員の指導力を高める授業研究会が行われるなど、多くの場において指導方法の工夫改善が具体的に推進されてきております。

このような中、宮崎県教育研修センターでは、学力の確実な定着を目指し、教育課程や指導方法の工夫改善を図るための調査研究として、平成14年度からの基礎学力調査及び分析に引き続き、昨年度からは全国規模の学力調査の結果を分析・考察しております。さらに、その内容を本センターのWeb上に掲載することで、学校教育関係者はもとより、数多くの方々に活用していただいているところです。

本報告書は、今年度実施された全国規模の学力調査の結果を基に、学習状況の分析・考察を行い、今後の指導上の留意点についてまとめたものです。各学校・関係諸機関におかれましては、この資料を十分に御活用いただきますとともに、今後の学習指導方法の工夫改善に役立てていただきたいと思います。

最後に、本調査の実施・分析等に際し、御協力いただきました県内の小学校・中学校及び関係諸機関に対しまして心よりお礼申し上げます。

平成19年2月

宮崎県教育研修センター
所長 寺田 建一

目 次

はじめに	
I 実施概要	1
II 各教科平均点	1
III 全体概要	3
IV 教科別分析結果（小学校）	
（1）国語	4
（2）社会	7
（3）算数	10
（4）理科	13
V 教科別分析結果（中学校）	
（1）国語	16
（2）社会	19
（3）数学	22
（4）理科	25
（5）英語	28
VI 意識調査分析結果	31
VII 優秀実践校の取組（小学校）	
（1）宮崎市立古城小学校	36
（2）宮崎市立西池小学校	38
（3）宮崎市立宮崎港小学校	40
（4）宮崎市立学園木花台小学校	42
（5）宮崎市立広瀬北小学校	44
（6）串間市立都井小学校	46
（7）南郷町立榎原小学校	48
（8）都城市立東小学校	50
（9）都城市立山之口小学校	52
（10）小林市立小林小学校	54
（11）小林市立南小学校	56
（12）小林市立三松小学校	58
（13）高原町立高原小学校	60
（14）都農町立都農小学校	62
（15）延岡市立恒富小学校	64
（16）延岡市立西小学校	66
（17）延岡市立東海小学校	68
（18）門川町立西門川小学校	70
（19）日之影町立高巢野小学校	72
（20）五ヶ瀬町立三ヶ所小学校	74
VIII 優秀実践校の取組（中学校）	
（1）宮崎市立宮崎西中学校	76
（2）宮崎市立大淀中学校	78
（3）宮崎市立赤江中学校	80
（4）宮崎市立宮崎北中学校	82
（5）宮崎市立生目中学校	84
（6）宮崎市立生目台中学校	86
（7）清武町立加納中学校	88
（8）日南市立酒谷中学校	90
（9）串間市立都井中学校	92
（10）都城市立小松原中学校	94
（11）都城市立祝吉中学校	96
（12）都城市立志和池中学校	98
（13）都城市立夏尾中学校	100
（14）野尻町立紙屋中学校	102
（15）高鍋町立高鍋東中学校	104
（16）新富町立新田中学校	106
（17）延岡市立恒富中学校	108
（18）門川町立西門川中学校	110
（19）椎葉村立椎葉中学校	112
（20）日之影町立日之影中学校	114

I 実施概要

1 調査のねらい

小・中学校における全国的に見た学力の実態を把握・分析し、その結果をもとに、児童生徒の学力向上に総合的に取り組むことを目的とする。

2 実施日 平成18年5月10日（水）、11日（木）

3 調査対象校 市町村立小学校269校（4校は対象児童なし）
市町村立中学校139校
県立五ヶ瀬中等教育学校（前期課程）
宮崎大学教育文化学部附属小学校・中学校

4 対象学年・教科 小学校第5学年 国語、社会、算数、理科、意識調査
中学校第2学年 国語、社会、数学、理科、英語、意識調査

II 各教科平均点

1 小学校第5学年

項目	平成18年度			平成17年度		
	全国	宮崎県	全国との差	全国	宮崎県	全国との差
国語	74.7	76.6	1.9	72.1	75.0	2.9
社会	70.1	71.8	1.7	70.4	72.6	2.2
算数	75.4	76.2	0.8	74.0	75.7	1.6
理科	69.0	70.6	1.6	65.5	65.3	-0.2

2 中学校第2学年

項目	平成18年度			平成17年度		
	全国	宮崎県	全国との差	全国	宮崎県	全国との差
国語	76.4	79.2	2.8	77.8	80.6	2.8
社会	61.8	63.2	1.4	59.9	60.6	0.8
数学	64.7	68.6	3.9	63.0	67.8	4.8
理科	63.0	66.3	3.3	65.0	66.5	1.5
英語	71.3	74.3	3.0	73.5	75.7	2.2

3 教育事務所別

① 小学校第5学年

教科	教育事務所	平均点		
		18年度	17年度	年度差
国語	宮崎	77.3	76.5	0.8
	南那珂	75.4	74.9	0.5
	北諸県	75.1	73.8	1.3
	西諸県	78.6	72.8	5.8
	児湯	77.6	76.7	0.9
	東臼杵	74.9	72.5	2.4
	西臼杵	79.1	78.3	0.8
	県	76.6	75.0	1.6
社会	宮崎	73.3	74.5	-1.2
	南那珂	68.9	71.1	-2.2
	北諸県	70.4	71.6	-1.2
	西諸県	72.5	70.2	2.3
	児湯	71.1	71.8	-0.7
	東臼杵	70.9	70.8	0.1
	西臼杵	72.1	73.2	-1.1
	県	71.8	72.6	-0.8
算数	宮崎	76.3	77.0	-0.7
	南那珂	75.2	74.8	0.4
	北諸県	75.2	75.4	-0.2
	西諸県	76.7	73.8	2.9
	児湯	76.1	75.3	0.8
	東臼杵	76.4	74.0	2.4
	西臼杵	76.4	76.1	0.3
	県	76.2	75.7	0.5
理科	宮崎	70.2	66.3	3.9
	南那珂	69.4	65.9	3.5
	北諸県	70.2	65.0	5.2
	西諸県	72.3	64.7	7.6
	児湯	70.6	64.4	6.2
	東臼杵	70.5	63.4	7.1
	西臼杵	74.5	67.3	7.2
	県	70.6	65.3	5.3
計	宮崎	74.3	73.6	0.7
	南那珂	72.2	71.7	0.5
	北諸県	72.7	71.5	1.2
	西諸県	75.0	70.4	4.6
	児湯	73.9	72.1	1.8
	東臼杵	73.2	70.2	3.0
	西臼杵	75.5	73.7	1.8
	県	73.8	72.2	1.6

※年度差=18年度の平均点-17年度の平均点

② 中学校第2学年

教科	教育事務所	平均点		
		18年度	17年度	年度差
国語	宮崎	80.9	82.8	-1.9
	南那珂	76.8	78.3	-1.5
	北諸県	79.4	80.4	-1.0
	西諸県	77.2	79.1	-1.9
	児湯	78.3	81.0	-2.7
	東臼杵	77.0	77.4	-0.4
	西臼杵	79.8	79.7	0.1
	県	79.2	80.6	-1.4
社会	宮崎	66.0	64.4	1.6
	南那珂	57.8	56.8	1.0
	北諸県	62.9	59.6	3.3
	西諸県	61.2	57.2	4.0
	児湯	59.8	58.6	1.2
	東臼杵	61.1	57.2	3.9
	西臼杵	65.6	62.5	3.1
	県	63.2	60.6	2.6
数学	宮崎	72.7	71.7	1.0
	南那珂	65.2	63.6	1.6
	北諸県	66.7	66.9	-0.2
	西諸県	67.0	66.7	0.3
	児湯	65.7	66.2	-0.5
	東臼杵	64.7	63.4	1.3
	西臼杵	66.2	66.2	0.0
	県	68.6	67.8	0.8
理科	宮崎	69.5	69.2	0.3
	南那珂	61.6	62.6	-1.0
	北諸県	67.1	65.9	1.2
	西諸県	64.8	64.6	0.2
	児湯	63.6	66.3	-2.7
	東臼杵	62.3	63.2	-0.9
	西臼杵	64.4	65.0	-0.6
	県	66.3	66.5	-0.2
英語	宮崎	77.9	79.7	-1.8
	南那珂	72.8	72.4	0.4
	北諸県	72.6	74.6	-2.0
	西諸県	70.0	70.5	-0.5
	児湯	70.8	75.0	-4.2
	東臼杵	72.1	72.2	-0.1
	西臼杵	74.1	76.5	-2.4
	県	74.3	75.7	-1.4
計	宮崎	73.4	73.6	-0.2
	南那珂	66.8	66.7	0.1
	北諸県	69.7	69.5	0.2
	西諸県	68.0	67.6	0.4
	児湯	67.6	69.4	-1.8
	東臼杵	67.4	66.7	0.7
	西臼杵	70.0	70.0	0.0
県	70.3	70.2	0.1	

Ⅲ 全体概要

学力調査

- 宮崎県と全国の平均点を比較すると、小学校、中学校とも全国平均よりやや高かった。中でも、中学校の数学は全国平均より3.9ポイント高かった。
- 小問別（※全国の共通問題）でみると、小学校では91問中57問（62.6%）、中学校では139問中115問（82.7%）が全国平均より高かった。しかし、それぞれの教科において通過率が全国平均より低いものもあり、今後、指導の工夫・改善を図っていく必要がある。
また、昨年度の分析において指導の工夫・改善が必要であると指摘した領域や観点、小問の中には、改善がみられるものがある一方、引き続き課題があると考えられるものもあり、継続的な指導が求められる。
- 関心・意欲・態度に関する設問については、肯定的に回答した児童生徒の割合が、全教科とも全国平均の割合とほぼ同じか、やや高かった。
（※ 小学校社会は、宮崎県独自の小問があるため）

意識調査

小学校122項目、中学校124項目で調査を行った。調査内容としては、学習する上での基盤となる生きる力の項目で構成されている。結果は、小学校では74.6%、中学校では87.9%の項目で、全国平均の割合より高い結果が出た。

以下は、全国との比較、学力との相関関係から特徴的なことをあげたものである。

〔小・中学校ともに全国平均の割合よりも高いもの〕

- 新しく習ったことを練習したり、復習したりする等の「自ら学ぶ力」のほとんどの項目
- 目標に向けてコツコツ学習することや、分かるまで努力すること等の「学ぶ姿勢」のほとんどの項目
- 家族と話したり、手伝いをしたりする等の「家庭での指導や活動」のほとんどの項目
- 授業での取組や教科等に関すること等の「学校の指導や活動」のほとんどの項目

〔学力との間に相関関係が認められるもの〕

- 本や新聞を読んだりすること
- 自分を理解してくれる友だちや気にかけてくれる家族、教師に認められること
- まちがえたところをやり直したり、単に学習内容を暗記するのではなく、理由や考え方も含めて理解したりしていくこと
- 塾・家庭教師に見てもらった学習だけではなく、自分自身で学習に取り組むこと
- 家族との様々な会話や家族の応援
- 朝食を食べることや起床、就寝時間等の規則正しい生活習慣
- 小学校の国語と社会、中学校の英語において、好き嫌いの情意面

IV 教科別分析結果 (小学校)

1 小学校第5学年

(1) 国語

① 概要

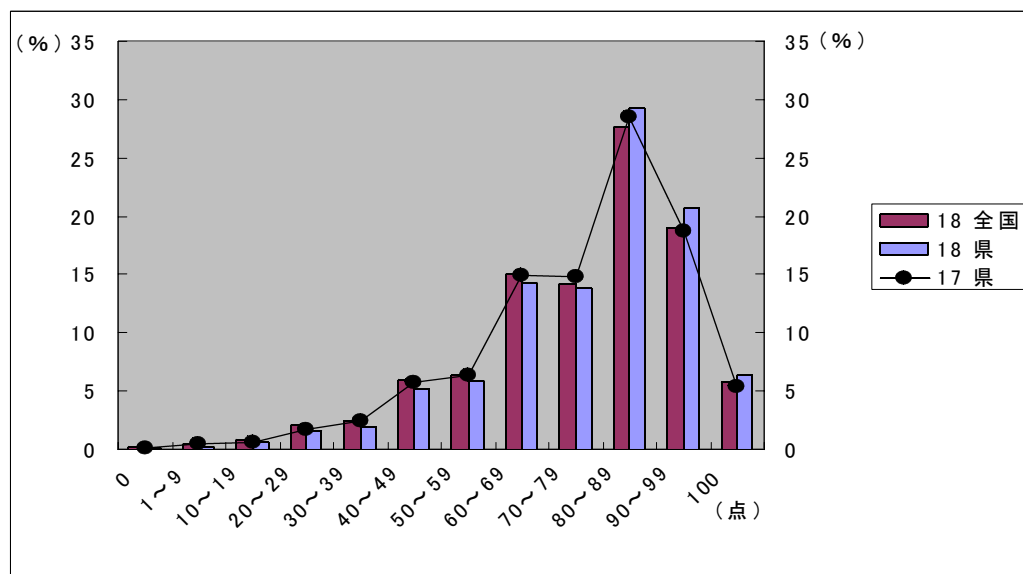
「話すこと・聞くこと」及び「読むこと」の領域は全国平均とほぼ同じであり、「書くこと」の領域及び「言語事項」は全国平均よりやや高い。また、教科に関する関心・意欲・態度もほとんどの項目で全国平均よりやや高い。

小問別にみると、「読むこと」の説明的文章、文学的文章のいずれにおいても、要旨や主題の把握、自分の考えの的確な記述が課題である。今後は、文章全体を見通して要旨や主題を的確に把握するとともに、自分の考えを簡潔にまとめていく力を育てるため、今まで以上に領域の関連を図った授業の展開が必要である。

② 平均点

		記号	平成18年度			平成17年度		
			全国	宮崎県	全国との差	全国	宮崎県	全国との差
全体	教科全体		74.7	76.6	1.9	72.1	75.0	2.9
	基礎		76.3	77.9	1.6	74.0	76.7	2.7
	応用		69.5	72.3	2.8	66.1	69.7	3.6
観点別	話す力・聞く力	A	81.3	82.2	0.9	79.7	82.4	2.7
	書く力	B	71.6	74.7	3.1	67.8	71.2	3.4
	読む力	C	72.0	72.7	0.7	69.5	70.8	1.3
	言語についての知識・理解・技能	D	75.2	78.4	3.2	72.4	76.7	4.3
領域別	音声言語	a	81.3	82.2	0.9	79.7	82.4	2.7
	説明的文章	b	76.7	77.7	1.0	76.4	77.7	1.3
	文学的文章	c	67.3	67.6	0.3	62.6	63.8	1.2
	言語事項	d	75.2	78.4	3.2	72.4	76.7	4.3

③ 得点分布グラフ



④ 小問ごとの出題内容と通過率 [小学校第5学年 国語]

大問	小問	出題内容				平成18年度			平成17年度			
		設問事項	観点別	領域別	設問形式	設問比較	全国	宮崎県	全国との差	全国	宮崎県	全国との差
1	1	話の内容の聞き取り	A	a	ウ	○	88.7	88.9	0.2	85.5	87.1	1.6
	2	話の内容の聞き取り	A	a	ア	○	83.5	83.8	0.3	82.2	82.8	0.6
	3	質問の仕方の理解	A	a	ア	○	71.8	73.9	2.1	71.6	77.4	5.8
2	1	文脈に即した内容の理解①②	C	b	イ	○	78.7	77.8	-0.9	76.5	76.7	0.2
	2	文脈に即した内容の理解	C	b	ア	○	86.2	85.7	-0.5	84.5	84.9	0.4
	3	理由の記述	C, B	b	エ	○	80.3	80.1	-0.2	79.5	80.3	0.8
	4	文脈に即した内容の理解	C	b	ア	○	67.8	66.5	-1.3	65.1	65.1	0.0
	5	文章を踏まえた意見の記述	C, B	b	ア	○	70.6	78.2	7.6	76.4	81.7	5.3
3	1	比喩表現の理解	C	c	ウ	○	56.1	54.6	-1.5	55.0	55.3	0.3
	2	人物の心情の理解	C	c	ア	○	74.7	74.7	0.0	74.2	74.2	0.0
	3	文脈に即した内容の理解	C	c	イ	○	72.2	72.5	0.3	70.6	71.4	0.8
	4	文脈に即した内容の理解と記述	C, B	c	エ	○	60.9	59.7	-1.2	60.8	62.1	1.3
	5	文章を踏まえた短作文	C, B	c	エ	□	72.6	76.7	4.1	52.7	56.3	3.6
4	1	漢字の読み	D	d	△	○	95.2	96.4	1.2	94.8	96.2	1.4
	2	漢字の読み	D	d	△	○	95.9	97.0	1.1	95.5	97.1	1.6
	3	漢字の読み	D	d	△	○	94.8	96.1	1.3	93.8	95.7	1.9
5	1	漢字の書き	D	d	△	○	76.8	85.6	8.8	72.5	85.3	12.8
	2	漢字の書き	D	d	△	○	79.0	77.3	-1.7	80.6	82.7	2.1
	3	漢字の書き	D	d	△	○	69.9	69.9	0.0	69.2	68.4	-0.8
6	1	主語述語（主語）	D	d	ア	○	65.6	67.5	1.9	58.8	65.8	7.0
	2	主語述語（述語）	D	d	ア	○	54.7	66.1	11.4	45.7	56.7	11.0
	2	文の形	D	d	ア	○	56.4	54.4	-2.0	54.9	54.8	-0.1
7		丁寧語	D	d	ウ	○	81.0	83.3	2.3	78.8	82.3	3.5
8		ローマ字	D	d	イ	□	59.4	68.6	9.2	54.4	59.5	5.1
9		指示された言葉を用いた短文記述	D, B	d	エ	○	73.5	78.7	5.2	69.7	75.7	6.0

※ 「観点別」 A 話す・聞く B 書く C 読む D 言語についての知識・理解・技能

※ 「領域別」 a 音声言語 b 説明的文章 c 文学的文章 d 言語事項

※ 「設問形式」 ア 記号選択 イ 空欄補充（選択記述） ウ 空欄補充（思考記述） エ 思考記述

※ 「設問比較」 ○印 昨年度と同一問題 □印 昨年度との類似問題

⑤ 領域別にみた指導方法の工夫改善の在り方

ア 音声言語

2問は全国平均とほぼ同じであり、1問は全国平均よりやや高い。ただし、全国平均よりやや高い小問も、前年度の県平均と比べると3.7ポイント下回っている。

そこで、指導に当たっては、聞くこと的能力を平常の授業においてさらに育てていくために、主語・述語を意識して内容を的確に把握したり、話の要点を簡潔にまとめたりするような活動を取り入れることが大切である。

イ 説明的文章

4問は全国平均とほぼ同じで、そのうち文章の内容を正確に把握して答える小問は66.5ポイントにとどまっている。また、文章の内容を踏まえて自分の考えをまとめて書く小問は全国平均より高いが、無解答率は15.8ポイントである。

そこで、指導に当たっては、文章の内容を展開に即して的確にとらえる力を育成するために、主語・述語の関係に気を付けて内容を読み取ったり、文章の要点を的確にとらえて簡潔にまとめたりするような授業を継続していくことが必要である。また、自分の考えを記述する場合、書くべき内容を精選し、一文をできるだけ短く書いていく力を育てるような活動の展開が大切である。その際、説明的文章に関する「読むこと」の力を育てるために、書く活動や話す・聞く活動、言語事項の学習などと計画的に関連付けていくことも必要である。

ウ 文学的文章

4問は全国平均とほぼ同じで、文章の内容を踏まえて自分の考えを記述する小問は全国平均より4.1ポイント高い。しかし、5問全体の無解答率は18.4ポイントにもなり、特に文脈を踏まえて自分の考えを書く小問での無解答率は26.1ポイントにもなっている。

そこで、指導に当たっては、文章の内容を把握し自分の考えをもつ力を育成するために、場面の情景描写を的確にとらえたり、登場人物の言動から心情を読み取ったりする力を高めるような授業を展開していく必要がある。また、自分の考えを簡潔にまとめて書くような場面を、授業中に適切に計画的に位置付けていくことが大切である。その際、文学的文章に関する「読むこと」の力を育てるために、話す・聞く活動や書く活動と計画的に関連付けていくことも必要である。

エ 言語事項

4問が全国平均より高く、領域全体では3.2ポイント高い。中でも、述語を指摘する小問では県平均が昨年度より9.4ポイント高く、かつ全国平均よりも11.4ポイントも高いなど、県全体における改善がみられる。一方、ローマ字に関する小問では無解答率が17.1ポイント、短文作成の小問は無解答率が10.8ポイントである。

そこで、指導に当たっては、言語事項の学習が「読むこと」の学習に生きるような具体的な場面における指導を必要に応じて行ったり、書く活動においては主語・述語の関係に注意して的確に書くような指導を行ったりするなど、各領域の目標達成の一つの手段として、三領域一事項を横断的に関連付けた活動に計画的に取り組んでいくことも大切である。

(2) 社会

① 概要

一部の内容については全国平均より低いところもみられるが、教科全体としては全国平均とほぼ同じである。観点別の状況をみると、「社会的な思考・判断」は高いが、社会的事象についての知識・理解については、全国平均よりも低くなっている。

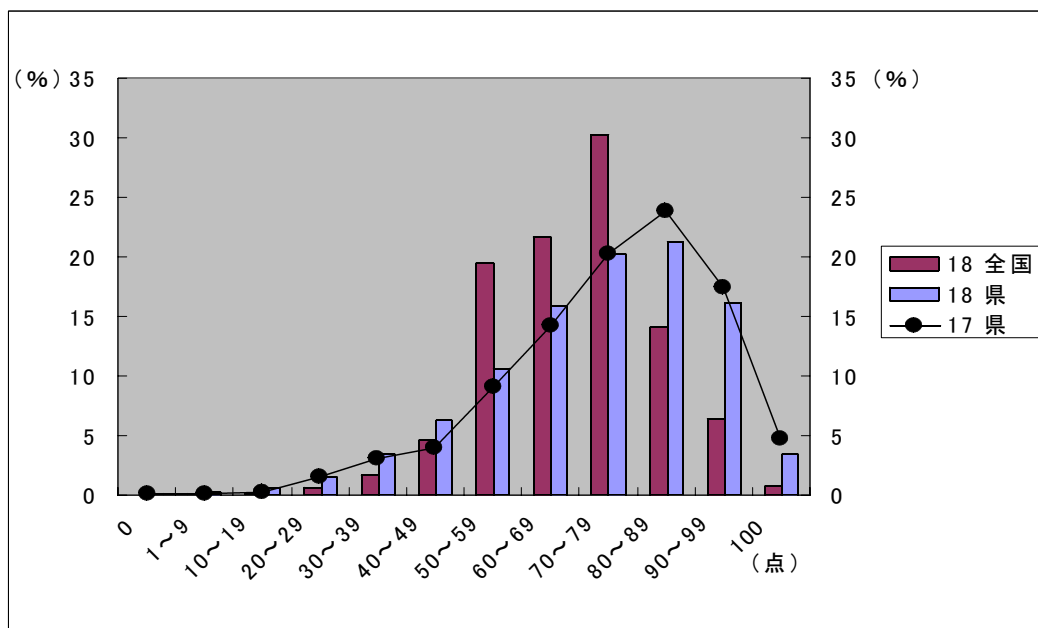
領域別の状況をみると、前年度と同じく「都道府県の様子」が全国平均よりも低くなっており、自分の住んでいる市町村や本県の特色について資料等も十分に活用させながら理解力や表現力の向上を図る必要がある。

小問別にみると、文章や用語を記述して答える問題では、無解答率が目立つので、ふだんの学習において自分の考えを書きながらまとめていく活動を意図的に取り入れていくことが大切である。

② 平均点

		記号	平成18年度			平成17年度		
			全国	宮崎県	全国との差	全国	宮崎県	全国との差
全 体	教科全体		70.1	71.8	1.7	70.4	72.6	2.2
	基礎		70.0	75.3	5.3	70.8	71.4	0.6
	応用		63.8	60.7	-3.1	68.0	77.5	9.5
観 点 別	社会的な思考・判断	A	63.1	84.0	20.9	63.5	76.8	13.3
	観察・資料活用の技能・表現	B	70.4	70.4	0.0	71.9	71.0	-0.9
	社会的事象についての知識・理解	C	71.1	67.6	-3.5	72.4	73.7	1.3
領 域 別	地域の人々の生活を支えるもの	a	68.4	70.3	1.9	69.6	73.5	3.9
	地域の人々の生活の移り変わり	b	85.6	87.6	2.0	85.1	84.1	-1.0
	都道府県の様子	c	64.8	61.0	-3.8	65.0	60.9	-4.1

③ 得点分布グラフ



④ 小問ごとの出題内容と通過率 [小学校第5学年 社会]

大問	小問	出題内容				平成18年度			平成17年度			
		設問事項	観点別	領域別	設問形式	設問比較	全国	宮崎県	全国との差	全国	宮崎県	全国との差
1	1	調査方法の判断	A	a	ア	□	70.3	87.4	17.1	64.5	75.3	10.8
	2	① 水が来る道	B	a	イ	◇	65.1	64.5	-0.6			
		② 浄水場の仕組み	B	a	ア	◇	77.2	79.1	1.9			
2	1	棒グラフの読み取り	B	a	ア	○	45.5	44.4	-1.1	60.0	48.5	-11.5
	2	水を守る工夫	A	a	ア	□	72.9	81.0	8.1	55.4	67.1	11.7
	3	水の確保	C	a	ア	□	60.3	50.2	-10.1	96.2	93.0	-3.2
	4	節水の工夫	A	a	ウ	□	49.4	55.8	6.4	80.0	76.0	-4.0
3	1	ごみ処理の方法	B	a	ア	○	89.3	90.3	1.0	91.3	91.1	-0.2
	2	ごみ処理の作業の流れ	C	a	イ	○	80.7	73.3	-7.4	74.3	74.6	0.3
	3	① 資源ごみの処理方法	B	a	ア	□	50.0	53.5	3.5	73.8	75.5	1.7
		② リサイクルをする理由	A	a	ア	□	86.3	93.1	6.8	79.6	86.0	6.4
4	1	ごみの始末の移り変わりとその背景	B	a	ア	○	59.6	60.6	1.0	58.8	61.0	2.2
	2	ごみを減らす工夫	A	a	ウ	○	75.6	80.8	5.2	82.1	84.2	2.1
5	1	博物館の利用方法	C	b	ア	○	88.3	82.7	-5.6	88.9	82.9	-6.0
	2	道具の年表の読み取り	B	b	ア	□	76.1	77.9	1.8	82.5	82.6	0.1
	3	① 昔の道具と今の道具	A, B	b	ア	◇	90.2	95.7	5.5			
		② 昔の道具と今の道具	A, B	b	ア	◇	88.4	94.1	5.7			
6	1	宮崎県の土地の様子	B	c	ア	○		67.6			69.6	
	2	宮崎県の土地の様子	B	c	ウ	○		44.7			44.0	
	3	宮崎県の人々の暮らし	C	c	ア	○		59.3			57.0	
	4	宮崎県と関係の深い国	B, C	c	ア	○		72.6			72.8	

※ 「観点別」 A 社会的な思考・判断 B 観察・資料活用の技能・表現 C 社会的事象についての知識・理解

※ 「領域別」 a 地域の人々の生活を支えるもの b 地域の人々の生活の移り変わり c 都道府県の様子

※ 「設問形式」 ア 記号選択 イ 記号整序 ウ 思考記述

※ 「設問比較」 ○印 昨年度と同一問題 □印 昨年度との類似問題 ◇印 今年度、新たに導入された問題

⑤ 領域別にみた指導方法の工夫改善の在り方

ア 地域の人々の生活を支えるもの

5問はほぼ全国平均であり、6問は全国平均よりも高かった。ただし、全国平均より高い「節水の工夫」、「資源ごみの処理方法」についての小問は、前年度の県平均と比べると20ポイント以上低くなっている。また、全国平均より低い2問のうち「水の確保」についての小問は、前年度の県平均より40ポイント以上低くなっている。

そこで、指導に当たっては、地域の人々の飲料水の確保や廃棄物の処理についての学習に際して、その対策や事業が生活や産業における安定供給や生活環境の維持のために広く他地域の人々の協力を得ながら計画的に進められていることを具体的に調べる活動を通してとらえさせることが大切である。また、水源を確保するために必要な森林保全や計画的なダムや浄水場の建設などの事業及び廃棄物の処理に関する処理の仕方や資源としての活用方法などを具体的に取り上げる工夫が必要である。さらに、節水や廃棄物の適切な処理など、資源の節約を意識した日常生活を送ることができるような指導も必要である。

イ 地域の人々の生活の移り変わり

3問が全国平均より高く、1問が全国平均よりも低い結果となっている。「博物館の利用方法」についての小問が昨年度と同じく通過率が低くなっている。

そこで、指導に当たっては、見学や調べ学習の際に、地域の博物館や郷土資料館などの各施設の利用目的をしっかりと理解させた上で、利用方法を具体的に指導する必要がある。

ウ 都道府県の様子

前年度と同一の宮崎県の地形、人々の暮らし、外国との関係についての出題であった。全国平均との差及び前年度との差ともほぼ全国平均と同じである。その中で、地図中に示された、縮尺を基に実際の距離を求める問題の通過率が低く、また無解答率も高かった。

そこで、指導に当たっては、調査・見学が困難な内容も多いので、県の地図や地図帳、収集した各種の資料などを活用し、白地図にまとめるなどして、県の概要や特色をとらえることができるような学習活動を工夫するとともに、地図活用の際には、方位と距離を用いて地理的位置関係をとらえる活動をできるだけ多く取り入れることが大切である。

(3) 算数

① 概要

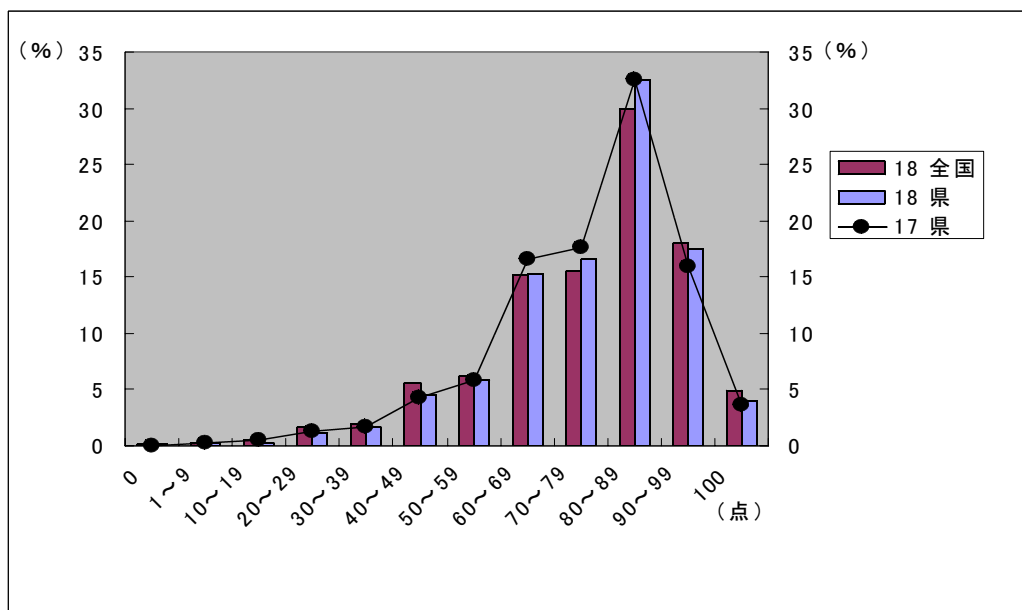
教科全体、各観点、各領域ともに全国平均とほぼ同じである。関心・意欲・態度については、前年度と同様全国平均より高い。小問別で見ると、「小数の減法」、「二等辺三角形の性質」が全国平均と比べると特に低い結果であった。昨年度低かった「ともなって変わる数量の関係を式で表す」については、全国平均より低いものの、前年度より13ポイント上がってきており指導の成果が表れてきている。

今後は、算数的活動を一層充実させ、具体的場面と関連させながら実感をともなって理解できるように指導していくことが大切である。また、系統性の強い教科であるため、児童の実態を的確に把握し、各学年の連携を図りながら継続した指導が必要である。

② 平均点

		記号	平成18年度			平成17年度		
			全国	宮崎県	全国との差	全国	宮崎県	全国との差
全 体	教科全体		75.4	76.2	0.8	74.0	75.7	1.7
	基礎		79.1	79.8	0.7	77.7	79.4	1.7
	応用		60.8	61.6	0.8	59.1	60.7	1.6
観 点 別	数学的な考え方	A	60.8	61.6	0.8	59.1	60.7	1.6
	数量や図形についての表現・処理	B	75.8	76.4	0.6	73.9	75.8	1.9
	数量や図形についての知識・理解	C	74.8	75.8	1.0	74.2	75.5	1.3
領 域 別	数と計算	a	81.9	82.9	1.0	81.2	82.9	1.7
	量と測定	b	81.4	82.8	1.4	80.2	81.7	1.5
	図形	c	59.5	60.3	0.8	59.1	60.5	1.4
	数量関係	d	70.1	70.2	0.1	66.7	68.4	1.7

③ 得点分布グラフ



④ 小問ごとの出題内容と通過率 [小学校第5学年 算数]

大問	小問	出題内容			平成18年度			平成17年度			
		設問事項	観点別	領域別	設問比較	全国	宮崎県	全国との差	全国	宮崎県	全国との差
1	1	小数の加法	B	a	○	95.3	95.0	-0.3	95.3	95.5	0.2
	2	小数の減法	B	a	○	63.3	58.2	-5.1	60.9	58.4	-2.5
	3	3位数÷1位数の計算	B	a	○	87.1	87.6	0.5	86.7	88.2	1.5
	4	3位数÷2位数の計算	B	a	○	79.6	79.6	0.0	79.6	80.2	0.6
	5	四則の混合した計算	B	d	○	64.0	65.1	1.1	56.8	67.1	10.3
2	1	四捨五入	B	a	○	82.5	86.9	4.4	78.0	84.9	6.9
	2	十進位取り記数法と数直線	C	a	○	86.1	84.4	-1.7	85.4	82.6	-2.8
	3	小数を相対的にとらえる	C	a	○	95.3	95.2	-0.1	94.5	96.2	1.7
	4	小数の大小	C	a	○	97.6	97.4	-0.2	97.5	97.9	0.4
	5	分数の大小	C	a	○	61.2	67.5	6.3	64.7	68.8	4.1
3	1	1回転の角度	C	b	○	89.6	91.2	1.6	86.4	87.9	1.5
	2	分度器の目盛りの読み取り	C	b	○	84.6	88.1	3.5	84.2	88.9	4.7
	3	長方形の面積	B	b	○	94.5	95.7	1.2	94.7	96.1	1.4
4	1	円の構成要素	C	c	○	80.2	88.0	7.8	78.2	86.2	8.0
	2	二等辺三角形の性質	C	c	○	55.2	51.0	-4.2	55.4	53.1	-2.3
	3	正三角形の作図	B	c	□	79.8	82.7	2.9	81.8	85.3	3.5
5	1	折れ線グラフの目盛りの読み取り	B	d	○	63.9	63.5	-0.4	63.0	62.8	-0.2
	2	折れ線グラフの変化の様子	B	d	○	82.0	82.6	0.6	80.3	82.2	1.9
	3	ともなう変わる数量の関係を式で表す	B	d	○	78.7	75.7	-3.0	71.5	62.5	-9.0
	4	数量の関係を式で表す	B	d	○	61.0	61.4	0.4	59.7	63.2	3.5
6	1	文章題：小数+小数の計算	A, B	a	○	92.0	93.1	1.1	91.8	93.5	1.7
	2	文章題：2位数÷1位数の計算	A, B	a	○	61.3	66.9	5.6	58.5	65.8	7.3
	3	複雑な図形の面積	A, B	b	○	56.9	56.1	-0.8	55.4	53.8	-1.6
	4	文章題：四則の混合した計算	A, B	d	○	70.7	72.6	1.9	68.7	72.6	3.9
	5	円・長方形の性質と図形の周の長さ	A, C	c	○	22.9	19.2	-3.7	21.1	17.6	-3.5

※ 「観点別」 A 数学的な考え方 B 数量や図形についての表現・処理 C 数量や図形についての知識・理解

※ 「領域別」 a 数と計算 b 量と測定 c 図形 d 数量関係

※ 「設問比較」 ○印 昨年度と同一問題 □印 昨年度との類似問題

※ 小学校算数では、「設問形式」については特には分析を行っていません。

⑤ 領域別にみた指導方法の工夫改善の在り方

ア 数と計算

領域全体では、全国平均との差、前年度との差ともほぼ同じである。小問別でみると、「四捨五入」「分数の大小」が全国平均より高く、「小数の減法」が全国平均よりも低い。前年度の通過率との比較においては、「四捨五入」「十進位取り記数法と数直線」以外はやや低くなってきている。

そこで、指導に当たっては、小数の計算については、整数の計算方法との関連を図りながら理解を深めさせ、小数点や位を意識しながら計算できるように丁寧に指導する必要がある。また、具体的な場面と関連づけながら、答えの見通しをもたせたり、式や計算のイメージづくりをさせたりしていくことも大切である。計算については、継続指導が大切であり、評価を生かしながら個別指導の時間を充実させていくことが重要である。

イ 量と測定

領域全体では、全国平均との差、前年度との差ともほぼ同じである。小問別でみると、「分度器の目盛りの読み取り」が全国平均よりやや高い。「複雑な図形の面積」については、前年度よりも2.3ポイント伸びてきているものの、全国平均よりやや低く、上位層と下位層の差の大きい設問である。特に、下位層の無解答率が11.5ポイントと高い。

そこで、指導に当たっては、児童が計算、面積の公式、考え方等などの段階でつまづいているのか把握し、個に応じた指導を展開していくことが必要である。また、授業の展開においては、実際に図形を分割しながら、長方形や正方形の面積を一つ一つ確認しながら求めていく丁寧な指導が大切である。さらに、多様な解法について話し合う場面を設定するなど、図形の見方や考え方を育てていくことも大切である。

ウ 図形

領域全体では、全国平均との差、前年度との差ともほぼ同じである。小問別でみると、「二等辺三角形の性質」が全国平均より低く、前年度よりも下がってきている。「円・長方形の性質と図形の周の長さ」も、全国平均よりやや低く、通過率も19.2ポイントと低い。

そこで、指導に当たっては、単なる知識として暗記させるのではなく、実際に図形を作ったり、比較したり、実測しながら図形の性質を発見させていくことが大切である。また、様々な角度から図形を観察したり、調べたりする活動を通して、学習した内容を別の場面や問題に活用したり、発展させたりする学習活動を取り入れていくことも大切である。

エ 数量関係

領域全体では、全国平均との差、前年度との差ともほぼ同じである。小問別でみると、「ともなって変わる数量の関係を式で表す」が全国平均よりやや低いものの、前年度より13.2ポイント伸びており指導の成果が表れてきている。「四則の混合した計算」については、全国平均とほぼ同じであるが、前年度よりもやや下がってきている。

そこで、指導に当たっては、四則の混合した計算については、具体的な場面と式を結びつけ、()、乗法、除法を用いた式が一つの数量を表していることを理解させながら、計算順序の約束を定着させていくことが大切である。また、段階を追った指導を展開することで、児童のつまづきに対応できるきめ細かい指導を心がけることも必要である。関数関係については、身の回りにある事象を用いて、グラフや表、式をそれぞれ作成し、それぞれの表現の関連を図りながら指導することが大切である。

(4) 理科

① 概要

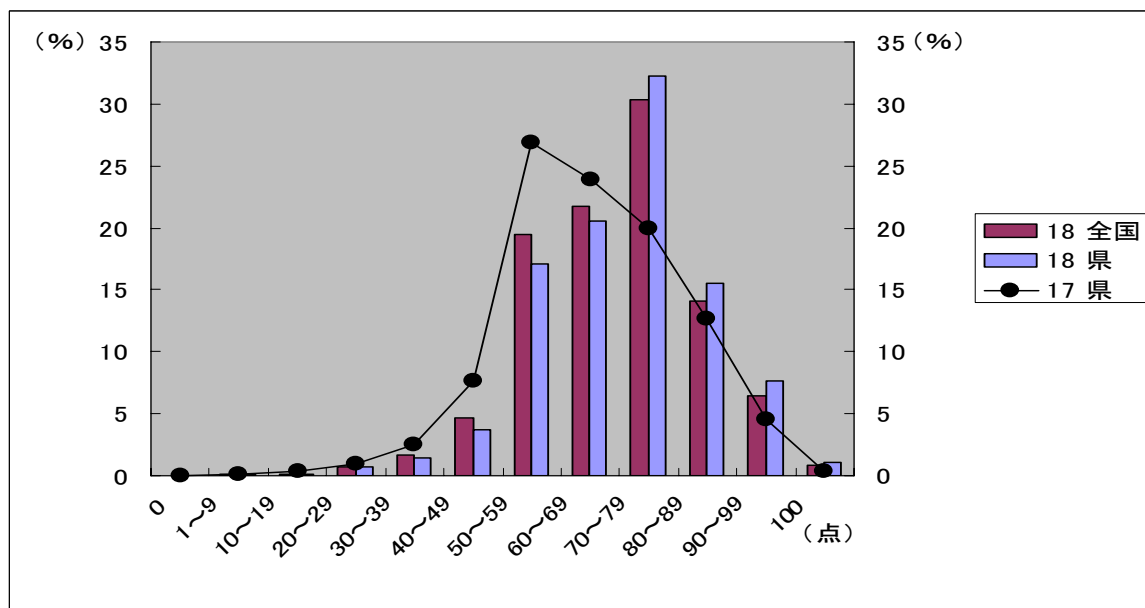
教科全体及び観点別、領域別すべての項目で、全国の平均より高いものの、統計的には、基礎的内容、応用的内容、全体を通して全国平均とほぼ同じである。観点別については、観察・実験の技能・表現が全国よりもやや高い。領域的には、A領域「生物とその環境」、B領域「物質とエネルギー」が全国よりもやや高い。また、前年度と比較し教科全体で平均が上がっているが、応用的な内容は平均点が下がっている。このことから、基礎的な内容については定着が図られてきている。観点別については、科学的な思考に関して、前年度より若干平均が下がっており、上位群の児童の平均と下位群の児童の平均の差がかなり大きくなっている。観察・実験の技能・表現が前年度より上がっていることから、授業において、観察・実験の指導の充実が図られたと考えられる。

今後は、実験や観察で得られた結果から考察を深めたり、得られた知識を関連付けて考えたり、得られた規則性からその仕組みを考えたりする指導の充実が求められる。

② 平均点

			平成 18 年			平成 17 年		
			記号	全国	宮崎県	全国差	全国	宮崎県
全 体	教科全体		69.0	70.6	1.6	65.5	65.3	-0.2
	基礎		74.6	76.2	1.6	69.7	69.5	-0.2
	応用		47.9	49.1	1.2	54.5	54.0	-0.5
観 点 別	科学的な思考	A	47.9	49.1	1.2	48.6	48.2	-0.4
	観察・実験の技能・表現	B	67.1	69.2	2.1	59.5	59.1	-0.4
	自然事象についての知識・理解	C	78.1	79.5	1.4	75.1	75.0	-0.1
領 域 別	生物とその環境	a	78.3	80.4	2.1	78.4	78.4	0.0
	物質とエネルギー	b	72.8	74.7	1.9	64.8	64.3	-0.5
	地球と宇宙	c	56.0	56.4	0.4	56.1	56.0	-0.1

③ 得点分布グラフ



④ 小問ごとの出題内容と通過率 [小学校第5学年 理科]

大問	小問	出題内容				平成18年度			平成17年度			
		設問事項	観点別	領域別	設問形式	設問比較	全国	宮崎県	全国との差	全国	宮崎県	全国との差
1	1	温度計の使い方	B	a	イ	□	51.5	52.0	0.5	46.9	46.9	0.0
	2	ヘチマの種のまき方	B	a	イ	○	75.6	81.2	5.6	78.2	78.3	0.1
	3	春の生き物	C	a	イ	□	87.3	89.7	2.4	89.4	89.3	-0.1
2	1	電池の極	C	b	イ	○	96.4	96.1	-0.3	96.2	96.1	-0.1
	2	直列つなぎ	A	b	オ	□	68.5	73.3	4.8	44.7	43.9	-0.8
	3	乾電池のつなぎ方	B	b	ア	□	43.1	49.4	6.3	45.5	44.8	-0.7
3	1	昆虫の卵	C	a	カ	○	97.3	97.9	0.6	97.8	97.8	0.0
	2	冬の生き物	A	a	ウ	□	79.8	81.5	1.7	79.8	71.4	-8.4
4	1	星座早見盤の使い方	B	c	イ	□	61.2	63.4	2.2	58.5	58.4	-0.1
	2	星座(オリオン座)	C	c	オ	○	83.3	82.1	-1.2	83.3	83.3	0.0
	3	星座と季節	C	c	カ	◇	65.2	66.7	1.5			
	4	星座の動き	C	c	イ	□	41.1	45.6	4.5	41.7	42.2	0.5
5	1	空気でっぼうの使い方	B	b	イ	□	88.1	86.6	-1.5	78.1	77.7	-0.4
	2	空気でっぼうのしくみ	C	b	エ	□	95.9	95.5	-0.4	83.7	83.2	-0.5
	3	空気でっぼうと水	C	b	エ	□	90.1	92.2	2.1	87.1	87.0	-0.1
	4	空気と水の性質の違い	A	b	ウ	□	37.8	41.9	4.1	45.6	44.8	-0.8
6	1	ものの温度とかさ	C	b	エ	○	77.7	80.6	2.9	78.3	78.2	-0.1
	2	あたためられた空気	A	b	ウ	○	29.1	27.3	-1.8	44.1	43.6	-0.5
	3	アルコールランプの操作方法	B	b	イ	◇	82.9	82.8	-0.1			
7	1	水の対流	C	b	イ	□	73.0	79.1	6.1	18.7	18.1	-0.6
	2	金属の棒のあたたまり方	C	b	イ	○	91.2	92.2	1.0	90.6	90.3	-0.3
8	1	水の沸騰	C	c	オ	□	47.6	49.8	2.2	56.2	55.9	-0.3
	2	水の状態と体積の変化	C	c	カ	○	69.3	65.7	-3.6	68.4	67.7	-0.7
	3	水の変化	A	c	ウ	□	24.3	21.3	-3.0	28.9	28.7	-0.2

※ 「観点別」 A 科学的な思考 B 観察・実験の技能・表現 C 自然事象についての知識・理解

※ 「領域別」 a 生物とその環境 b 物質とエネルギー c 地球と宇宙

※ 「設問形式」 ア 図表記述 イ 図表選択 ウ 文章記述 エ 文章選択 オ 用語記述 カ 用語選択

※ 「設問比較」 ○印 昨年度と同一問題 □印 昨年度との類似問題 ◇印 今年度新たに出题された問題

⑤ 領域別にみた指導方法の工夫改善の在り方

ア 生物とその環境

領域全体としては、全国平均より高く前年度よりも上がっており、上位群の児童と下位群の児童の平均の差は他の領域に比べて小さく、3領域の中では、定着が図られている領域といえる。

「温度計の使い方」は、昨年と比べ5ポイントほど上がったものの通過率が50ポイントと他の問題に比べて特に低い。その要因として、「温度計に直射日光を当ててはいけない」という条件を選択する絵からの確に読み取らなければならない点にある。また、「冬の生き物」は、文章の記述を求める問題であるが、前年度より10ポイント上がっている。この原因の一つとして無答の児童が減っていることがあげられる。

そこで、指導に当たっては、図や表などから何が読みとれるか、比較するものとのどこが同じでどこが違うのかなどの視点をはっきりさせて、情報を読み取る技能を身につけさせることが大切である。また、正否にこだわらず、自分の考えを文章として書くことの重要性を指導することも必要である。

イ 物質とエネルギー

領域全体としては、全国平均より高く、前年度よりも10ポイント近く上がっている。3領域の中では、定着が良くなった領域といえる。

「あたためられた空気」は、通過率27ポイントと前年度に比べて16ポイント下がっている。この要因として、「あたためられて空気は体積が増える」という規則性を日常生活に適応させて記述することの困難さがあげられる。また、「空気と水の性質の違い」や「乾電池のつなぎ方」も通過率は約50ポイント以下で、いずれも、文章や図を記述する問題である。一方、前年度、通過率が20ポイント以下だった「水の対流」は80ポイント近い通過率となり61ポイントも上がった。この要因として、選択する図が、教科書に描かれている図に類似した点があげられる。このことから「あたためられて水を上に移動する」という規則性から判断するのではなく、実験や教科書で見たイメージで判断している児童の実態が推測される。また「直列つなぎ」も73ポイントの通過率となり前年度より30ポイント近く上がった。この要因として、電池のつなぎの対象がリモコンから懐中電灯へと変化したことがあげられる。このことから、児童はその構造ではなく、単に見た目の電池の位置関係でつなぎ方を答えていることが推測できる。

そこで、指導に当たっては、学習した内容を日常生活の中で具体的に考えたり、事象の仕組みを説明したりする機会を設けることが必要である。また、図や絵などの具体物によるイメージによる理解だけでなく、その意味や関係、仕組みを考える機会を増やし抽象的思考を育成する必要がある。

ウ 宇宙と地球

領域全体としては、全国平均とほぼ同じで前年度と比べてもほぼ同じであったが、上位群と下位群の児童の差は他の領域に比べて大きく、前年度に比べその差が大きく広がっている。3領域の中では、最も指導の工夫が必要で、下位の児童の指導がポイントとなる領域である。

特に、「水の変化」は通過率21ポイントと低く前年度に比べて7ポイント下がった。また、「水の沸騰」については通過率50ポイントと昨年度に比べ6ポイント下がっている。その要因として、見えない水蒸気を、知覚できる湯気と取り違え、水と水蒸気概念が形成されにくいことがあげられる。また、「星座の動き」は通過率が45ポイントと低く、その要因として肉眼では確認しにくい長時間の星の動きを認識しなければならないというのに、実際の星の観察は夜間に家庭で行い、授業でその結果だけを確認する機会が多いこと点があげられる。

そこで、指導に当たっては、実際に観察を行ったり、デジタル素材を使って知覚できるものとして、理解させることはもちろん、見えない事象や時間的、空間的に把握することが難しい事象を、その仕組みを考えながら、目に見える図や絵や表として児童自身が表すことが大切である。

V 教科別分析結果
(中学校)

2 中学校第2学年

(1) 国語

① 概要

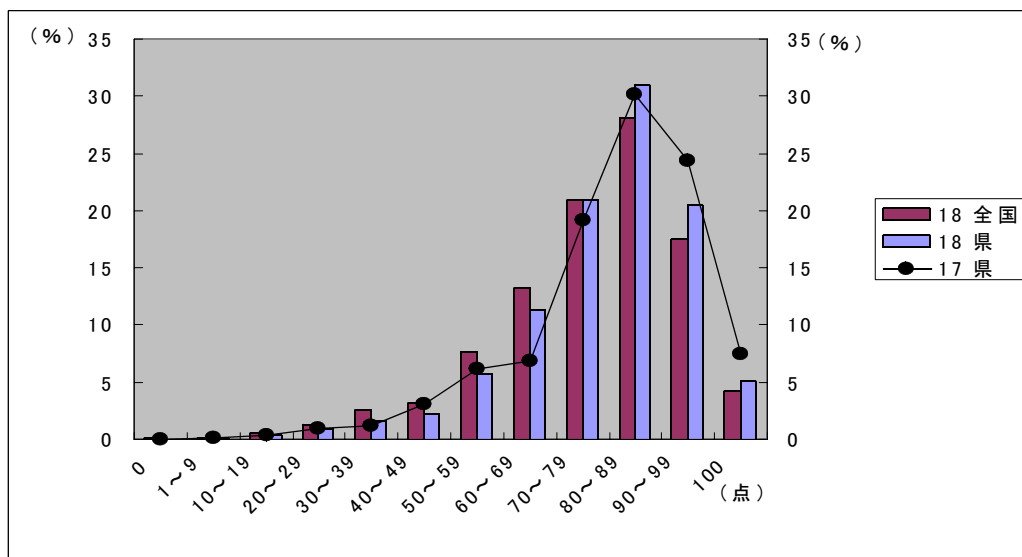
教科全体、各領域ともに全国平均よりやや高い。特に、「書くこと」は全国平均より4.9ポイント高い。また、関心・意欲・態度においても全国平均より高く、概ね満足できる結果であった。

今後は、説明的文章においては、因果関係や筆者の意見などに着目し、文章の構成や展開を的確にとらえ、文脈に即した内容の理解を図る指導、また、文学的文章においても、文章を豊かにしている工夫された表現などを意識させながら、登場人物の設定や心情の変化を読み取ったり、場面の情景、描写を的確にとらえたりする力を育てる授業の展開が必要である。

② 平均点

		記号	平成18年度			平成17年度		
			全国	宮崎県	全国との差	全国	宮崎県	全国との差
全 体	教科全体		76.4	79.2	2.8	77.8	80.6	2.8
	基礎		79.8	82.8	3.0	80.5	83.4	2.9
	応用		68.0	70.2	2.2	71.4	74.1	2.7
観 点 別	話す力・聞く力	A	84.9	86.4	1.5	84.1	86.4	2.3
	書く力	B	69.1	74.0	4.9	69.1	74.2	5.1
	読む力	C	70.0	72.0	2.0	69.8	72.3	2.5
	言語についての知識・理解・技能	D	79.1	82.6	3.5	82.8	85.8	3.0
領 域 別	音声言語	a	84.9	86.4	1.5	84.1	86.4	2.3
	説明的文章	b	67.7	69.1	1.4	66.8	68.9	2.1
	文学的文章	c	72.2	74.9	2.7	72.8	75.7	2.9
	言語事項	d	79.1	82.6	3.5	82.2	85.3	3.1

③ 得点分布グラフ



④ 小問ごとの出題内容と通過率〔中学校第2学年 国語〕

大問	小問	出題内容				平成18年度			平成17年度			
		設問事項	観点別	領域別	設問形式	設問比較	全国	宮崎県	全国との差	全国	宮崎県	全国との差
1	1	話題の順序の聞き取り	A	a	ア	○	88.8	89.9	1.1	89.1	90.7	1.6
	2	話し合いの内容の聞き取り	A	a	ア	○	90.1	90.0	-0.1	89.8	90.3	0.5
	3	話し合いの内容の聞き取り	A	a	ア	○	75.8	79.4	3.6	73.5	78.3	4.8
2	1	漢字の読み	D	d	/	○	92.9	94.7	1.8	93.6	95.6	2.0
	2	漢字の読み	D	d	/	○	94.4	94.8	0.4	94.5	95.4	0.9
	3	漢字の読み	D	d	/	○	94.9	96.7	1.8	95.3	96.8	1.5
	4	漢字の読み	D	d	/	○	77.3	85.6	8.3	79.6	87.0	7.4
	5	漢字の書き	D	d	/	○	71.1	76.2	5.1	77.0	81.8	4.8
	6	漢字の書き	D	d	/	○	77.0	82.5	5.5	76.6	80.7	4.1
	7	漢字の書き	D	d	/	○	80.6	83.4	2.8	81.2	83.6	2.4
	8	漢字の書き	D	d	/	◇	54.2	64.5	10.3	/	/	/
3	1	文節の区別	D	d	/	○	96.9	98.6	1.7	97.1	98.1	1.0
		主語の指摘	D	d	/	○	69.9	75.0	5.1	58.4	59.2	0.8
	2	述語の指摘	D	d	/	○	81.9	85.6	3.7	68.6	71.8	3.2
		文の成分	D	d	ア	○	64.0	67.2	3.2	78.5	81.0	2.5
	3	1 部首	D	d	ア	◇	54.2	52.0	-2.2	/	/	/
	3	2 部首	D	d	/	○	85.6	91.9	6.3	86.4	91.4	5.0
4	同音異義語	D	d	ア	◇	91.0	90.7	-0.3	/	/	/	
4	1	文脈に即した内容の理解	C	b	ア	○	58.1	57.9	-0.2	56.6	57.3	0.7
	2	適切な接続詞の選択	C, D	b	ア	○	92.9	93.0	0.1	92.4	93.3	0.9
	3	文脈に即した内容の理解と記述	C, B	b	エ	○	47.3	50.3	3.0	44.8	48.7	3.9
	4	文脈に即した内容の理解	C	b	ア	○	54.5	53.2	-1.3	54.2	53.7	-0.5
	5	主題に対する考えの記述	C, B	b	エ	○	85.8	90.9	5.1	85.8	91.4	5.6
5	1	文脈に即した内容の理解	C	c	ア	○	72.9	73.4	0.5	72.4	74.3	1.9
	2	文脈に即した内容の理解と記述	C, B	c	エ	○	68.4	71.2	2.8	70.1	74.9	4.8
	3	人物の心情の理解	C	c	ア	○	73.5	74.9	1.4	73.4	73.9	0.5
	4	比喩表現の理解	C	c	ア	○	71.5	71.6	0.1	72.4	73.5	1.1
	5	人物への助言の記述	C, B	c	エ	○	75.0	83.4	8.4	75.7	81.8	6.1

※ 「観点別」 A 話す・聞く B 書く C 読む D 言語についての知識・理解・技能

※ 「領域別」 a 音声言語 b 説明的文章 c 文学的文章 d 言語事項

※ 「設問形式」 ア 記号選択 イ 空欄補充（選択記述） ウ 空欄補充（思考記述） エ 思考記述

※ 「設問比較」 ○印 昨年度と同一問題 □印 昨年度との類似問題 ◇印 今年度、新たに導入された問題

⑤ 領域別にみた指導方法の工夫改善の在り方

ア 音声言語

3問中2問は全国平均よりやや高く、1問は全国平均とほぼ同じである。また、領域全体で前年度の県平均と比べるとほぼ同じとなっている。

そこで、指導に当たっては、聞くこと的能力を平常の授業においてさらに育てていくために、話の論理的な構成や展開に注意して的確に話したり聞いたりする活動や、話の要点を内容や目的に応じて簡潔にまとめたりするような活動を取り入れることが大切である。

イ 説明的文章

5問中「主題に対する考えの記述」は5.1ポイント全国平均より高く、また「文脈に即した内容の理解」はやや低く、他は全国平均とほぼ同じである。設問形式から見ると、記述式では全国平均より高いのに対し、選択式では全国平均とほぼ同じかやや低い結果となっている。文章の内容を踏まえて自分の考えをまとめて書く小問の無解答率は小問3が7.6ポイント、小問5が6.6ポイントである。また、領域全体で前年度の県平均と比べるとほぼ同じとなっている。

そこで、指導に当たっては、文章の中心の部分と付加的な部分を読み分けながら、文章の構成や展開、内容を的確にとらえる活動や、文章の要旨を的確にとらえて簡潔にまとめたりするような授業を継続していくことが必要である。

ウ 文学的文章

5問中「人物への助言の記述」が8.4ポイント全国平均より高く、また「比喩表現の理解」はほぼ同じであり、他は全国平均よりやや高い。小問5の無解答率は、全国平均が17.3ポイントであるのに対し、県平均は10.9ポイントとなっている。また、領域全体で前年度の県平均と比べるとやや低くなっている。

そこで、指導に当たっては、登場人物の設定や心情の変化を読み取ったり、場面の情景描写を的確にとらえたりする活動を中心としながら、文脈上の語句の意味や用法の的確な理解、比喩、倒置、体言止めなど、文章を豊かにしている工夫された表現などにも目を向けさせる指導が必要である。また、自分の考えを簡潔にまとめて書くような場面を授業中に計画的に位置付けていくことが大切である。

エ 言語事項

ほとんどの小問で全国平均より高く、領域全体では3.5ポイント高い。また、前年度ほぼ全国平均と同じであった「主語の指摘」の小問は5.1ポイント上回り、定着が図られている。しかし、今年度新たに導入された部首、同音異義語の問題では、2問とも全国平均よりやや低い。また、領域全体では前年度の県平均と比べるとやや低くなっている。

そこで、指導に当たっては、全ての言語活動の指導の中で、基礎・基本としての言語事項の指導を恒常的に取り扱うとともに、文節、同音異義語、部首などの指導に当たっては、小テストなどの取り立て指導や他領域と横断的に関連付けた指導などを計画的に位置付けていくことが重要である。

(2) 社会

① 概要

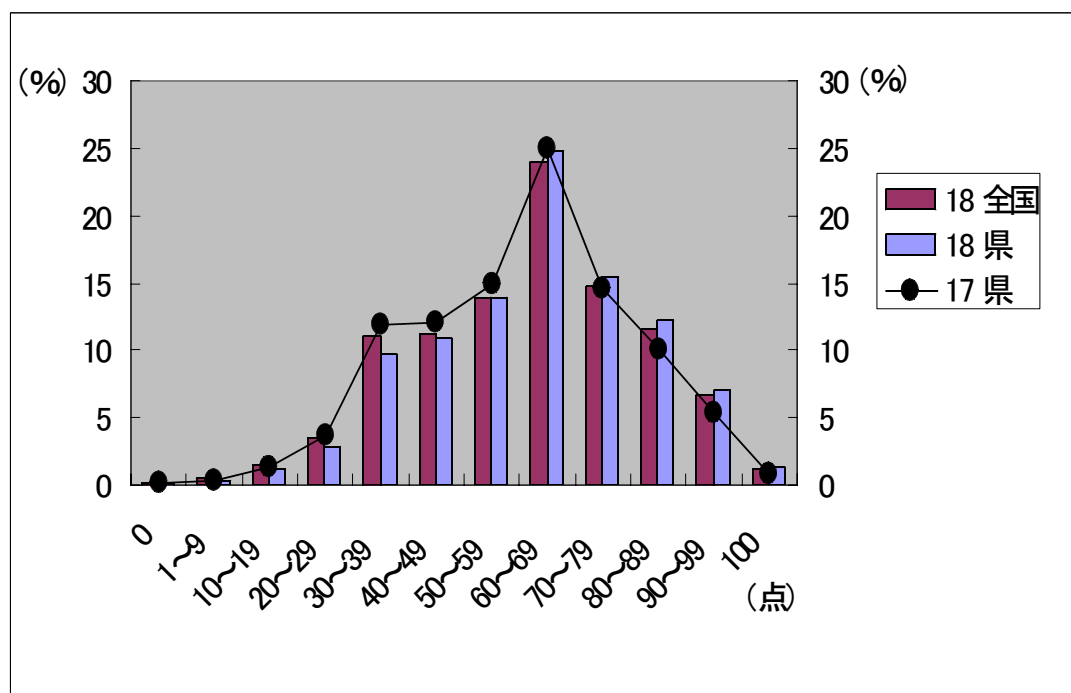
教科全体・各領域ともに全国平均とほぼ同じであるが、前年度に引き続き、「日本の地域構成」の領域で正答した生徒の割合が全国平均よりやや低い結果がみられる。教科に関する関心・意欲・態度は全国平均をやや上回っている。

今後は、今まで以上に地図を活用して、国土の位置や領域の特色を具体的にとらえるとともに各都道府県への関心を一層高め理解を深める工夫が必要である。また生徒の問題解決的な学習などの主体的な学習を展開することにより、資料活用能力・態度の育成に意を用いる必要がある。

② 平均点

		記号	平成18年度			平成17年度		
			全国	宮崎県	全国との差	全国	宮崎県	全国との差
全 体	教科全体		61.8	63.2	1.4	59.9	60.6	0.7
	基礎		62.5	64.4	1.9	60.6	61.6	1.0
	応用		59.8	60.0	0.2	58.1	58.4	0.3
観 点 別	社会的な思考・判断	A	68.2	68.2	0.0	64.2	64.6	0.4
	観察・資料活用技能・表現	B	69.6	71.3	1.7	68.5	69.6	1.1
	社会的事象についての知識・理解	C	59.7	61.2	1.5	57.4	58.3	0.9
領 域 別	世界と日本の地域構成	a	59.5	60.5	1.0	55.3	55.5	0.2
	地域の規模に応じた調査	b	72.9	75.1	2.2	69.9	71.4	1.5
	歴史の流れと地域の歴史・古代までの日本	c	63.2	65.0	1.8	63.9	65.3	1.4
	中世の日本	d	56.3	57.1	0.8	55.2	55.8	0.6

③ 得点分布グラフ



④ 小問ごとの出題内容と通過率 [中学校第2学年 社会]

大問	小問	出題内容					平成18年度			平成17年度		
		設問事項	観点別	領域別	設問形式	設問比較	全国	宮崎県	全国との差	全国	宮崎県	全国との差
1	1	海洋の分布	B, C	a	ア	○	73.2	75.9	2.7	75.5	76.9	1.4
	2	大陸の分布	B, C	a	ア	○	73.2	77.2	4.0	73.7	76.0	2.3
	3	時差	B	a	ア	○	48.3	49.3	1.0	49.8	49.9	0.1
2	1	世界の国々の姿	A, C	a	ア	□	85.9	85.7	-0.2	51.6	52.1	0.5
	2	南アメリカの姿	B, C	a	エ	○	69.0	74.3	5.3	71.3	72.0	0.7
3	1	日本の領域	C	a	ア	○	47.6	46.8	-0.8	43.2	42.4	-0.8
	2	日本の経済水域	C	a	ア	□	38.2	37.6	-0.6	35.7	35.4	-0.3
4	1	都道府県の姿(石川県)	C	a	ア	○	38.3	35.8	-2.5	35.2	33.6	-1.6
	2	都道府県の姿(青森県)	C	a	ア	○	61.6	62.4	0.8	61.5	61.2	-0.3
5	1	地図記号	C	b	ア	○	59.5	63.6	4.1	56.0	58.7	2.7
	2	グラフの作図	B	b	エ	○	84.9	86.2	1.2	82.0	82.7	0.7
	3	地域の変化の考察	A, B	b	ア	○	74.2	75.6	1.4	71.7	72.7	1.0
6	1	身近な地域の歴史を調べる	A, B	c	ア	○	79.7	79.5	-0.2	81.3	81.9	0.6
7	1	文明の起こり	C	c	イ	○	86.3	92.3	6.0	88.6	92.1	3.5
	2	大和朝廷の成立	C	c	ア	□	58.7	60.3	1.6	53.7	55.3	1.6
8	1	聖徳太子の国づくり	A, B, C	c	ア	○	59.9	59.7	-0.2	61.1	61.8	0.7
	2	律令国家における農民の生活	C	c	ア	○	45.8	46.8	1.0	46.0	46.7	0.7
	3	藤原氏の政治	B, C	c	ウ	○	58.9	63.0	4.1	63.4	66.8	3.4
	4	律令国家の変化	C	c	ア	○	53.2	53.6	0.4	53.2	52.9	-0.3
9	1	鎌倉幕府の成立	C	d	ア	○	42.6	44.3	1.7	42.2	43.4	1.2
	2	武家と公家の関係	B, C	d	ア	○	69.4	70.9	1.5	68.2	69.8	1.6
	3	人々の暮らしと信仰	A, B, C	d	ア	○	58.9	58.2	-0.7	55.1	54.8	-0.3
	4	元寇と鎌倉幕府	C	d	ア	○	54.2	55.2	1.0	55.2	55.1	-0.1

※ 「観点別」 A 思考・判断 B 技能・表現 C 知識・理解

※ 「領域別」 a 世界と日本の地域構成 b 地域の規模に応じた調査 c 歴史の流れと地域の歴史・古代までの日本 d 中世の日本

※ 「設問形式」 ア 記号選択 イ 空欄補充 ウ 空欄補充(思考記述) エ 描画・作図

※ 「設問比較」 ○印 昨年度と同一問題 □印 昨年度との類似問題 ◇印 今年度、新たに導入された問題

⑤ 領域別にみた指導方法の工夫改善の在り方

ア 世界と日本の地域構成

「世界の地域構成」に関しては、1つの小問をのぞいて全国平均よりやや高く、前年度と比較しても全国との差は大きくなっている。しかし、「日本の地域構成」の領域では、全国平均よりやや低い小問が4問中3問あり、全国との比較では前年度同様、すべての領域の中で最も低い結果となっている。

そこで、指導に当たっては、地球儀や世界地図を活用して地球表面の姿を大まかにとらえさせるとともに、日本地図を活用して我が国の国土について、その領域・特色を十分に理解させることが必要である。都道府県や都道府県庁所在地についても特色にふれながら生徒の興味・関心を喚起させ、各地の生活・文化を大観させることが大切である。

イ 地域の規模に応じた調査

この領域に関しては、すべての小問が全国平均よりやや高く、前年度、通過率の低さを指摘した地図記号の小問を含めて、前年度に比較して3～5ポイント高くなっている。作図の小問も全小問中2番目に高い通過率である。

そこで、指導に当たっては、地図や統計その他の資料に親しむ機会をより多くし、身近な地域に対する理解と関心を一層深めさせていく工夫を続けていくことが大切である。

ウ 歴史の流れと地域の歴史・古代までの日本

この領域に関しては、全体的には全国平均とほぼ同じであるが、「律令国家における農民生活の生活」「律令国家の変化」の小問はこの領域の中では通過率が低い結果が出ている。

そこで、指導に当たっては、史跡や博物館・資料館の見学・調査を取り入れ、生徒の興味・関心を高める工夫を行いながら、それぞれの時代の特色や人々の生活の変化について多面的・多角的に考察できるようにしなければならない。その際、図版資料等の視覚的資料を活用することが大切である。

エ 中世の日本

この領域に関しては、ほぼ全国平均と同じである。しかし、全体的に通過率が低い。特に「鎌倉幕府の成立」に関する小問は44.3ポイントと前年度同様、低い結果である。

そこで、指導に当たっては、歴史を学ぶ際の基本は時代の全体像の把握であるということに特に留意して、前の時代との比較をしたり絵や文献などの歴史資料を活用するなどの工夫をして、歴史の流れを大きく理解させることが重要である。

(3) 数学

① 概要

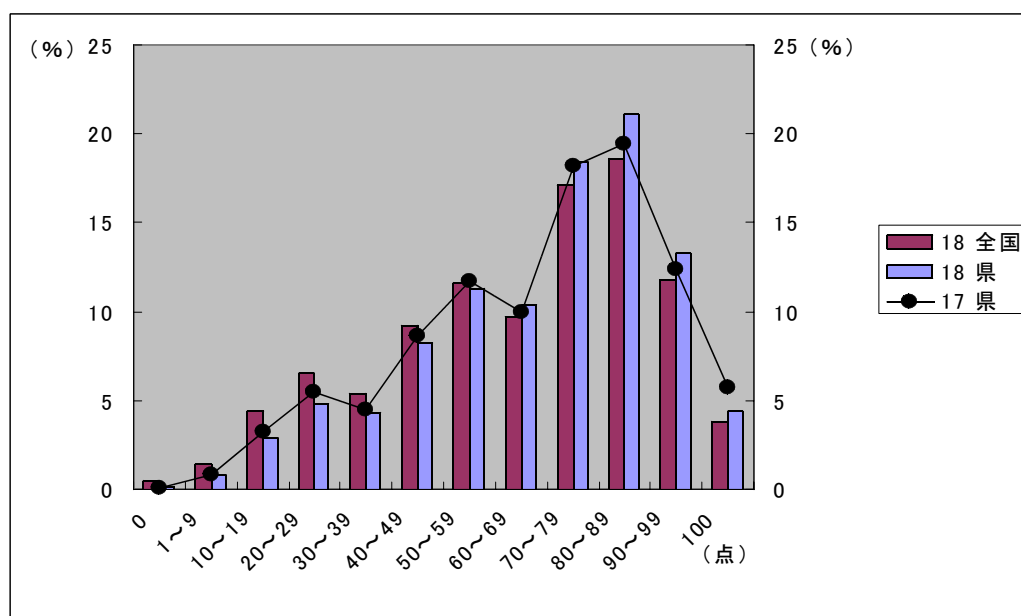
教科全体では、全国平均よりやや高い。領域別では、「数と式」の領域は高いが、「図形」の領域では、全国平均とほぼ同じである。関心・意欲・態度は前年度同様高く、概ね満足できる結果であった。

小問別でみると、「線対称な図形」、「円の構成要素」、「事象の中の比例関係」が全国平均と比べると低い結果であった。今後は、いろいろな角度から図形を見る習慣を身に付けさせるとともに、直観的な見方や考え方を深め、実生活と数学との関連を意識させることが必要である。

② 平均点

		記号	平成18年度			平成17年度		
			全国	宮崎県	全国との差	全国	宮崎県	全国との差
全 体	教科全体		64.7	68.6	3.9	63.0	67.8	4.8
	基礎		67.4	71.7	4.3	64.1	68.8	4.7
	応用		53.0	55.2	2.2	58.2	63.4	5.2
観 点 別	数学的な見方や考え方	A	53.0	55.2	2.2	58.2	63.4	5.2
	数学的な表現・処理	B	61.4	66.6	5.2	59.6	64.8	5.2
	数量・図形などについての知識理解	C	71.6	74.1	2.5	68.2	72.2	4.0
領 域 別	数と式	a	67.7	73.0	5.3	63.1	69.9	6.8
	図形	b	70.7	71.5	0.8	69.9	70.6	0.7
	数量関係	c	53.6	57.3	3.7	56.0	60.1	4.1

③ 得点分布グラフ



④ 小問ごとの出題内容と通過率 [中学校第2学年 数学]

大問	小問	出題内容				平成18年度			平成17年度		
		設問事項	観点別	領域別	設問比較	全国	宮崎県	全国との差	全国	宮崎県	全国との差
1	1	絶対値の意味の理解	A	a	○	66.3	70.6	4.3	64.2	70.8	6.6
	2	文字式における係数	A	a	○	77.9	87.4	9.5	49.9	66.6	16.7
	3	等式の性質	A	a	○	71.1	72.8	1.7	69.2	72.5	3.3
	4	文字式の表し方	A	a	○	66.4	72.3	5.9	63.8	72.5	8.7
2	1	正の数・負の数の減法	B	a	○	85.7	89.5	3.8	84.9	89.5	4.6
	2	累乗の計算	B	a	○	63.3	68.7	5.4	63.9	68.8	4.9
	3	正の数・負の数の四則混合計算	B	a	○	66.5	74.7	8.2	75.1	80.9	5.8
	4	一次式の減法	B	a	○	65.7	72.5	6.8	63.2	71.8	8.6
	5	文字式への値の代入	B	a	○	75.7	81.4	5.7	71.8	76.5	4.7
	6	一次方程式	B	a	○	71.6	77.9	6.3	70.9	75.4	4.5
3	1	線対称な図形	A	b	○	76.0	74.3	-1.7	75.6	72.7	-2.9
	2	円の構成要素	A	b	○	59.7	58.2	-1.5	58.3	59.0	0.7
	3	垂直二等分線の作図方法	A	b	○	73.7	74.5	0.8	72.9	74.9	2.0
	4	点対称な図形における対応する辺	B	b	○	89.9	91.4	1.5	90.3	91.9	1.6
	5	正四角錐の体積	B	b	○	35.8	41.3	5.5	36.5	39.2	2.7
4	1	座標の意味の理解	A	c	○	85.5	89.9	4.4	85.8	89.4	3.6
	2	事象の中の比例関係	A	c	○	48.2	47.0	-1.2	49.1	51.9	2.8
	3	反比例の関係を表す式	A	c	○	73.7	78.3	4.6	74.9	78.1	3.2
	4	比例のグラフの式	B	c	○	41.2	47.8	6.6	39.2	44.1	4.9
	5	比例の表と式	B	c	○	50.8	56.5	5.7	50.6	56.3	5.7
5	1 1	数量の関係を式で表現	B	a	○	70.0	76.1	6.1	44.7	52.0	7.3
	1 2	数量の関係を式で表現	C	a	□	27.3	27.0	-0.3	32.2	38.3	6.1
	2 1	具体的事象から一次方程式を解く	C	a	○	72.6	78.3	5.7	72.9	78.6	5.7
	2 2	具体的事象から一次方程式を解く	B	a	○	67.3	73.1	5.8	67.9	73.4	5.5
	3 1	具体的な事象と反比例	B, C	c	◇	37.3	40.8	3.5	51.4	60.2	8.8
	3 2	具体的な事象と反比例	B, C	c	◇	38.9	40.5	1.6	36.3	40.6	4.3
	4	サイコロの展開図の作図	A, C	b	○	89.1	89.4	0.3	86.0	85.9	-0.1

※ 「観点別」 A 数量・図形などについての知識・理解 B 数学的な表現・処理 C 数学的な見方や考え方
 ※ 「領域別」 a 数と式 b 図形 c 数量関係
 ※ 「設問比較」 ○印 昨年度と同一問題 □印 昨年度との類似問題 ◇印 今年度、新たに導入された問題
 ※ 中学校数学では、「設問形式」については特には分析を行っていません。

⑤ 領域別にみた指導方法の工夫改善の在り方

ア 数と式

ほとんどの小問で全国平均より高いが、前年度と比較すると、14問中9問の通過率が低くなっており、「数と式」領域における基礎・基本の定着を更に図る必要がある。

そこで、指導に当たっては、数量関係を式で表現する問題については、条件を数式化し問われていることが何であるか、しっかりと文章を読みとることが必要である。また計算については、等式の性質などしっかりと理解させた上で、確認テストや小テストなどを行い、年間を通して繰り返し練習することで、速く正確に処理する力を定着させたい。正負の計算や絶対値の問題については、用語の意味を理解させることは勿論であるが、数直線を利用して考えたり、計算結果を確かめるなどの指導も必要である。さらに、途中の式を丁寧に書かせることで、不注意による誤りを防ぐ習慣を身に付けさせることが大切であり、生徒の実態把握と個別指導の時間を充実させるとともに、継続した指導が重要である。

イ 図形

領域全体で見ると全国平均とほぼ同じであるが、小問別の通過率では6問中2問が、全国平均より低く、他の領域と比べて最も低い結果である。

そこで、指導に当たっては、対称については、図形をかいたり、実際に紙を折ったり、回転させたりするなどの数学的活動を取り入れることなどによって、線対称と点対称の違いなどを十分に理解させる指導が重要である。また、コンパスと定規を使って、角の二等分線、線分の垂直二等分線や垂線などの基本的な作図はしっかりと身に付けさせる必要がある。立体の展開図にも慣れるように、模型を作ったり、実験したりするなど数学的活動の場を取り入れていく必要がある。

ウ 数量関係

領域全体で見ると全国平均よりやや高いが、比例や反比例の問題は前年度同様低かった。

そこで、指導に当たっては、2つの数量の変化や対応を調べたり、比例や一次関数などを学習する際には、常に表と式、グラフを十分に関連づけながら、理解を深めさせることが大切である。また、数量の変化の様子をグラフに表すことによさや、グラフを利用して、問題解決を図ることのよさに気づくような指導が必要である。さらに、単に結果を出すだけでなく、その結果は何を根拠にどのような手順で導き出したのか、その過程で既習の知識をどのように生かしたかなど、自分なりの考えを筋道立てて説明したり、結果を導く過程を振り返ったりする活動を充実させる必要がある。

(4) 理科

① 概要

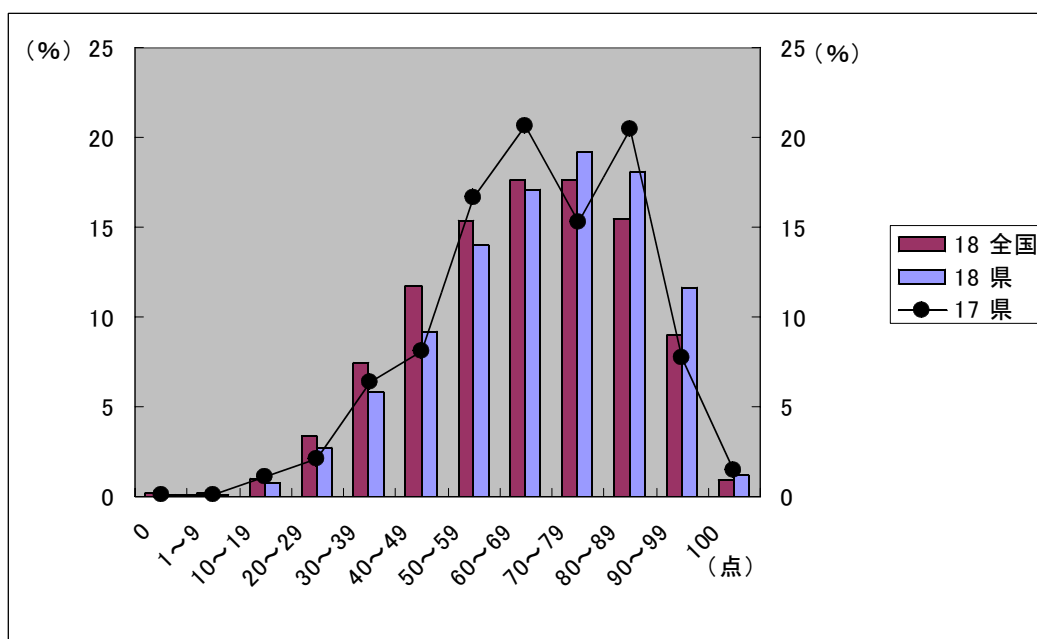
教科全体、各領域ともに全国平均よりやや高い。観点別にみると「自然事象についての知識・理解」が全国と比較してやや高く、基礎的・基本的な内容の定着が図られている。領域別にみると「身の回りの物質」・「植物の生活と種類」が全国との差において、前年度よりも大きく、指導の充実が図られていると考えられる。また、理科に関する関心・意欲・態度については、自然事象を「おもしろい」と感じたり実験や観察に積極的に取り組んだりする生徒が8割を超えている。しかし、「大地の変化」の領域では、全国平均よりやや高いものの、前年度の状況と比較して、改善されているとは言えない。

今後は、特に「大地の変化」の領域で、身近な地形、地層、岩石などの観察を通して、学習内容の定着を図るための指導の工夫を行うことが大切である。

② 平均点

		記号	平成18年度			平成17年度		
			全国	宮崎県	全国との差	全国	宮崎県	全国との差
全 体	教科全体		63.0	66.3	3.3	65.0	66.5	1.5
	基礎		66.2	69.9	3.7	65.9	67.3	1.4
	応用		54.0	56.5	2.5	63.0	64.7	1.7
観 点 別	科学的な思考	A	53.2	56.1	2.9	57.7	59.4	1.7
	観察・実験の技能・表現	B	65.1	67.8	2.7	65.9	66.8	0.9
	自然事象についての知識・理解	C	67.6	71.9	4.3	68.6	70.5	1.9
領 域 別	身近な物理現象	a	60.5	63.2	2.7	62.6	64.4	1.8
	身の回りの物質	b	62.4	67.3	4.9	67.0	68.2	1.2
	植物の生活と種類	c	62.5	66.7	4.2	62.9	65.0	2.1
	大地の変化	d	66.2	67.4	1.2	68.4	69.0	0.6

③ 得点分布グラフ



④ 小問ごとの出題内容と通過率 [中学校第2学年 理科]

大問	小問	出題内容				平成18年度			平成17年度			
		設問事項	観点別	領域別	設問形式	設問比較	全国	宮崎県	全国との差	全国	宮崎県	全国との差
1	1	実像と虚像	C	a	エ	○	59.7	62.2	2.5	59.9	62.2	2.3
	2	凸レンズの距離と実像の大きさ	B	a	エ	○	57.4	59.0	1.6	57.9	59.4	1.5
	3	焦点距離	A	a	ク	○	21.4	22.8	1.4	23.7	23.7	0.0
2	1	2力のつりあい	C	a	ウ	○	59.5	65.8	6.3	63.8	68.2	4.4
	2	2力がつりあっている時の性質	B	a	ク	○	92.6	93.9	1.3	93.0	93.8	0.8
	3	物体にはたらく力	A	a	ウ	○	72.4	75.6	3.2	77.4	79.4	2.0
3	1	子房	C	c	カ	○	66.9	72.3	5.4	65.7	68.7	3.0
	2	植物名とその分類	A	c	カ	◇	72.3	77.1	4.8			
	3	植物の特徴と分類	C	c	カ	○	86.4	89.8	3.4	87.5	89.7	2.2
	4	合弁花と離弁花	A	c	カ	○	49.9	54.7	4.8	53.1	55.1	2.0
4	1	蒸散のはたらき	C	c	カ	○	64.2	67.9	3.7	64.5	67.0	2.5
	2	蒸散と気孔	C	c	イ	○	71.0	72.5	1.5	68.6	70.1	1.5
	3	葉と蒸散の関係	A	c	イ	□	42.0	45.6	3.6	49.6	51.3	1.7
	4	顕微鏡の使い方	B	c	エ	○	58.1	60.8	2.7	59.4	59.6	0.2
	5	顕微鏡における低倍率と高倍率の特徴	B	c	エ	○	51.9	59.7	7.8	55.3	58.5	3.2
5	1	気体を発生させる方法	C	b	カ	○	63.2	68.5	5.3	68.0	69.6	1.6
	2	気体の発生	A	b	イ	○	77.6	80.5	2.9	82.9	83.5	0.6
	2	気体の発生	A	b	ウ	○	46.6	48.9	2.3	55.2	57.3	2.1
	3	発生した気体の特定	B	b	ウ	◇	75.1	80.9	5.8			
6	1	水の状態変化	C	b	エ	○	61.3	63.9	2.6	63.5	63.5	0.0
	2	融点	C	b	オ	◇	45.1	55.8	10.7			
	3	水の状態変化とグラフ	B	b	イ	○	67.3	67.0	-0.3	59.5	59.6	0.1
	4	沸騰石のはたらき	B	b	ウ	○	63.1	72.9	9.8	72.7	75.5	2.8
7	1	地層の様子	C	d	エ	○	75.7	79.8	4.1	80.0	81.5	1.5
	2	堆積の順番	B	d	イ	○	62.9	64.6	1.7	60.8	62.2	1.4
8	1	火山灰の観察方法	B	d	エ	○	39.0	35.4	-3.6	31.7	29.9	-1.8
	2	鉱物の種類	C	d	カ	○	80.2	76.5	-3.7	69.1	67.5	-1.6
9	1	地震	C	d	オ	○	78.4	87.7	9.3	83.6	86.9	3.3
	2	震源	B	d	イ	○	84.3	84.0	-0.3	85.2	85.9	0.7
	3	地震の規模と震度	A	d	エ	◇	43.6	43.6	0.0			

※「観点別」 A 科学的な思考 B 観察・実験の技能・表現 C 自然事象についての知識・理解
 ※「領域別」 a 身近な物理現象 b 身の回りの物質 c 植物の生活と種類 d 大地の変化
 ※「設問形式」 ア 図表記述 イ 図表選択 ウ 文章記述 エ 文章選択 オ 用語記述 カ 用語選択 キ 数値記述 ク 数値選択
 ※「設問比較」 ○印 昨年度と同一問題 □印 昨年度との類似問題 ◇印 今年度、新たに導入された問題

⑤ 領域別にみた指導方法の工夫改善の在り方

ア 身近な物理現象

ほとんどの小問で全国平均よりやや高い。また、「物体にはたらく力」の単元では、2力のつり合いの条件やつり合う力の図示に関して、全国平均と比較して通過率が高く、基礎・基本の定着が図られている。しかし、「焦点距離」に関する小問では、全国平均と同程度であるが、前年度と同様、通過率が22.8ポイントと依然として低い状況である。

そこで、指導に当たっては、凸レンズのはたらきについての指導を徹底する必要がある。特に、実験を通して、物体と凸レンズの距離を変え、実像と虚像ができる条件を探らせ、実像の位置や大きさについての規則性を定性的に見いださせる授業の工夫が望まれる。

イ 身の回りの物質

4領域の中で、最も定着が図られていた領域であり、ほとんどの小問で全国平均よりやや高い。また、「融点」や「沸騰石のはたらき」の記述式の小問では、全国平均を10ポイント程度上回っており、定着が図られている。しかし、「融点」や「発生した気体の性質」の無解答率が、それぞれ14.9ポイント、12.7ポイントと高い状況である。また、「水の状態変化とグラフ」の小問では、全国平均よりやや低く、前年度同様、定着が不十分な状況である。

そこで、指導に当たっては、水の特徴を理解させる実験を通して、加熱を続けた水の状態変化についてのグラフを読み取る力を身に付けたり、基本的な用語や自然事象の理由等を説明するための表現力を育成する指導が望まれる。

ウ 植物の生活と種類

すべての小問で全国平均より高い。また、「子房」と「顕微鏡における低倍率と高倍率の特徴」の小問では、全国平均を5ポイント程度上回っており、基礎・基本の定着が図られている。しかし、「葉と蒸散の関係」の小問では、全国平均よりやや高いが、45.6ポイントの通過率であり、また、前年度との類似問題との比較においても定着が不十分な状況である。

そこで、指導に当たっては、葉が多量な水を蒸散する器官であることを、葉の断面や気孔などの観察や蒸散に関する実験の結果や作成したグラフなどと関連付けて理解させるとともに、葉以外の部分からの蒸散量についてもふれることが必要である。

エ 大地の変化

領域全体で見るとほぼ全国平均と同じである。「地震」の小問では、通過率が前年度よりも6ポイント、全国平均よりも9ポイント以上高く、基礎・基本の定着が図られている。しかし、「火山灰の観察方法」、「鉱物の種類」、「震源」においては全国平均よりやや低かった。特に「火山灰の観察方法」、「鉱物の種類」については、前年度との比較においても全国平均との差が大きくなっている。

そこで、指導に当たっては、火山灰などの噴出物が、性質の異なる何種類かの粒からなっていることを、比較・観察をとおして理解させたり、観察の際の注意事項とその理由等についてもあわせて指導したりすることが大切である。

(5) 英語

① 概要

教科全体、各領域とも平均点が全国平均よりやや高い。また、教科に関する関心・意欲・態度についても、各設問に肯定的な回答をした生徒の割合が全国平均よりやや高く、教科全体として前年度に引き続き概ね満足できる結果である。

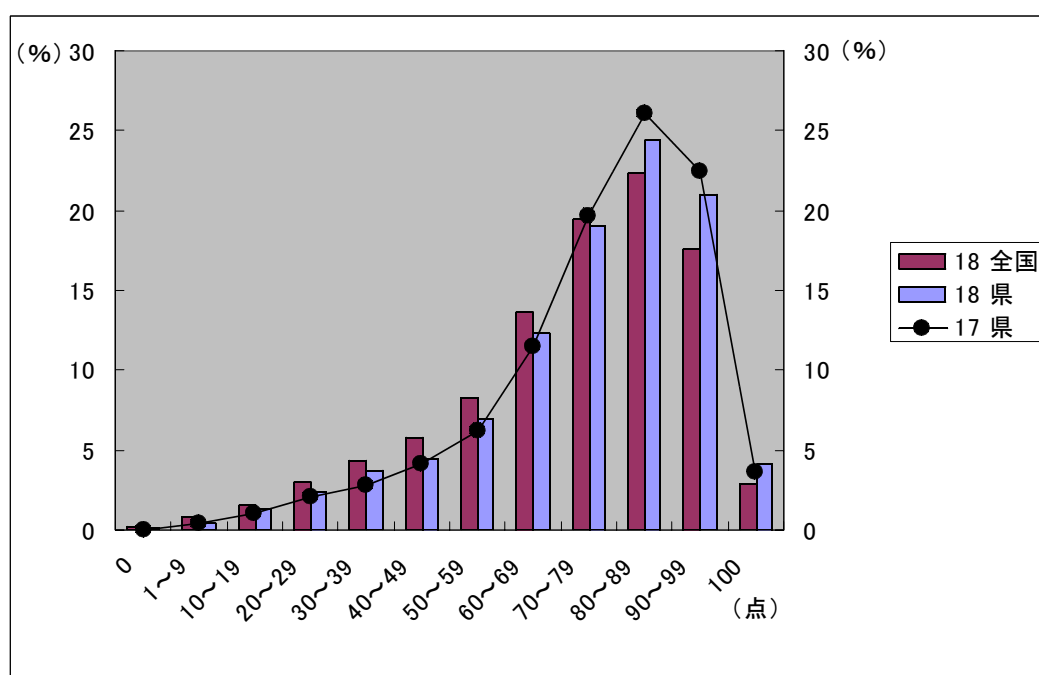
観点別にみると、「理解」が良好な結果であるのに対し、「表現」にやや課題が残る。中でも、「文法・表現・英作文」における、英語的表現や英作文の通過率が低い。

今後は、英問英答を日常的に行うことを通じて、英語の表現に慣れさせたり、テーマを指定して、つながりのある複数の英文を書かせたりすることが大切である。

② 平均点

		記号	平成18年度			平成17年度		
			全国	宮崎県	全国との差	全国	宮崎県	全国との差
全 体	教科全体		71.3	74.3	3.0	73.5	75.7	2.2
	基礎		80.0	82.4	2.4	82.4	84.6	2.2
	応用		62.0	65.7	3.7	64.0	66.3	2.3
観 点 別	理解	A	81.0	83.5	2.5	83.4	85.6	2.2
	表現	B	60.9	64.5	3.6	63.0	65.2	2.2
	言語文化理解	C	72.8	78.4	5.6	75.6	79.5	3.9
領 域 別	リスニング	a	84.3	86.4	2.1	84.5	86.9	2.4
	読解問題	b	79.8	82.0	2.2	82.8	84.7	1.9
	文法・表現・英作文	c	63.7	67.4	3.7	65.8	68.2	2.4

③ 得点分布グラフ



④ 小問ごとの出題内容と通過率 [中学校第2学年 英語]

大問	小問	出題内容					平成18年度			平成17年度		
		設問事項	観点別	領域別	設問形式	設問比較	全国	宮崎県	全国との差	全国	宮崎県	全国との差
1	1	英文のリスニング	A	a	ア	○	85.4	87.6	2.2	84.2	86.4	2.2
	2	英文のリスニング	A	a	ア	○	92.9	91.5	-1.4	92.2	92.7	0.5
	3	英文のリスニング	A	a	ア	○	73.4	74.8	1.4	76.5	77.9	1.4
2	1	対話のリスニング	A	a	ア	○	82.4	87.5	5.1	82.1	86.5	4.4
	2	対話のリスニング	A	a	エ	○	87.5	90.4	2.9	87.5	91.2	3.7
	3	対話のリスニング	A	c	エ	○	75.4	83.7	8.3	84.1	88.0	3.9
3	1	英語的表現	B	c	ウ	○	46.1	49.4	3.3	47.1	47.6	0.5
	2	英語的表現	B	c	ウ	○	20.7	29.7	9.0	25.8	31.4	5.6
	3	英語的表現	B	c	ウ	○	15.3	16.2	0.9	17.1	13.9	-3.2
4	1	表現の知識理解	B	c	ア	○	92.2	94.1	1.9	92.2	94.3	2.1
	2	表現の知識理解	B	c	ア	○	81.8	77.1	-4.7	81.1	77.1	-4.0
	3	表現の知識理解	B	c	ア	○	81.9	81.5	-0.4	80.7	82.6	1.9
5	1	会話表現・状況判断	B	c	ウ	○	80.2	85.6	5.4	81.5	86.7	5.2
	2	会話表現・状況判断	B	c	ウ	○	59.1	63.9	4.8	65.9	72.4	6.5
	3	会話表現・状況判断	B	c	ウ	○	43.1	46.2	3.1	44.6	45.6	1.0
	4	会話表現・状況判断	B	c	ウ	○	28.9	31.9	3.0	29.3	28.6	-0.7
6	1	並べ替え英作文	B, C	c	イ	○	61.4	69.8	8.4	68.0	72.4	4.4
	2	並べ替え英作文	B, C	c	イ	○	91.6	92.2	0.6	91.6	94.2	2.6
	3	並べ替え英作文	B, C	c	イ	○	86.7	89.0	2.3	88.1	89.9	1.8
	4	並べ替え英作文	B, C	c	イ	○	65.2	65.6	0.4	68.7	70.6	1.9
	5	並べ替え英作文	B, C	c	イ	○	58.8	75.5	16.7	61.6	70.6	9.0
7	1	会話の状況把握	A	b	ア	○	85.8	87.8	2.0	85.8	87.8	2.0
	2 1	会話の内容把握	A	b, c	ア	○	72.4	74.5	2.1	72.6	75.2	2.6
	2 2	会話の内容把握	A	b, c	ア	○	84.7	86.2	1.5	84.1	86.2	2.1
	3	会話の内容一致(順不同)	A	b	ア	○	92.0	93.9	1.9	92.2	93.7	1.5
8	1 1	英文の内容理解	A	b	ア	□	81.6	83.6	2.0	89.4	91.1	1.7
	1 2	英文の内容理解	A	b	ア	□	68.3	68.8	0.5	79.9	81.3	1.4
	1 3	英文の内容理解	A	b	ア	□	57.1	60.6	3.5	59.6	61.5	1.9
	2 1	英文の内容把握	A	b	ア	○	85.4	88.1	2.7	88.5	90.5	2.0
	2 2	英文の内容把握	A	b	ア	○	86.5	89.2	2.7	88.5	90.7	2.2
	2 3	英文の内容把握	A	b	ア	○	84.6	87.4	2.8	86.9	89.1	2.2

※「観点別」 A 理解 B 表現 C 言語文化理解

※「領域別」 a リスニング b 読解問題 c 文法・表現・英作文

※「設問形式」 ア 記号選択 イ 空欄補充(選択記述) ウ 空欄補充(思考記述) エ 思考記述

※「設問比較」 ○印 昨年度と同一問題 □印 昨年度との類似問題 ◇印 今年度、新たに導入された問題

⑤ 領域別にみた指導方法の工夫改善の在り方

ア リスニング

ほとんどの小問の通過率が9割前後と全国平均より高く、概ね良好な結果である。

そこで、今後の指導においても、生徒が英語を聞いたり、話したりする活動を意図的に設定するとともに、継続していくことが大切である。さらに、対話や英文における内容を正確につかませるために、あらかじめ聞き取りの視点をいくつか示したり、内容を把握するうえで大切な語に気付かせたりしていく工夫が大切である。

イ 読解問題

前年度に引き続き、すべての小問で全国平均より高い。しかも、通過率のほとんどが8割以上と、良好な傾向がみられる。ただ、今回、選択肢の数が増えた問題については、すべて前年度より通過率がやや低くなっている。

そこで、指導に当たっては、これからも、内容を理解させる視点を大切にしながら、英文を読む活動を取り入れていくことが大切である。また、段階を追って、英文の要旨がつかめる活動へと指導を工夫していくことが望まれる。

ウ 文法・表現・英作文

前年度に引き続き、ほとんどの小問で全国平均より高い。しかし、全国平均より高いものの、英語的表現の問題については、通過率が3割に達していないものもある。

そこで、指導に当たっては、語や英文を書くことに日頃から慣れさせることが大切である。また、言語活動を行う際、既習の大切な表現を意図的・計画的に取り入れていき、書くことと他の言語活動を関連付けて指導していく必要がある。さらに、英問英答を日常的に行いながら、英語の表現に慣れさせたり、テーマを指定して、意味のつながりを意識させた複数の英文を書かせたりすることが望まれる。

VI 意識調査分析結果

意識調査分析結果

各項目について肯定的に回答している割合を数値化しています。また、受検者全体を成績で上位3分の1(A層)、中位3分の1、下位3分の1(C層)に分け、各層の中で肯定的に回答した児童生徒の割合を算出しています。「A層-C層」は、宮崎県におけるその割合の差の数値であり、数値が大きいほど学力との相関が強いとみることができます。

生活体験	小5					中2				
	平成18年度				年度差	平成18年度				年度差
	全国	宮崎	全国との差	A層-C層		県平均	全国	宮崎	全国との差	
1 友だちと外で遊ぶ。	87.3	86.6	-0.7	9.9	-11.2	74.0	76.3	2.3	8.6	-2.1
2 テレビを見たり、マンガを読んだりする。	89.5	89.0	-0.5	-2.9	5.9	94.5	94.1	-0.4	-1.1	-0.3
3 テレビゲームなどのゲームをする。	68.4	57.8	-10.6	-7.1	-7.1	53.1	49.8	-3.3	-1.9	-0.3
4 パソコンやインターネットをする。	42.0	39.2	-2.8	20.7	9.2	51.3	47.8	-3.6	18.3	0.7
5 本や新聞を読む。	64.3	65.7	1.4	38.2	-3.6	60.7	60.4	-0.4	31.6	-0.2
6 ピアノや英会話などの習い事に通う。	45.3	41.7	-3.6	26.2	-18.3	27.2	24.0	-3.2	18.8	-0.9
7 水泳や体操、サッカーなどのスポーツ教室に通う。	55.5	55.0	-0.5	16.0	-34.8	21.5	20.6	-0.9	9.8	0.3
8 学習塾に通う。	29.4	20.2	-9.2	13.4	9.9	37.9	29.5	-8.4	14.2	-0.9
9 自分が住んでいる地域での活動(地域の清掃など)に参加する。	53.6	60.6	7.0	33.4	-26.5	31.6	35.0	3.4	26.3	1.5
10 家のお手伝いをする。	80.9	83.6	2.7	25.3	-9.9	70.8	73.8	3.0	25.6	0.9
11 美術館に行ったり、劇や音楽などを生で見たり聞いたりする。	25.5	28.4	2.9	31.9	-9.8	17.3	17.4	0.1	18.1	-0.7
12 放課後や土曜日などの学校行事に参加している。	41.0	36.9	-4.1	28.7	5.2	44.3	40.7	-3.6	28.2	0.3
13 家族や担任の先生以外に、悩み事などを相談できる大人がいる。	43.5	40.2	-3.3	27.5	-0.1	37.4	38.7	1.3	25.0	3.0
14 自分の考えや気持ちを理解してくれる友だちがいる。	82.4	81.3	-1.1	26.7	5.0	85.4	85.6	0.2	19.3	1.2
15 家族は自分のことを気にかけてくれていると思う。	86.7	85.7	-1.0	22.3	-1.3	84.0	84.9	0.9	21.4	0.6
16 今まで教えてもらった学校の先生は、自分のことを認めてくれていると思う。	77.0	78.5	1.5	31.9	-8.0	69.2	70.1	0.9	36.5	2.0

- ・ 本や新聞を読むこと(5)と学力との間には、強い相関が認められる。
- ・ 地域の活動への参加(9)や、放課後・土曜日等の学校の行事への参加(12)と学力との関係については、強い相関が認められる。
- ・ 自分を理解してくれる友だちや気にかけてくれる家族、認めてくれる教師の存在(14、15、16)と学力との間には、強い相関が認められる。

学びに向かう力	小5					中2				
	平成18年度				年度差	平成18年度				年度差
	全国	宮崎	全国との差	A層-C層		県平均	全国	宮崎	全国との差	
1 ふだんから「ふしぎだな」「なぜだろう」と感じることもある。	71.2	67.6	-3.6	34.3	-0.8	69.9	70.2	0.3	32.1	0.5
2 本やドラマなどを見て、人の生き方に感動することもある。	60.9	66.5	5.6	39.9	11.6	74.0	77.8	3.8	28.7	2.5
3 学習していて、おもしろい、楽しいと思うこともある。	79.5	76.4	-3.1	42.7	-2.4	72.7	80.0	7.2	36.6	0.7
4 学習して身につけた知識は、いずれ仕事や生活の中で役に立つと思う。	89.5	87.6	-1.9	26.4	0.1	79.0	83.1	4.1	27.9	2.7
5 学習して、わかったりできるようになったりすることが、増えていくことはうれしい。	90.3	90.0	-0.3	22.8	0.8	85.2	88.0	2.9	24.6	0.3
6 自分の力をできるだけ伸ばしたいと思う。	92.8	93.1	0.3	15.7	-0.1	93.4	94.7	1.3	12.4	-0.2
7 努力をすれば、自分もたいていのことはできると思う。	89.4	91.5	2.1	18.7	0.4	86.2	89.0	2.8	20.0	-0.7
8 自分には、先生や友だちからほめられるような得意なことがある。	64.2	66.5	2.3	48.0	0.2	51.7	56.0	4.3	48.2	-1.2
9 ものごとをやりとげた時のよろこびを、味わったことがある。	85.1	84.8	-0.3	31.7	-0.1	86.5	87.7	1.2	24.6	0.6
10 成績が悪かったときは、自分の努力が足りなかったからだと思う。	89.3	89.9	0.6	19.5	-0.6	94.0	94.7	0.6	10.5	-0.1
11 同じまちがいをくり返さないように気をつけている。	86.6	88.2	1.6	24.9	-0.5	78.9	84.1	5.2	29.5	1.0

- ・ 「学びに向かう力」については、ほぼ全国平均の割合と同じ程度であり、中学校段階ではすべての項目が全国平均の割合よりも高い。
- ・ 不思議に感じる(1)、感動する(2)、楽しいと思う(3)、学習の知識が仕事や生活に役立つと思うこと(4)と学力との間には、強い相関が認められる。
- ・ 得意なことをもっていたり、成就感を味わったりした経験(8、9)と学力との間には、強い相関が認められる。

自ら学ぶ力	小5					中2					
	平成18年度				年度差	平成18年度				年度差	
	全国	宮崎	全国との差	A層-C層		県平均	全国	宮崎	全国との差		A層-C層
1	黒板に書かれなくても、大事なことはノートに書きとめている。	56.1	56.7	0.6	49.9	0.7	56.5	61.0	4.4	43.8	4.4
2	先生や友だちから聞いた学習の方法を参考にしている。	81.3	82.0	0.7	35.5	0.4	69.2	73.9	4.7	39.7	3.7
3	テストでまちがえた問題は、もう一度やり直している。	73.7	81.8	8.1	35.9	0.7	59.7	69.6	9.9	46.7	2.0
4	新しく習ったことは、何度もくり返して練習している。	51.7	74.2	22.5	46.7	0.4	49.6	68.3	18.7	49.7	4.9
5	授業で習ったことを、自分なりにわかりやすくまとめている。	58.1	65.7	7.6	58.1	0.0	56.5	63.0	6.5	49.3	1.6
6	授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく、その理由や考え方もいっしょに理解しようとしている。	52.2	54.5	2.3	66.1	-1.4	51.7	57.2	5.5	54.0	0.7
7	授業で習ったことをふだんの生活と結びつけて考えている。	55.5	61.8	6.3	59.3	1.8	32.8	39.3	6.5	51.0	0.6
8	教科の内容をどれくらい理解できているかわかっている。	65.8	69.0	3.2	51.5	-0.6	61.8	67.0	5.2	45.4	1.4
9	その日のめあてを決めて、授業や家で学習に取り組んでいる。	46.4	52.4	6.0	57.8	-0.5	29.5	32.0	2.5	45.3	0.7
10	自分で学習の計画を立てている。	45.8	56.4	10.6	57.7	-0.6	36.6	41.4	4.8	52.0	1.3
11	宿題をきちんとやっている。	92.0	91.4	-0.6	15.9	1.0	83.1	86.7	3.6	20.7	0.5
12	授業で習ったことは、その日のうちに復習している。	41.1	68.4	27.3	53.4	0.8	42.1	59.9	17.8	46.9	3.1
13	興味を持ったことを、自分から進んで学習している。	66.2	72.0	5.8	51.6	-2.0	58.2	63.4	5.2	45.6	0.2

- ・「自ら学ぶ力」のほとんどの項目については、小・中学校とも全国平均の割合より高く、学力との相関も強い。
- ・理由や考え方で含めて理解しようとする(6)や、授業の内容をふだんの生活と結びつけようとする(7)と学力との間には、強い相関が認められる。
- ・教科の内容をどれくらい理解しているかわかっている(8)と学力との間には、強い相関が認められる。
- ・自分で学習計画を立てること(10)と学力との間には、相関が認められる。

学ぶ姿勢	小5					中2					
	平成18年度				年度差	平成18年度				年度差	
	全国	宮崎	全国との差	A層-C層		県平均	全国	宮崎	全国との差		A層-C層
1	目標に向けて、ふだんからこつこつ学習している。	54.4	67.5	13.1	52.6	-1.0	40.8	51.0	10.3	54.8	1.3
2	わからないことはそのままにせず、わかるまで努力している。	68.1	72.4	4.3	49.5	-1.0	54.0	61.1	7.0	54.1	0.6
3	学習を始めたら、他のことに気をとられないで、集中している。	59.2	59.8	0.6	51.2	-1.9	40.2	43.2	2.9	45.6	-0.4
4	勘違いや思い込みがないか、しっかり見直しをしている。	62.9	65.2	2.3	52.2	-1.3	49.3	55.2	5.9	52.1	1.7
5	正しい姿勢で学習している。	56.2	59.6	3.4	48.6	0.3	43.9	47.2	3.4	40.6	0.2
6	必要なものをきちんとそろえてから、学習を始めている。	80.1	83.5	3.4	30.2	1.1	76.7	80.9	4.2	29.1	0.7
7	人の話は最後まで、きちんと聞いている。	79.1	84.1	5.0	28.0	-0.2	73.3	79.1	5.8	29.9	-0.4
8	ふだんから、ちこくや忘れ物をしないようにしている。	83.7	82.5	-1.2	25.4	0.1	83.5	84.5	1.1	22.5	-1.3
9	授業を集中して受けている。	78.5	82.5	4.0	32.6	0.6	74.2	79.4	5.2	36.2	0.3

- ・「学ぶ姿勢」のほとんどの項目については、小・中学校とも全国平均の割合より高く、学力との間には強い相関が認められる。

生きる力	小5					中2				
	平成18年度				年度差	平成18年度				年度差
	全国	宮崎	全国との差	A層-C層		県平均	全国	宮崎	全国との差	
1 調べてわかったことをもとに、考えをまとめることができる。	61.9	63.3	1.4	59.9	0.0	55.0	60.0	5.0	54.8	0.5
2 筋道を立てて、ものごとを考えることができる。	59.7	61.5	1.8	61.3	-0.5	53.5	58.8	5.3	56.4	0.6
3 自分の意見や考えを相手にわかりやすく伝えることができる。	55.9	58.8	2.9	57.0	0.4	43.1	48.1	5.0	53.1	1.1
4 調べたことを、コンピュータを使ってまとめたり、発表したりすることができる。	48.5	48.6	0.1	56.4	-2.1	43.1	47.2	4.1	49.0	-1.3
5 学校のきまりや規則を守っている。	83.4	86.2	2.8	22.3	-0.1	83.2	88.3	5.1	18.4	0.2
6 テレビのニュースや新聞などで、最近の社会のできごとをよく知っている。	60.4	60.0	-0.4	49.0	-5.6	60.8	61.6	0.9	42.3	-7.1
7 お年寄りや障害のある人に、進んで手助けをしたことがある。	45.9	49.4	3.5	47.3	-1.6	42.1	46.7	4.6	38.7	0.1
8 社会で問題になっていることについて、どうすればよいかを考えたことがある。	47.9	50.3	2.4	49.4	-3.6	43.1	46.8	3.7	44.7	-1.8
9 近所の人に会ったとき、あいさつをしている。	87.8	74.9	-12.9	18.3	-15.9	85.6	89.2	3.6	17.7	0.6
10 自分からやらなければならぬことは、責任を持ってやりぬくことができる。	74.6	50.3	-24.3	42.3	-26.3	73.5	76.0	2.6	40.7	-0.3
11 むずかしいことでも、失敗をおそれないで、取り組んでいる。	67.6	41.6	-26.0	48.3	-29.5	53.5	57.3	3.7	52.4	1.0
12 いつも新しいアイデアを考えたり、工夫したりしている。	60.1	34.6	-25.5	53.8	-27.5	47.4	52.9	5.5	47.7	1.3
13 自分とちがう意見も尊重している。	61.5	34.9	-26.6	52.7	-26.7	63.7	66.0	2.3	43.4	0.1
14 どんな職業や進路が自分に適しているのかを知っている。	52.1	55.0	2.9	42.8	0.7	42.4	47.0	4.6	37.7	1.0
15 将来かなえてみたい夢がある。	86.7	88.0	1.3	18.4	0.3	74.5	76.8	2.3	22.2	1.3

・「生きる力」については、小学校段階において全国平均の割合より低い項目があるが、中学校段階ではすべての項目が全国平均の割合より高い。

・小学校段階における全国平均の割合より大幅に低い項目(10、11、12、13)は、昨年度は全国平均の割合よりも高かったこと、中学校段階では昨年度と比べて大きな変動がないことなどから、今年度の学年集団の特性ではないかと考えられる。

・考えをまとめること(1)、筋道立てて考えること(2)、わかりやすく伝えること(3)、まとめたり発表したりすること(4)と学力との間には、強い相関が認められる。

・アイデアを考えたり工夫したりすること(12)や、自分と違う意見を尊重すること(13)と学力との間には、強い相関が認められる。

・最近の社会のできごとを知っていること(6)や、社会問題を考えたりすること(8)などの社会的実践力と学力との間には、相関が認められる。

・責任感をもつこと(10)や、失敗をおそれずに取り組むこと(13)と学力との間には、相関が認められる。

家庭の指導や活動に関すること	小5					中2				
	平成18年度				年度差	平成18年度				年度差
	全国	宮崎	全国との差	A層-C層		県平均	全国	宮崎	全国との差	
1 朝食は毎日食べるようにしている。	91.4	93.2	1.8	10.4	0.7	89.7	92.0	2.3	9.4	0.1
2 朝、自分で起きることができる。	69.1	66.2	-2.9	27.0	-2.4	70.8	70.8	0.0	17.5	-1.5
3 夜は決まった時間に寝ている。	46.9	52.4	5.5	39.2	-0.5	33.8	38.2	4.4	27.2	1.2
4 新聞に書かれていることについて家族と話す。	40.6	41.0	0.4	48.8	-0.3	33.9	35.6	1.7	42.2	-6.3
5 家族から世の中のふしぎな話や感動するような話を聞く。	45.6	49.2	3.6	55.6	7.3	33.3	37.4	4.1	45.2	2.1
6 家族といっしょに工作や料理などをやる。	63.0	65.3	2.3	43.5	3.5	39.4	43.0	3.5	39.8	0.4
7 夕食は家族といっしょに食べている。	88.5	89.8	1.3	13.6	-0.3	85.5	86.7	1.1	13.6	-0.3
8 家族からたよりにされて、何かの役割をまかされている。	61.9	66.6	4.7	46.1	5.3	45.9	48.4	2.5	45.5	-0.4
9 習い事やスポーツ、学習などで自分が立てた目標を達成できるように家族が応援してくれる。	70.1	72.5	2.4	46.5	3.1	68.0	72.3	4.3	41.4	0.7
10 学校で学習したことが社会に出た時に役立つ話を、家族から聞いたことがある。	57.6	59.8	2.2	53.3	4.3	48.8	52.9	4.1	41.1	1.5
11 将来の夢やこれからの進路について家族と話す。	56.2	60.3	4.1	52.0	6.3	64.5	70.1	5.6	37.3	0.5
12 食器の後かたづけなど、自分のことは自分でするように、言われている。	75.8	76.5	0.7	24.3	3.5	79.7	81.2	1.5	16.3	0.3
13 早寝早起きなど、規則正しく生活するように、言われている。	79.6	79.4	-0.2	29.8	1.8	72.9	74.0	1.0	27.8	2.1
14 人が話しているときはしっかり聞くように、言われている。	83.7	83.0	-0.7	24.3	-0.6	74.6	75.4	0.8	28.3	0.7
15 ふだんから計画的に学習するように、言われている。	70.0	74.6	4.6	35.2	4.1	69.4	72.3	2.9	30.5	0.2
16 やりはじめたことは途中で投げ出さないで最後までやりとげるように、言われている。	75.8	76.8	1.0	35.5	0.5	69.4	71.6	2.2	33.1	-0.3
17 よく確かめて、勘違いや思い込みをなくすように、言われている。	69.1	70.0	0.9	43.1	1.6	59.4	58.4	-0.9	41.7	1.3
18 朝食は毎日食べるように言われている。	81.5	83.0	1.5	19.0	1.6	76.7	78.4	1.8	20.7	0.3

・「家庭での指導や活動」に関しては、ほとんどの項目が全国平均の割合より高い。特に、小学校段階では昨年度は全国平均の割合よりも低い項目が多かったものが、今年度はほとんど改善されている。

・毎日の朝食(1、18)や、起床・就寝時間等に関わる規則正しい生活習慣(3、13)と学力の間にも相関が認められる。

・家族との様々な会話(4、5、10、11)や、家族の応援(9)と学力の間には、強い相関が認められる。

学校の指導や活動に関すること		小5					中2				
		平成18年度				年度差	平成18年度				年度差
		全国	宮崎	全国との差	A層-C層		県平均	全国	宮崎	全国との差	
1	学校に行くのが楽しい。	76.9	78.3	1.4	34.4	0.1	77.2	78.7	1.5	29.2	1.2
2	自分のことは自分でするという習慣を身につけよう。	69.2	70.5	1.3	25.2	1.4	62.3	60.5	-1.7	18.3	1.1
3	見直しや確かめをして、勘違いや思い込みをなくそう。	73.6	74.2	0.6	25.6	0.8	68.3	66.0	-2.3	23.7	2.1
4	新しいことを学ぶときは、これまでに学んだことを組み合わせて考えてみよう。	61.3	62.6	1.3	38.5	2.2	50.3	51.2	0.9	34.0	2.3
5	授業で習ったことをふだんの生活と結びつけて考えてみよう。	55.6	60.5	4.9	41.8	1.5	43.3	45.9	2.6	33.1	2.3
6	まちがえた問題や自信のない問題に、くり返し挑戦しよう。	72.7	77.8	5.1	28.2	0.7	79.4	80.2	0.8	22.8	-0.5
7	家庭でも、毎日、時間を決めて学習したり、読書をしたりする習慣をつけよう。	58.8	65.6	6.8	36.2	1.4	64.6	63.8	-0.8	25.9	0.1
8	掃除やボランティア活動は積極的にしよう。	47.9	58.7	10.8	36.0	0.9	50.1	52.8	2.7	30.5	1.9
9	おもしろい実験や楽しい教材を使って学習する。	77.9	79.3	1.4	32.1	0.3	65.2	68.5	3.3	31.8	3.4
10	ゲスト・ティーチャー(地域の人や学校以外の人)などから、勉強や活動についての感想やアドバイスをもらう。	40.8	43.0	2.2	43.8	0.8	35.9	38.0	2.2	32.2	2.0
11	友だちの悩みについて、みんなで話し合う。	47.9	47.7	-0.2	44.9	1.6	32.6	32.9	0.3	25.2	2.6
12	友だちの良いところや友だちから学んだことを話し合う。	49.2	52.8	3.6	53.3	1.0	33.4	35.0	1.6	32.9	1.7
13	学習することが、ふだんの生活や自分の将来にどのように役立つかについて話し合う。	56.5	61.3	4.8	53.2	0.0	34.0	37.4	3.4	41.2	1.8
14	先生から、がんばっている先輩や友だちについての話を聞く。	49.3	51.9	2.6	47.3	1.6	51.1	51.7	0.6	35.8	-0.3
15	ふりかえりテストなどで自分がわからなかったところを確認する。	72.6	77.6	5.0	43.7	-0.4	64.6	70.6	6.0	44.4	0.9
16	学習内容が理解できなかったり、テストでまちがえたりした原因について考える。	63.9	68.9	5.0	53.7	-0.4	58.7	63.3	4.6	47.0	0.4
17	国語	63.7	65.9	2.2	44.4	-1.2	60.5	61.2	0.7	26.0	-0.8
18	社会	52.9	53.3	0.4	43.9	0.8	58.0	60.6	2.7	26.2	1.6
19	算数、数学	67.9	75.1	7.2	28.4	-0.2	53.0	61.6	8.7	28.7	4.3
20	理科	80.7	80.9	0.2	21.1	2.0	64.6	69.2	4.6	23.9	-0.9
21	音楽	76.5	76.4	-0.1	28.0	-0.1	67.3	66.3	-1.0	22.4	-0.6
22	図画工作、美術	85.1	83.5	-1.6	17.1	0.4	62.9	66.4	3.5	19.2	0.5
23	体育、保健体育	86.4	88.1	1.7	11.2	0.4	75.9	78.4	2.6	17.1	-0.6
24	総合的な学習の時間	73.3	79.2	5.9	35.9	1.5	64.7	73.9	9.1	30.9	0.8
25	道徳	64.5	71.2	6.7	36.5	1.6	53.2	60.2	7.0	32.8	-0.9
26	学級活動	77.9	80.4	2.5	33.1	0.5	70.8	76.0	5.2	32.2	0.0
27	技術・家庭	81.7	91.0	9.3	17.2		69.2	73.4	4.2	23.3	-1.7
28	英語						57.3	59.7	2.3	37.6	0.1
29	国語	83.6	85.4	1.8	27.6	0.3	74.0	75.9	1.9	29.0	0.8
30	社会	70.9	74.5	3.6	36.0	0.8	60.6	63.4	2.8	29.5	1.8
31	算数、数学	81.4	85.4	4.0	20.1	0.3	63.5	73.1	9.6	25.4	4.6
32	理科	85.1	86.6	1.5	19.1	0.8	67.7	73.6	5.9	26.3	-0.1
33	音楽	83.7	83.6	-0.1	22.2	0.3	71.6	71.5	-0.1	26.3	0.5
34	図画工作、美術	88.6	90.0	1.4	15.8	0.2	70.9	74.3	3.4	24.2	0.5
35	体育、保健体育	91.0	93.3	2.3	10.1	0.1	79.0	82.6	3.6	21.1	-0.4
36	技術・家庭	76.3	90.3	14.0	18.3		69.8	73.9	4.1	29.5	-1.4
37	英語						59.7	61.9	2.2	37.9	1.2

・「学校の指導や活動」に関しては、ほぼ全国平均の割合と同じ程度である。

・学習の内容を生活場面で結びつけること(5)や、友だちといろいろなことについて話し合うこと(12、13)と学力との間には、強い相関が認められる。

・小・中学校とも、ほとんどの教科で好きという回答の割合が全国平均より高い。また、理解度についても同様である。

・テストの見直しや活用(15、16)と学力との間にも、強い相関が認められる。

・小学校の国語(17)・社会(18)、及び中学校の英語(28)においては、好き嫌いの情意面と学力との間に、強い相関が認められる。

読書習慣や学習時間に関すること		小5					中2						
		平成18年度				年度差	平成18年度				年度差		
		全国	宮崎	全国との差	A層-C層		県平均	全国	宮崎	全国との差		A層-C層	県平均
1	読書習慣(1ヶ月に読む本の平均冊数)	(冊)	7.5	8.9	1.4	6.1		3.4	3.8	0.4	2.0		
2	平日	塾・家庭教師に見てもらった学習時間	(分)	67.5	78.7	11.2	34.3		109.3	112.6	3.3	21.4	
3		自分自身の力による学習時間	(分)	36.1	54.3	18.2	29.9		62.1	76.7	14.7	27.5	
4	休日	塾・家庭教師に見てもらった学習時間	(分)	56.3	71.3	15.0	35.4		97.1	104.1	7.0	29.6	
5		自分自身の力による学習時間	(分)	36.2	56.3	20.1	36.0		76.3	94.6	18.3	36.3	

・読書冊数は全国平均とほぼ同じである。中学校段階では、県平均で約5冊(1ヶ月平均)減少している。

・学習時間は小・中学校、平日・休日とも全国平均よりもやや多い。

・塾・家庭教師に見てもらった学習時間だけでなく、自分自身の学習(3、5)も学力との間には相関が認められる。

そ の 他			小5					中2				
			平成18年度				年度差	平成18年度				年度差
			全国	宮崎	全国との差	A層-C層		県平均	全国	宮崎	全国との差	
1	テレビをみる時間	平日 (分)	101.5	92.4	-9.1	-12.4		109.2	97.9	-11.3	-20.7	
2		休日 (分)	112.4	110.2	-2.2	-7.5		141.9	139.6	-2.3	-9.8	
3	ゲームをする時間	平日 (分)	39.9	28.2	-11.7	-11.2		24.1	18.0	-6.1	-7.2	
4		休日 (分)	53.5	45.6	-7.9	-13.4		50.5	47.4	-3.1	-8.3	
5	部活動で熱心に活動している							69.9	73.1	3.1	23.8	
6	将来、どの学校まで進みたいか	高校まで						27.8	29.7	1.9	-22.9	
7		四年生大学まで						25.2	23.0	-2.3	17.6	
8		大学院まで						5.9	6.1	0.2	5.9	

- ・テレビの視聴時間やゲームの時間は全国平均の割合よりやや少ない。成績の上位層はテレビの視聴時間やゲームの時間が少ない傾向にある。
- ・部活動で熱心に活動すること(5)と学力との間には相関が認められる。
- ・将来、大学や大学院にまで進学したいと考えていること(7、8)と学力との間には相関が認められる。

VII 優秀実践校の取組

宮崎市立古城小学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

国語	<ul style="list-style-type: none"> ・言語事項（主語・述語、ローマ字）、目的に応じて文章を書く力がやや劣る。 ・話し合いや発表などで、全体の組立を工夫して話そうとすること、新しく覚えたことばをふだんからできるだけ使うようにすることの関心・意欲がやや低い。
社会	<ul style="list-style-type: none"> ・調査方法の判断、浄水場の仕組みについての理解ができていない。 ・宮崎県の人々のくらしが県平均より低く、日本のいろいろな町や場所のことをもっと知りたいと思う関心・意欲が低い。
算数	<ul style="list-style-type: none"> ・数直線上での数の大・小、十進法位取り、伴って変わる量の関係式がやや劣る。 ・小数を相対的にとらえること、四則の混合した計算が県平均よりやや低い。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・星座早見盤の使い方、ものの温度とかさ、あたためられた空気、水の状態と体積の変化が県平均より低い。 ・実験観察の結果予想や、興味をもったことを調べようとする関心・意欲が低い。

(2) 意識調査結果からの課題

<ul style="list-style-type: none"> ・辞典や資料で言葉の意味や分からないことを調べる態度が育っていない。 ・興味あることを深く調べてみる知識欲が低く、学習内容が生活に結びつかない児童が多い。 ・学習時間や読書時間が県平均よりもやや少ない。 ・学習の楽しさを感じ取る力や自分で学習の計画を立てる学習計画力がやや劣る。 ・授業を受ける姿勢として、話を最後まできちんと聞くことや忘れ物をしないように気を付けることが苦手である。 ・職業や進路、将来かなえてみたい夢等の自己成長力に、やや意識の低さが見られる。 ・見直しや確かめが苦手で、勘違いや思い込みが強い児童が見られる。 ・理科への関心が少ない児童がやや多く、内容の理解度の差も大きい。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

- ① 「知」「徳」「体」における到達目標を設定し、達成のための手立てを工夫する。
- ② 国語、算数、体育、道徳、学級活動等において全員が研究授業を行い、基礎学力の定着と指導技術の向上を図る。
- ③ 業間の時間を活用した漢字・計算の練習や確認テストを行い、学力の診断とフィードバックに努める。
- ④ 調べ学習や読書の時間で積極的な図書室活用と図書に関する環境設営に努める。
- ⑤ 保護者と連携し、家庭学習の充実に努める。

(2) 教育課程内の取組

- ① 「読む」「書く」「コミュニケーション能力」に関する到達目標
国語科、算数科などにおける到達目標と評価基準を設定し、達成のための手立てに沿って授業を進めていった。定期的に評価を行い、個に応じた指導に生かすようにした。
- ② 学びタイム
業間に20分間設定し、水曜日は漢字練習、金曜日は計算練習に徹底的に取り組ませる。4～7月は前学年の内容も練習させる。練習とテストを組み合わせる成果がわかるように実施している。
- ③ ぐんぐん週間
予備時数や教科の指導時間を工夫して、7月・12月・2月に習熟の時間を設定した。1週間の時間割に国語科・算数科の時間を各5時間程度位置付け、担任と教頭、専科、非常勤講師で指導にあたる。最後の日には、漢字コンテスト・計算コンテストを実施した。
- ④ 小中連携による学力向上の推進
5・6年は週2時間、担任と兼務発令教諭による算数科の習熟度別少人数指導を実施し、

基礎基本の定着を図っている。残りの2時間は少人数指導の非常勤講師、教頭、専科教諭で指導を行っている。

(3) 教育課程外の取組

①朝の読書

昨年は週2回だった読書の時間を毎日10分設定することにより、児童が本と向き合う時間を確保し読書活動の定着・向上を図るようにした。週50分の読書の時間が学習や生活による影響を与え、年間の読書量も飛躍的にアップした。

学年	目標	達成数
1年生	3,300	2,720
2年生	3,500	2,305
3年生	3,200	1,655
4年生	10,000	6,655

<学年読書目標>

②読み聞かせ

朝の読書の時間に月1、2回程度、保護者ボランティアや教師による読み聞かせを実施している。また、参観日に業間の時間を振り替えて、参観授業の前に保護者による読み聞かせの時間を、15分設定した。保護者も児童も楽しみにしている。



<おすすめの本コーナー>

③読書意欲の喚起

読書コーナーを設置や読書フェスティバル(読書週間)を実施した。「多読賞表彰」や「おすすめの本紹介文コンテスト」など児童も楽しみにしており、掲示された作品や本を通して読書への関心を高めることができた。

④長期休業中の学習支援

夏季休業中にサマースクールを5日間、そして、冬季休業中にウインタースクールを2日間実施した。課題解決コースと学習内容復習コースに分けて希望者を対象に実施した。



<サマースクール>

(4) 家庭、地域との連携

①家庭学習の充実

「家庭学習の手引き」と学習の要点(国語・算数)を配布し、啓発を図った。また、よみ声学習(国語・算数)を奨励し、音声表現力、計算力の向上を図った。

②教育相談

夏季休業中(7月下旬)は全員、冬季(12月)は希望者に実施し、保護者へのアドバイスや情報交換を行った。

3 成果と課題(今後の取組を含む)

(1) 成果

- 校時程を工夫して生み出した朝の読書や習熟の時間などが学力向上を支える力につながっていることがわかった。週2回の学びタイムでは、到達目標達成に効果を上げることができた。
- 年間50冊以上本を読むという個人目標、1万冊読むという全校目標が達成できた。保護者による読み聞かせや家庭での読書推進も効果があった。
- 長期休業を利用した「サマースクール」「ウインタースクール」への参加希望者も年々増え、意欲的に学習する姿が見られた。
- 算数科においては習熟度別少人数指導に大きな成果が見られた。CRTテストでは5%以上全国平均を上回った。
- 参観日で家庭学習の重要性和協力について説明した。取組の度合いには差があるが、保護者の意識の向上が見られた。

(2) 課題

- 国語科を中心とした「書く」「コミュニケーション能力」の到達目標達成のための手立てを工夫する必要がある。
- 学力向上につながる読書活動をさらに推進し、年間指導計画に図書室利用を位置付ける。
- 学びタイムの計画的な実施と評価、読書や学習の努力の成果が、児童や保護者の目に見えるような手立てを工夫する必要がある。

宮崎市立西池小学校の学力向上への取組

1 平成 17 年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

- 国語において「漢字の書き」の定着が不十分である。
- 算数は図形の性質や作図等、図形領域の理解が不十分である。
- 理科では「観察・実験の技能・表現」の能力が十分身に付いていない児童が多い。

(2) 意識調査結果からの課題

- 読書の習慣化を一層図る必要がある。
- 早寝早起きや毎日の食事（特に朝食）など、きちんとした生活リズムが確立していない児童も多い。
- 地域での活動や行事に積極的に参加している児童が半数以下で地域との関わりが薄くなっている。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

本校は、平成 18 年度学校経営の重点を「夢を育み、生きる自信と誇りを持たせる学校づくり」とし、それを具現化するための重点課題を 5 つ設定し日々の教育活動を展開している。5 つの重点課題のうち学力向上に係るものとして「楽しさを味わい、分かる・できる授業の実現」「教師の指導力の向上」がある。それぞれの具体的な内容は下記の通りである。

<p style="text-align: center;">「楽しさを味わい、分かる・できる授業の実現」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 基本的な学習習慣・学習訓練の徹底 ○ 基礎学力の定着と向上 ○ 確かな学力を目指す授業の工夫 ※ それぞれの内容で数値目標設定
--

<p style="text-align: center;">「教師の指導力の向上」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 月 3 回の職朝時の 3 分間研修 ○ 校内での研究サークル設置
--

(2) 教育課程内の取組

① 一単位時間の指導過程の工夫

毎時間ではないが、45 分の中で基礎・基本の徹底や一層の習熟を図る時間を確保するようにしている。(漢字・計算ドリル、漢字・計算テスト、個別に繰り返し指導等)

② 指導形態の工夫

3 年生以上の算数で、習熟度別の少人数指導を実施し、個に応じた指導を展開している。

③ 校内研究での取組

昨年度より「学ぶ楽しさを味わい、豊かに表現できる子どもの育成」を研究主題に掲げ、国語科の指導法の研究に取り組んでいる。本年度は、自分の考えを自分の言葉で表現できる力を更に磨き、文章を読み深める力を身に付けさせる指導の在り方に焦点を当てて研究を進めている。また、教員の主体的な研究とするため、各学年で研究授業を 2 回以上実施できるよう研究計画を立て、より実践的な研究となるよう配慮している。一連の実践の中で、事前・事後の授業を各学年で実施するなど、意欲的な研究への取組が見られるとともに、国語科における指導力の向上も図られている。

④ 予備時数の効果的な活用

本年度は、予備時数を活用し、国語、算数を中心に基礎・基本の徹底のために繰り返し指導する時間や学習の充実を図る時間を確保している。このことにより特に内容の難しい単元において、児童にとってゆとりある学習指導が展開できている。

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
国語	280 ⑧	290 ⑩	245 ⑩	243 ⑧	189 ⑨	178 ③
社会	／	／	70	85	90	103 ③
算数	119 ⑤	155	160 ⑩	155 ⑤	159 ⑨	153 ③
体育	90	90	90	94 ④	92 ②	93 ③

教科欄の○数字分を予備時数から確保

平成 18 年度 教育課程編成表（一部抜粋）

(3) 教育課程外の取組

① 朝の時間の活用（週時程の工夫）

本校は、毎週月曜日の朝（8:15～8:25）を読書活動、毎週水曜日の朝（8:15～8:35）を校内LANを活用した職員朝会とし学習の時間に当てている。

○ 朝の読書

この時間は、本校の学校支援ボランティア「お話の部屋」による読み聞かせを全学級で実施している。毎週のこの時間を楽しみにしている児童が多く、読書意欲の向上にもつながっている。

○ LAN職員朝会時の学習

普通の朝自習では、教員は児童につくことができず一人一人の児童に必要な指導が十分できないことも多い。そこで、職員朝会を校内LANで済ませることで、学級の児童の実態に応じた課題をさせることができるようになった。この時間を活用し、個別指導を充実させ、基礎・基本の一層の定着を図っているところである。特に本年度は、校内研究とも関連させ、第1、4週を学級独自の課題、第2週を読書（教員も）、第3週を国語と設定し実践している。

(4) 保護者・家庭・地域との連携

① 家庭との連携

家庭学習の仕方についての資料を家庭に配布するとともに、学年通信・学級通信、懇談等を活用し、家庭学習を習慣化することの大切さについて説明した。また、本校の連絡帳「西池の子」の中に家庭学習時間や内容を記録することで保護者も自分の子どもの家庭学習により関心を示すようになり、保護者と学校が一体となつての学力向上への取組が見られるようになった。

② 学校図書館の改装（学校支援ボランティア「お話の部屋」との連携）

昨年度末「読む楽しさと知る喜びのあふれる快適で魅力的な学校図書館づくり」を目的に、「お話の部屋」の保護者が中心となつて、学校図書館の改装を行った。保護者や職員及び児童、そして宮崎大学学生などがボランティアで改装工事を行い、明るく魅力のある図書室へと生まれ変わった。更に、本年7月にはエアコンも設置され、快適に読書ができる環境が整った。そのため、本年度は、昨年度と比較して図書の貸出数が飛躍的に増えている。

改装前の図書室



改装後の図書室



平成17年度と18年度の図書貸出数

	平成17年度	平成18年度
5月	2,135冊	4,389冊
6月	2,879冊	5,933冊
7月	1,754冊	2,715冊
9月	1,620冊	3,726冊

3 成果と課題（今後の取組を含む）

(1) 成果

- 練習問題や小テスト等繰り返し指導を徹底し、習熟度別少人数指導など指導形態を工夫することで個に応じた指導が充実し、基礎・基本を確実に身に付ける児童が増えた。
- 校内研究を通して、国語の授業の進め方等教師自身が得るものが多く、実践的な指導力の向上が見られた。
- 読書指導や図書室改装により読書量が大幅に増え、読書を好きになった児童が増加した。

(2) 課題

- 学力面の2極化が顕著になってきている。基礎・基本が身に付いていない児童への繰り返し指導を徹底するとともに、指導の在り方を検討する必要がある。
- 家庭学習への取組に温度差が見られる。学年・学級通信や懇談等を活用し、家庭学習を習慣化することの大切さについて説明し、学力向上に関して保護者の啓発を更に図る必要がある。

宮崎市立宮崎港小学校の学力向上への取組

1 平成 17 年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

平成 17 年度学力検査（教研式 CRT）国語・算数の結果では、全国平均を上回ったのは、国語科で 2 学年、算数科で 2 学年であった。他の学年は国語科で平均 2.7 点、算数科で平均 3.3 点全国平均を下回っており、基礎学力の定着が課題である。

国語科においては、「言語についての知識・理解・技能」及び「言語事項」等は良好だが、「書く力」及び「説明的文章」「文学的文章」の読解に関する到達度がもう少しである。

算数科においては、「数量や図形についての表現・処理」及び「図形」等は良好だが、「数量や図形についての知識・理解」「数学的な考え方」に関する到達度がもう少しである。

(2) 意識調査結果からの課題

意識調査結果から考察すると本校の児童の学習に対する意識は概ね良好であり、特に学力の高かった学年ほどその結果が顕著に表れている。学びの基礎力及び生きる力ともに県平均を上回り、これらが学習意欲を支え学力につながったものと考えられる。

しかし中でも「お年寄りや障害のある人に、進んで手助けをしたことがある。」、及び「新聞に書かれていることについて家族と話す。」といった項目は県平均より低くなっている。また、家庭での学習時間を見ると「自分自身の力で取り組む時間」が低いという特徴があり、豊かな基礎体験をさせたり家庭での学習の仕方について啓発していったりすることが今後必要である。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

本校の教育目標「自ら考え、主体的創造的に行動できる子」の具現化を目指して、今日の学校教育に期待される「生きる力」の育成のために、全職員の共通理解のもとに学力向上を推進していく。教育活動においては、教育課程の弾力的な運用、個に応じた指導、読書活動の推進、家庭との連携等を通して基礎学力の定着を図り、自ら学ぶ意欲と判断力や社会性など人間形成の基礎として必要な資質・能力を身に付けさせることに努める。

(2) 教育課程内の取組

① 朝の活動（ぐんぐんタイム）

本校においては、計算力向上を目指して、「毎週水曜日」＝「ぐんぐんタイム」の 10 分間の時間帯に「ドリル学習」を実践している。

ぐんぐんタイムは、週時程の中に位置付けて取り組んでいる。学級担任が、各学級内において個別指導を行っている。少人数指導教員、音楽・理科専科についても、学級担任と連携をとりながら指導にあたっている。



【ぐんぐんファイルを活用】



【10 分間集中して取り組む】

(3) 教育課程外の取組

① サマースクールの実施



本校においては 8 月上旬の 3 日間に、算数科の基礎学力の定着を図る一つの手立てとして 4 年生以上の学年を対象にした「算数サマースクール」を実施している。

3 日間の計 6 時間において主に計算力向上を目指して取り組み、全職員で指導にあたる。7 月初旬に募集し、参加者を募る。本年度で 3 回目の実施となり、効果が上がってきている。

【サマースクールで頑張る児童】

② 個別指導週間の計画と実施

本年度から第1・2学期各1回ずつ「個別指導週間」を設定し、個を大切にしたい指導を実践するように計画している。どの児童にどんな内容で個別指導を行うかは、各学級担任が決定する。高学年においても、放課後の行事を精選し時間を確保している。指導時間帯は、15時30分～16時40分としている。また、安全対策として、個別指導を受ける児童については、同じ地区・家が近くの児童同士で下校するようにする等配慮している。

③ 読書活動の推進

- ・ 朝の読書……朝の活動の時間に年間10分×31回計画し、全校児童が読書に取り組んでいる。本は前もって机の上に用意しておき、途中で本を返したり借りたりはしないようにしている。
- ・ 読書祭り……毎年11月の下旬に計画し、読書への啓発を図る。全学年参加で実施し、保護者のボランティアによる読み聞かせや、多読学級・多読者の表彰などを行い、児童が読書により興味を膨らませるように働きかける。

(4) 保護者・家庭、地域との連携

① 家庭学習調査

各学年における家庭学習の基本的な在り方を学校と家庭で共通理解し、児童一人一人の効率的な家庭学習を支援していくために昨年度より実施している。まず、職員間で家庭学習についての研修を行い共通理解を図った上で、各学年における家庭学習の実施状況や課題等について情報交換する。調査は1学期初めと2学期初めに4日間、主に家庭学習を始めた時間、終わった時間を記録し保護者の感想を添えて提出してもらう。

家庭学習調査では以下のような内容を提案し、家庭学習に対しての共通理解を図った。

小学校段階では、基本的に（15分×学年）が平均的な家庭学習の時間であると言われます。また、ただ時間を費やすだけでなくいくつかのポイントがあります。次に挙げるのは、家庭学習における基本的な5つのポイントです。

家庭学習5つのポイント

- 1 毎日、はじめる時こくをきめる。
- 2 テレビは消す。（おやつをたべながらしない。）
- 3 机の上とまわりをきれいにし、必要なものをきちんとそろえる。
- 4 はじめたら、立ち歩かない。
- 5 しせいを正しくする。（えんぴつのもち方に気をつける。）

3 成果と課題

(1) 成果

- 本校の教育目標の具現化を目指して、教育課程内外の取組及び保護者・家庭との連携を計画的に進めたことにより、学力向上への意識が高まり系統性のある指導体制づくりができた。
- 学力向上の具体策について職員の共通理解を図り個に応じた学力支援をすることにより、基礎・基本の確実な定着を図ることができた。

(2) 課題

- 問題解決的な学習や体験的な学習を充実させることにより、児童の思考力や表現力のさらなる育成を図る必要がある。
- 各教科の到達目標を達成するための、授業づくりや日常の指導方法の工夫改善を図る必要がある。

宮崎市立学園木花台小学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

平均到達度を県の平均点と比較してみると、国語・算数・社会は県平均を上回っているが、理科は県平均とほぼ同じである。観点別に見ると、理科の「科学的思考」、「観察・実験の技能・表現」が県の平均を下回っている。全領域で県平均を上回っている国語・算数・社会をみると、国語では「書く力」と「読む力」、社会では「社会的な思考・判断」、算数では「図形」の領域が低い。

(2) 意識調査結果からの課題

調査項目の「生きる力」・「学びの基礎力」とともに県平均を上回っていた。しかし、平日のテレビ視聴時間が1日2時間を超す児童が36.6%、ゲームをする時間が1時間を超える児童が19.3%いる。また、「教科の理解度」の項目で、わずかではあるが理科が2.1ポイント低くなっている。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

本校では、学校の教育的課題の第1番目に「確かな学力を培う授業の実践」を挙げている。具体的には、次の点に重点を置いて取り組んでいる。

- 児童の側に立った問題解決的な学習の推進
- 体験的な学習活動の重視
- 基礎的・基本的な内容の精選と確かな定着を図る指導法の工夫改善
- 基本的な学習態度・習慣の確立
- 読書習慣の育成など読書教育の充実
- 少人数指導教員の活用等による個人差に応じるきめ細かな指導の充実

(2) 教育課程内の取組

① 実態を踏まえた到達目標の設定

児童に確実に身に付けさせたい基礎・基本について到達目標を設定して明確にした。CRTテストやNRTテスト・学年の実態等を考慮して設定し、学期毎に反省し、改善を図っている。

	課 題	課題解決のための対策	到 達 目 標	評 価	達 成 状 況
読 む 力	・文意をとらえながら、読み取る力の向上	・様々な読み物にふれる機会を増やすとともに、音読したり、線を引いたりして工夫して読ませる。	・読書量、月に3冊以上。		

【到達目標（第5学年）】

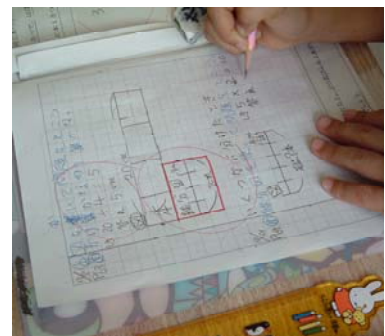
② 実態に即した授業時数の設定

国・算を主に理科・音楽・体育など、学年の指導内容によって標準時数に予備時数を組み入れて授業時数を設定し、基礎学力向上に努めている。

③ 主題研教科である算数科を中心とした実践

見通しを持ち、筋道を立てて説明できる力（「算数的思考力・表現力」）を付けるために、文章問題の解き方の手順カード「わたずしこ」とどんな考えがよかったのかまとめる時のカード「さんすうはかせ」の活用を図った。

また、基礎・基本が確実に身に付くよう、基礎・基本を鍛える「算数読み声週間」等の実践を行った。また、指導方法の共通理解を図るため学級担任と少人数指導担当との打合せの時間を週1回設定した。



【図などを使って解く児童】

④ 理科を中心とした実践

「科学的思考」、「観察・実験の技能・表現」等を中心に、理科の学力向上を目指した。そのために、5・6年生対象だった専科による指導を4年生にまで広げ、観察・実験の実践を図った。また、他学年でも目的意識を持った観察・実験を重視し、学習の補充としてのプリント学習も行った。

⑤ 学力向上支援事業の推進

支援を必要とする児童を対象に学習支援員（大学生）を活用して、基礎学力の向上を図った。支援教科は国語・算数を中心とし、授業時間内での支援を行った。

(3) 教育課程外の取組

① 朝自習の充実

読み・書き・計算を中心とし、基礎・基本の定着を図る。

	月	水	木	金
実施内容	漢字	計算	マス計算(教師付き)	読書(隔週読み聞かせ)

② ボランティアによる読み聞かせ

児童に読書の楽しさを体験させ、読書意欲を高める活動の一つとして保護者や大学生による読み聞かせが行われた。児童の発達段階に配慮して本を選定し、金曜日の朝自習や木曜日の昼休みに実施した。

③ サマースクールの実施

希望する児童を対象に国語・算数を中心とした学習支援及び夏季休業中の課題解決の支援を行い、基礎学力の向上を図る。夏季休業中の7日間、大学生を支援員とし、午前中3時間行った。

(4) 保護者・家庭、地域との連携

① 家庭教育の充実

学年に応じた「家庭学習の手引き」を作成している。特に算数については、算数用語の意味や図形の定義、計算の仕方などをまとめた「算数読み声カード」を作成し毎月1週間家庭で基礎・基本の徹底に取り組んでもらっている。「たしかめコース(答えあり)」で覚え、「チャレンジコース(答えなし)」で確かめをするようにしている。



【算数読み声カード】

② 生活習慣の確立

生活リズムアンケートを実施し、3年前の結果と比較分析した。学校保健委員会や学級懇談会での話題とし、生活習慣を正す必要性について意識を高める機会とした。

③ 三者面談の充実

一人一人の学習の成果や課題を明らかにし、児童のもつよさをさらに伸ばすための情報交換とその対応策を考える機会として設定している。特に学習面は、テスト結果データをもとにして30分という時間でじっくり考える場としている。

④ 地区別教育懇談会の実施

学校・家庭・地域社会が課題や問題点等の共有化を図りながら、児童の健全育成に向けてそれぞれの役割を見つめなおす機会としている。

3 成果と課題（今後の取組を含む）

(1) 成果

- 算数科での取組により、図をかいて考えたり、考えを表現したりすることが定着し、思考力・表現力に向上が見られた。また、実態把握後の指導の焦点化を図ったことにより、児童が意欲的に取り組めるようになるとともに、授業がわかると実感することができた。
- 理科での取組により、18年度の結果では県平均を大きく上回ることができた。意識調査の「教科の理解度」も昨年度より1.2ポイント改善が見られた。
- 学校保健委員会や学級懇談会等で、生活習慣を正す必要性について保護者に意識してもらったことにより、テレビ視聴時間やゲームの時間が減っている。逆に、読書量は大きく伸びている。

(2) 課題

- 理科の「観察・実験の技能・表現」は、更に高められるよう目的意識を持った観察・実験の指導を続けたい。
- 意識調査によると、夕食を家族ととる児童が4.4ポイント減っている。今後家庭に「きちんとした生活リズムの確立」や「家族団らんの時間の確保」等考えてもらいたい。

宮崎市立広瀬北小学校の学力向上への取組

1 平成 17 年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

- ① 文脈に即して書かれている内容を正確に読み取る力、相手の話を聞き取る力を身に付ける。
- ② 筋道を立てて、自分の考えを相手に伝える力を身に付ける。
- ③ 問題を解決するために、適切な解決方法を考える力を身に付ける。

(2) 意識調査結果からの課題

- ① 友だちの考えを受けとめ、自分で判断して言動することができる。
- ② 決められた時間に集中して家庭学習に取り組むことができる。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

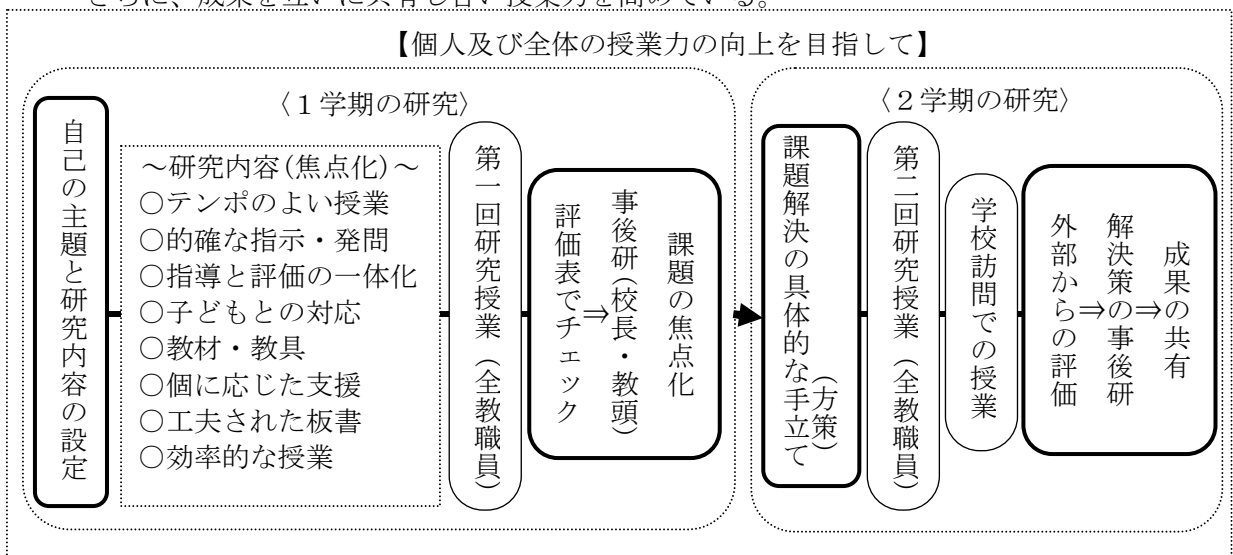
(1) 学力向上に向けた経営方針

- ① 児童がわかる・できる授業実践をめざした職員研修を通して、教職員の授業力を高める。
- ② 「知・徳・体」推進拠点校としての到達目標達成を目指し、小中学校連携した教育実践に取り組む。
- ③ 指導時間の確保と工夫を図り、学習内容の習熟、定着を図る。
- ④ 基本的な生活習慣定着のために「北小っ子当たり前の5ヶ条」の徹底を図る。
- ⑤ 基本的な学習習慣を定着させるため、「北小っ子ががんばること5ヶ条」を掲げ、実践する。
- ⑥ 司書教諭、読書活動アシスタントの役割を明確にしなが、読み聞かせボランティアと連携し図書室の環境整備を行ったり読書意欲を高める具体的な手立てを設定したりして、子ども一人一人の読書量を高める。

(2) 教育課程内の取組

○ 教職員の授業力を高める主題研究

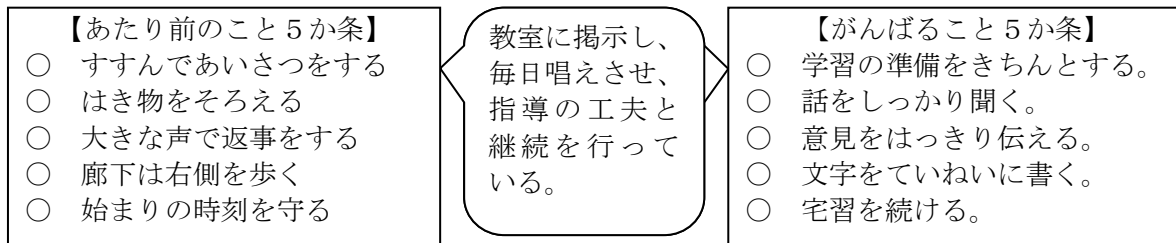
- ・ 教職員一人一人が、自らの課題を設定し、解決に向けての方策を全職員で検討している。さらに、成果を互いに共有し合い授業力を高めている。



(3) 教育課程外の実施

① 基本的習慣（基本的な学習習慣と基本的な生活習慣）の確立

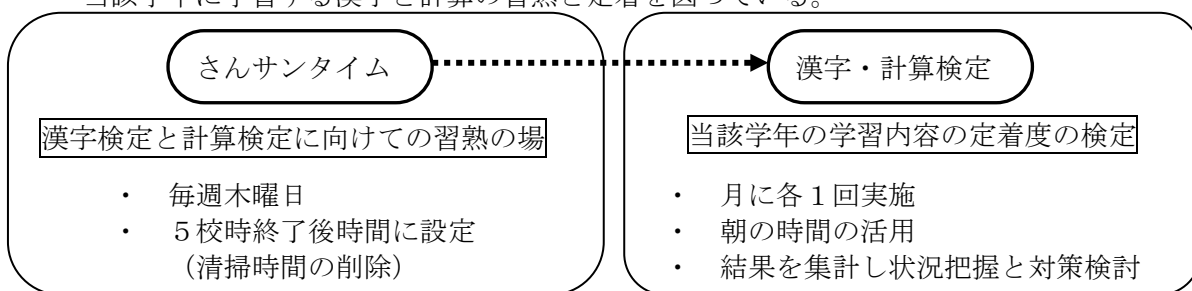
基本的な学習習慣の徹底のための【がんばること5か条】、基本的な生活習慣の徹底のための、【あたり前のこと5か条】を設定して、学力向上のための基盤づくりをしている。



② 学習内容の習熟と定着

- 漢字・計算検定とさんサuntime

当該学年に学習する漢字と計算の習熟と定着を図っている。



③ 読書活動の推進

学力向上の重点的な取組の一つとして「読む力」を付ける工夫改善をしている。

- 本が読みたい環境づくり
 - ・ 読み聞かせ（ボランティア）
 - ・ 白い書架
 - ・ 楽しく読めるスペース
- 読書量のアップ
 - ・ 週3回の読書タイムの設定
 - ・ 読書貯金通帳の活用



← 図書室で読書を楽しむ子どもたち

(4) 保護者・家庭、地域との連携

- ① 各家庭へ学習状況を数値で伝達
- ② 保護者や地域への積極的な授業参観の案内

3 成果と課題

(1) 成果

- 教職員一人一人の授業力が向上してきているために効果的な授業が確立したり、時と場を考えた節度ある学習活動が見られたりするようになってきている。
- 図書室の環境整備で子どもの読書量が増えたり、漢字や計算などの基礎的な学習内容が定着したりして、子どもの学ぶ意欲が高まってきている。さらには、子どものこのような実態を提供することで、保護者の学習への関心も高まっている。

(2) 課題

- 保護者との連携を図りながら、基本的な生活習慣や学習習慣の徹底を図る。
- 研究授業を柱にした個人のテーマ研究をさらに計画的に進め、考える力、伝える力を高めるための手立てを講じていく。

串間市立都井小学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

- 個人差が大きく、上位児童と下位児童の到達度に大きな開きがある。
- 国語においては、聞く・話す力が低い。
- 算数の到達度が、他教科に比べて低い。
- 全教科において、思考を伴う問題の通過率が低くなっている。

(2) 意識調査結果からの課題

- 学習意欲が低く、学習スキルが身に付いていない児童が見られる。
- 自己成長力が低く、将来に対しての見通しをもっていない児童が多い。
- 毎日の家庭学習において、宿題は全員しているものの、学習時間が短い。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

学力の確実な定着をめざします

- ・基礎的・基本的事項の確実な定着
- ・家庭における学習環境の整備
- ・学び方の習得を図る指導の推進
- ・読書活動の推進

(2) 教育課程内の取組

① 基礎的・基本的事項の確実な定着

ア 「読む力」・「書く力」・「計算する力」を高める日常指導

- 「朝の活動」の時間を全校で統一し「漢字タイム」「計算タイム」「言葉タイム（視写）」とし、同様の内容での取組を行う。
- 「基礎・基本の時間」の設定
月2回、木曜日を特別校時にして、特設時間を設定し、パソコンのソフト「計プリっ子」「漢プリっ子」を活用する。既習内容の計算・漢字の復習を行い、定着・習熟を図る。



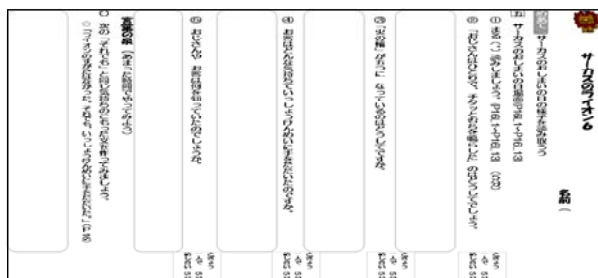
- ①パソコンからプリントを印刷する。
- ②問題を解く。
- ③自分でパソコンを見て解答する。
- ④次のプリントを印刷する。
- ※ 上記の繰り返し

イ 各学級における学習指導の充実

基礎的・基本的な内容の確実な定着を図るため、漢字・計算等の繰り返し指導や指導方法の工夫、問題解決的な学習の充実に努め、児童の学力の確実な習得に努めている。

- 実践例 ワークシートの活用

学習を効率的に進めるために、「めあて」「課題」「学習の流れ」を明記した自作のワークシートを毎時間、用意している。また、『言葉の泉』コーナーを設け、漢字や短文などの言語事項の基礎・基本の定着を目指している。



<ワークシート例>

② 複式学級に対する共通理解及び指導体制

複式学級における基本的な考え方を共通理解し、全職員が相互に関わり合いながら指導できる体制作りを行っている。また、ガイド学習を充実し、児童が自分たちで立てた学習計画をもとに共同で学習を行っている。このような学習形態を組むことで、主体的な学習態度を育成できるとともに、お互いに高めあう学習集団ができると考える。

2年と3年、4年と5年が複式になっているため、次のような体制で指導にあたっている。

- 2年生・・・算数科～教頭が指導、生活科～1年生との合同学習
- 4年生・・・理科～1年担任が月・水・金（1年生が4校時授業の日）に指導
- 5年生・・・算数科～教頭が指導、家庭科～6年生との合同学習

(3) 教育課程外の取組

① 読書活動の推進

ア 朝の読書活動

- 健康観察後の10分間、毎日、読書タイムを設定している。
- 担任による週1回の読み聞かせを実施している。
- 読んだ本は、各自が「読書の木」に記録する。意欲付け内容や読書量の目標設定に活用する。

イ 読書へ意欲をもたせるための工夫

- 「読み聞かせ」の充実を図るため、外部から講師を招き、読み聞かせ会を実施している。



<読み聞かせの様子>

② 放課後学習の実施

本校では、児童の居住地が遠いため、バスで登下校を行っている児童がいる。その児童を中心に放課後学習を実施している。教師は輪番で指導にあたり、児童の学習状況を把握して称賛したり、指導をしたりしている。自分の担当学年にこだわらずどの学年の児童にも個別に指導にあたっている。現在では、80パーセント以上の児童が参加している。

(4) 保護者・家庭、地域との連携

① 中学校との連携

- 都井小・中学校合同授業研究会の実施により、9年間を見通した学力向上の手立てを図る。
- 授業に関する協議のほかに、基礎・基本の指導についての話し合い、情報交換、要望等を行っている。

② 保護者との連携

- 小・中合同研修会の中で協議した家庭学習の手引きを作成し、参観日等に手引きの説明を保護者に行い、学校の基本的な考え方を説明した。本年度は実践を重ねながら理解を深めている。
- 参観日・個人面談の活用
参観授業を通して、我が子の理解と意識の高揚を図る。また、懇談会において、PTAの学力向上推進委員会を中心に学力向上についての話し合いの場を設定し、現在の家庭での百ます計算等への取組状況等の情報交換を行う。
また、個人面談を通して、子どものよさや学習面についての話し合いをもつ。

3 成果と課題（今後の取組を含む）

(1) 成果

- 基礎・基本の確実な定着・習熟を図るための時間を確保したことにより、児童の力が伸びてきている。
- 読書活動の推進を図ったことで、児童の読書への関心が高まり、読書量も増えてきている。
- 複式学級の指導の充実を図る手立てを講じたことで、児童に学び方が身に付き、主体的に学習できるようになってきた。
- 保護者との連携を図りながら家庭学習の在り方について理解を深めた結果、少しずつ家庭学習の充実が図られている。

(2) 課題

- 9年間のスパンを見通した中学校との連携の在り方を見直す。
- 児童に基礎・基本を徹底させるために、授業や「基礎・基本の時間」の中での繰り返し指導の徹底を行う。

南郷町立榎原小学校の学力向上の取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

全国学力調査の結果 <平成17年5月実施>

	国語	社会	算数	理科	計
本校の平均点	76.9	71.2	71.7	62.7	282.5
県の平均点	75.0	72.6	75.7	65.3	288.6

- 算数科の数学的な考え方の到達度が県平均を大きく下回っている。(県60.7、本校47.7)
- 理科は達成率が低く(県61.5、本校35.7)、特に「観察・実験の技能・表現」、「自然事象についての知識・理解」の力が十分に身に付いていない児童が多い。

(2) 意識調査結果からの課題

- 学びの基礎力の中では「感じ取る力」(県65.1、本校57.1)、生きる力の中では「社会的実践力」(県55.4、本校46.0)を高めていく必要がある。
- 読書量の個人差が大きく、読書習慣の身に付いていない児童もおり、テレビを見る時間に流されている。(県109.7、本校130.7)

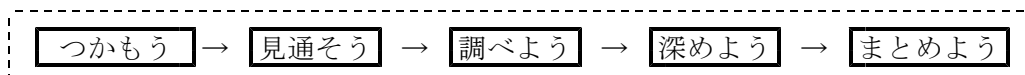
2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

- ① 学習指導の充実による基礎的・基本的な内容の確実な定着
- ② 職員研修(主題研究を中心)による指導技術の向上と学習指導方法の工夫改善
- ③ 読書活動の推進
- ④ 学校と家庭・地域との連携の強化

(2) 教育課程内の取組

- ① 職員研修(主題研究が中心)による指導技術の向上と学習指導方法の工夫改善
 - ア 指導方法の工夫改善を図る授業実践を中心とした主題研究の推進
 - イ 問題解決的な学習を取り入れた基本的な学習指導過程による学び方の定着



<児童と教師の目標>

◆児童～学び方を身に付けさせ、自分の考えに自信をもち、進んで発表しようとする児童を育成する。

◆教師～基本的な学習指導過程による授業実践を通して、指導技術を磨く。

○ 国語

- ・ 研究でめざす児童の姿を児童の実態や国語科の目標に照らし、「進んで表現する」という視点から、「感じる・考える児童」「感じたことや考えたことをまとめる児童」「伝える児童」の3点でとらえ、国語はもちろん他の教科でも指導している。
- ・ 文章に即した読解力を身に付けさせるために、「書く活動」を取り入れ、発表の手がかりとなるようにしている。

○ 算数

- ・ 本単元までに身に付けておきたい基礎的・基本的な事項と本単元における基礎的・基本的な事項を明確にし、児童の実態に応じた指導を行っている。

② きめ細かな指導の推進

ア 学力検査結果による個人別得点率の目標設定(国語・算数)と個人ファイルによる管理とそれを生かした指導の工夫

イ 基礎学力の定着を図る校長・特別支援教諭によるTTや個別指導の実施

(3) 教育課程外の取組

- ① 「習熟の時間」(業間)を活用した漢字・計算の練習と進級テストの実施
 - 進級テストでは、通過率 100 %になるまで追試を実施する。
 - 2・3年生の児童を対象に、校長・教頭が業間や休み時間を利用して、「かけ算九九」が 100 %暗記できるようにしている。必要に応じて音読も行っている。
- ② 放課後の時間を使った個別指導
 - 国語・算数を中心に、指導が必要とされる児童に対して、放課後の時間(少年団等の活動が始まるまでの時間)を利用して既習内容の定着を目指した指導を行っている。
- ③ 読み聞かせサークルの活動
 - 火曜日の朝の活動時間を利用して、低・中・高学年別に読み聞かせを実施している。
- ④ 全職員によるミニ研修の実施
 - 夏季休業中や冬季休業中の職員朝会を利用し、全教職員が日替わりで行うミニ研修(20分間、テーマは自由)を実施し、幅広い知識と教養を身に付けている。

(4) 保護者・家庭、地域との連携

- ① 個人面談の実施
 - 夏季休業中を利用して、全学年全家庭を対象に個人面談を実施している。
- ② P T A 学力向上対策委員会との連携
 - 学習班(読書活動の推進)と生活班(基本的な生活習慣の育成)とに分かれ、それぞれに教師も加わって取り組んでいる。
- ③ 家庭学習の充実
 - 家庭学習の習慣化を図るために、「家庭学習の手引き」(低・中・高)を作成して、家庭での学習の仕方を指導している。
- ④ 読み聞かせグループ(ぐりとぐら)との連携
 - 月2回(第1・3火曜日の朝の読書時間)に読み聞かせを行い、児童の読書意欲の向上を図っている。

3 成果と課題

(1) 成果

- 個人票(国・算)の作成によって、児童一人一人の実態把握ときめ細かな指導が可能となり、その学年における基礎的・基本的な学習内容が身に付きつつある。
- 個に応じた習熟学習や進級テストの実施により、児童の基礎学力が高まってきている。
- 「わかる」「できる」授業を目指した主題研究によって、児童には各学年の発達段階に応じた学び方が次第に身に付き、教師には、基本的な学習指導過程が身に付き、指導技術が向上してきている。
- 個人面談の実施によって、児童一人一人に応じた学習の在り方や基本的な生活習慣の在り方について、保護者と具体的な協議ができた。
- 読み声や読書活動、読み聞かせ活動等によって、親子で読書活動に取り組む家庭もみられるようになり、読書への関心が高まるとともに、ノートやプリントに目を通す保護者が増えてきた。

(2) 課題(今後の取組含む)

- 指導方法の工夫改善
 - 1単位時間の学習の流れ(「つかむ」「見通す」「やってみる」「深める」「まとめる」)を定着させ、学習のねらいにそって児童一人一人が問題解決的な学習を図り、「わかる」「できる」そして「生かす」授業づくりを進めるとともに、表現力を養うために、児童が主体的に発表したり、活動したりする場と時間を確保できるように工夫する。
- 個に応じた指導ときめ細かな指導
 - 個人票をもとに個に応じた指導の充実を図り、指導の結果を具体的に記録し、指導に生かす工夫をする。
- 家庭との連携を図った学力向上の推進
 - P T A 学力向上対策委員会を中心に、保護者との連携をさらに密にし、家庭学習の在り方や基本的な生活習慣の定着について保護者の啓発を行う。

都城市立東小学校の学力向上への取組

1 本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

国語においては、県平均と比べ、「漢字の読みや書き」が下回っており、日常的な反復練習を継続する必要がある。また、主語と述語やローマ字に関する出題においても平均を下回っており、言語事項の確実な指導と定着が求められる。

社会においては、「調査方法の判断」や「博物館の利用方法」に関する出題で県平均を下回っており、社会科の調査や見学の際、十分に時間をかけて丁寧に目的や方法を話し合うことが求められる。

算数においては、「3位数÷2位数」や「3位数÷1位数」の出題において県平均を下回っている。除法における表現・処理の力を確実に身に付けさせる必要がある。

理科においては、「水の対流」や「水の沸騰」、「金属の棒のあたたまり方」に関する出題で県平均を下回っており、ものあたたまり方を取り扱う単元において、様々なものあたたまり方を具体的にとらえさせる指導方法の工夫・改善が求められる。

(2) 意識調査結果からの課題

「学びの基礎力」「生きる力」とともに県平均を上回る結果だが、毎日時間を決めて学習する習慣作りや、テストで間違えた原因を考えたり自信のない問題に繰り返し挑戦したりする態度を育てる必要がある。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針（平成18年度学校経営案より）

- ① 「妻ヶ丘中学校区ブロック会議」及び「学力向上改善計画」等において到達目標を設定し、状況把握と情報公開を行う。
- ② 全ての職員の指導力向上を目指して、授業研究を核にした職員研修を充実させる。
- ③ 保護者と担任との二者面談を行い、学力向上に向けた家庭との連携を深める。
- ④ 「朝の学習」を効果的に実施し、教師の指導のもとでの繰り返し学習を充実させる。
- ⑤ 「朝の読書」や「読み聞かせ」を定期的に行い、豊かな言語感覚を身に付けさせる。
- ⑥ 火曜日の放課後の時間帯を「教材研究の時間」とし、毎時間の授業に必要な事前準備の時間を確保する。

(2) 教育課程内の取組

① 主題研究としての取組

「わかる喜び・読む楽しさを味わい、確かな国語力を身に付けた児童の育成」の研究主題のもと、国語科学習指導方法の工夫改善と言語環境の整備に取り組んでいる。

ア 学習指導班の活動例…「単元評価表」「自己評価表」の活用

「単元評価表」は、各単元の目標分析に基づいて定めた観点毎の評価項目について、それぞれの児童がどのような実現状況にあるかを把握するためのものである。一時間の授業で評価する項目を絞り込み、一単元が終了する時点で全ての項目をもれなく評価することとなる。指導と評価の一体化の観点に立ち、単元途中での児童へのフィードバックにも生かされている。

「自己評価表」は、毎時間の学習後、児童自身に書き込ませる評価表である。学習に対する意欲や関心等の項目の他、本時の学習問題に対する理解度を自己評価する項目を設けることもある。評価表の形式としては、学習計画表を兼ねて単元の導入段階で配布される一単元全体の評価表形式や、1時間毎のワークシートを兼ねた形式等がある。

イ 言語環境整備班の活動例…「こくちゃんコーナー」の設置



左の写真は、高学年の廊下に掲示された「こくちゃんコーナー」である。共通語と方言との語感の違いを感じ取らせる内容となっている。児童は、この掲示物の前で足を止め、紹介されている各地の方言を声に出したり感想を語り合ったりするなど、関心をもって見ている。コーナーの内容は、適時変更していくようになっている。

(3) 教育課程外の取組

① 読み聞かせ活動

毎水曜日の朝、職員朝会を行う時間帯を活用して、保護者の読み聞かせボランティアグループによる読み聞かせ活動を行っている。読み聞かせが行われていない学級は、読書タイムとして読書活動を行っている。15分間集中して読書続けることにより、豊かな言語感覚を身に付けた児童の育成を目指している。

② 暗唱活動

「雨ニモマケズ」「寿限無」「平家物語」などの文章が印刷されたプリントを児童に配付し、暗唱に挑戦させている。校長が聞き役となり、確実に暗唱できたと認められた場合には、認定証を配付することとなっている。全児童が暗唱に合格する学級が出るなど、たいへん意欲的な取組が見られる。

(4) 保護者・家庭、地域との連携

① 家庭学習の手引き



家庭学習の目安となる時間（低学年 30分、中学年 30～60分、高学年 60分以上）や学年の発達段階に応じた学習方法を示した「家庭学習の手引き」を作成し、保護者の理解と協力を得ながら家庭学習の習慣作りを進めている。また、各学年の学習内容に応じた学習課題を課すことにより、学習事項の定着を図っている。

② フリー参観・二者面談

6月の授業参観日を月曜日から金曜日までの5日間と設定し、2校時から5校時または6校時までのどの時間帯でも授業を参観可能とする「フリー参観」を実施すると共に、放課後の時間帯を活用して希望する保護者と担任との「二者面談」を実施した。様々な教科・領域の授業を保護者が参観することで学校での児童の様子を把握することが可能になると共に、学習面や生活面について、より具体的な話し合いが可能になることで、児童理解を深めることができた。

3 成果と課題

- 成果
- 朝の読み聞かせ活動や、暗唱活動、国語科指導方法の工夫・改善等により、日本語に対する児童の興味関心が高まってきているとともに、自らの意思をはっきりと伝えようとする姿が見られるようになった。
 - 朝の学習時間の効果的な活用や、算数の時間の充実により、算数CRT検査において全ての学年が全国平均を上回る結果となった。
- 課題
- 本校及び中学校区ブロックの到達目標を実現するため、指導と評価の在り方をより一層具体的にすることが必要である。

都城市立山之口小学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

国語では、文脈に即した内容の理解と記述に関する出題内容の通過率が低い。調査時の観察では、全文を読まずに答えている児童が多く見られた。また、これまでに本学年児童が実施したC R TやN R T等の結果も合わせて分析すると、知能・学力のバランスは概ねとれているが、観点として「読む」力・「書く」力の項目が低いことが共通して言える。

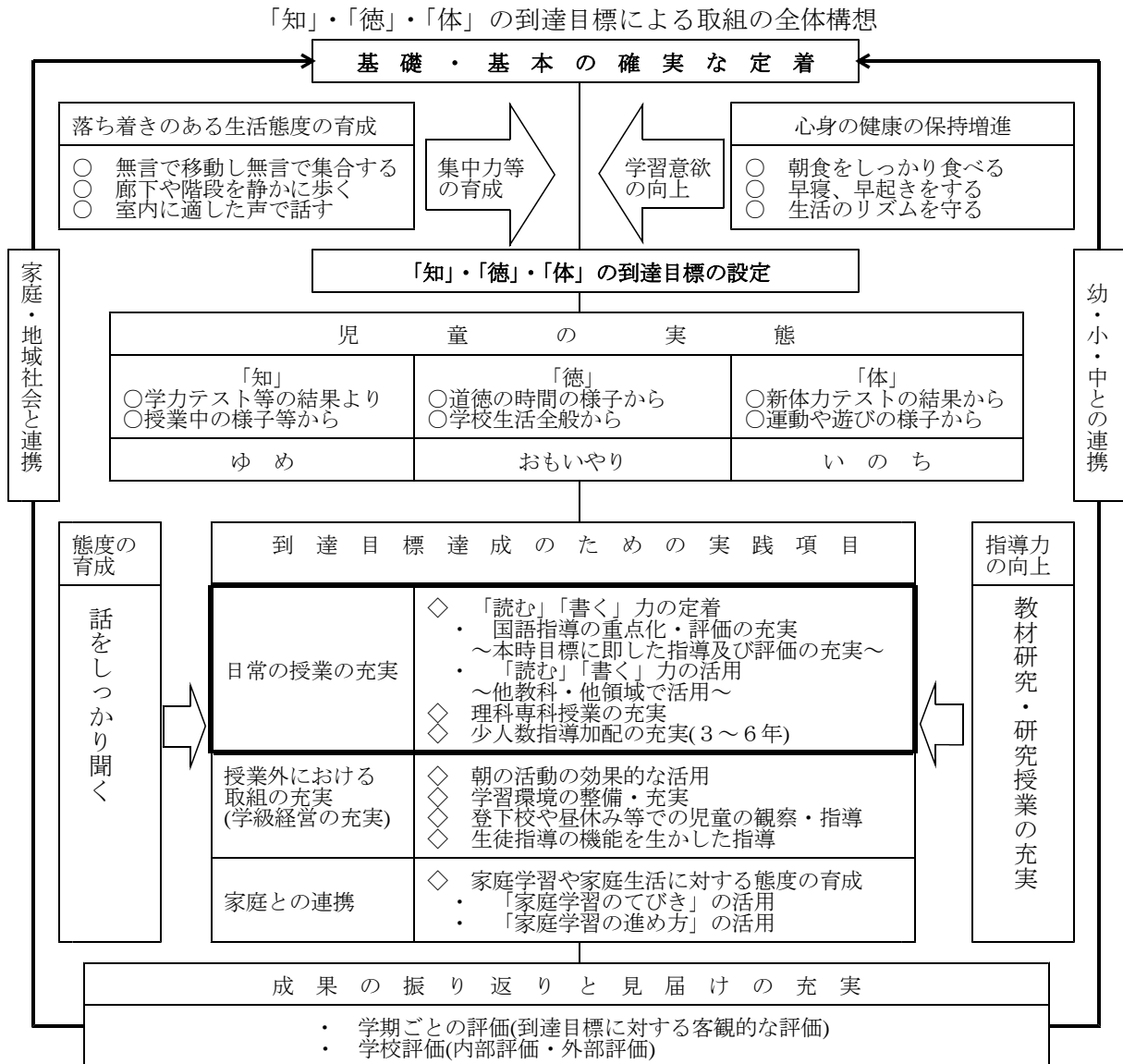
(2) 意識調査結果からの課題

集団全体としては、学力調査結果と比較して結果はよい。A A Iの結果も合わせて分析すると、勉強のことで自分をきびしく見つめていない傾向があると言える。学習適応の状況を個々に把握して、個に応じた指導を行い学習習慣の形成に努めなければならない。

2 学力向上へ向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

小中連携推進事業における到達目標との関連で日常の授業の充実を始めとする取組を進めた。学力向上の基本は、何と言ってもまず学級担任・専科等での日常の授業の充実にあると考える。



(2) 教育課程内の取組

① 「読む」力・「書く」力を高めるために

本校児童の実態から主題研究では、国語科における「読む」力・「書く」力を高める研究を推進している。普段の授業においては、「読む」「書く」活動を重点指導内容として取り組み読解力を高めるよう努めている。また、国語科にとどまらずすべての教科において「書く」力をはぐくむことを意識した研究を推進・実践している。

② 授業の工夫改善

特に伸び率・平均点の高かった理科では、以下の点を心がけ授業を行ってきた。

- ・ 興味・関心・意欲を高める授業づくりを行う。
- ・ 学ぶ楽しさを授業づくりを行う。
- ・ 覚えるべきことはリズム唱、動作化、替え歌、イラスト化等を行い学ばせる。
- ・ 板書の構造化を行う。
- ・ 調べ学習では、まる写しさせずにキーワードを見つけさせ、自分の言葉でまとめさせる。
- ・ 一人一観察、一人一実験をめざす。
- ・ インターネットのデジタルコンテンツの有効活用を行う。
- ・ 授業で使えるリンク集を作成中である。

(3) 教育課程外の取組

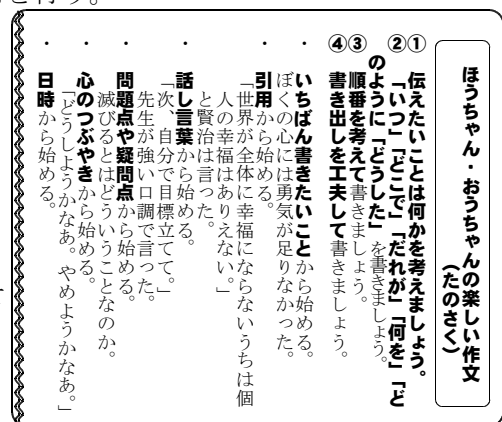
① 朝の時間の活用

本校では、朝の時間を次のように活用してきた。

- ・ 月…読み聞かせ（保護者）
- ・ 火…漢字学習（ドリル等）
- ・ 水…読み・書きのスキル学習と教師の読み聞かせ
- ・ 木…集会活動
- ・ 金…計算（ドリル等）

② 書く活動の手引き作成

- ・ 書く活動で基本的なスキルについての手引きを作成し活用している。
「ほうちゃん・おうちゃんの楽しい作文（たのさく）」



(4) 保護者・家庭、地域との連携

① 家庭学習の協力について

- ・ 9月の参観日では、全校懇談会の中で15分時間を設定し、家庭学習の必要性等の説明会を実施した。
- ・ 家庭学習に関するアンケートを実施しその集計結果をグラフ化して配付し啓発を行った。
- ・ 家庭学習の手引き・家庭学習の進め方を作成し配付した。本年度は、中学校区の小中学校で共通したものを配付し活用を図る。

② 学校評価について

- ・ 年度末では、「よりよい学校づくりに関するアンケート」を実施した。その中で、学力検査の学年毎の数値を公表し客観的に判断できる材料とした。

3 成果と課題（今後の取組を含む）

(1) 成果

- 「読む」力・「書く」力を高める指導を意図的・計画的に共通実践することが、他教科等での基礎・基本の定着を図ることにつながってきていると考える。他学年での学力調査の結果は全体として、過去2年間での伸びが見られる。
- 家庭学習の啓発活動等を通して、保護者の学力に対する意識が高まってきたと考える。

(2) 課題

- 学力向上のために、さらに日常の授業の充実に努めるとともに、学校間連携、家庭・地域との連携・協力を具体的に進めていかなければならない。

小林市立小林小学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

国語科においては、読み取る力、書く力の落ち込みが見られ、筋道立てて読み書きすることが苦手であることから、読解力及び思考力を培う指導が必要である。社会科においては、社会事象に関する知識の不足が見られる。算数科においては、計算など形式的な問題には強いが、数量関係など思考を要する内容に弱い傾向が見られたことから、計算力の一層の定着を図るとともに、文章問題に十分触れさせる必要がある。理科においては、自然に恵まれた地域であるにもかかわらず、身近な自然事象への関心が薄い傾向が見られることから、身近な事物現象と関連させる教材を使ったり、学習事項を応用する場面を設けたりする必要がある。

(2) 意識調査結果からの課題

テレビやゲームに費やす時間が長い傾向にある。学習の時間は、ほぼ県の平均の時間を確保しているにもかかわらず、それが学力に反映されているとは言えない。

学びの基礎力では、友人と外で遊ぶことや読書についての基礎体験が不足している。また、集中した学習への取組や学習の準備やわかりやすく話すといった点の意識が十分でない。

生きる力については、規範意識が下回っている。また、自己を見る眼が十分に育っていない。このことから、日常生活の中で自己有能感を持たせるような機会を数多く与えていく必要がある。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

本校では、2学期制を生かした確かな学力の育成を目指して、以下の経営方針で取り組んでいるところである。

- 各教科や総合的な学習の時間における体験的・問題解決的な学習の充実を図ることで、自ら学習に取り組む姿勢を培う。
- 習熟度または個に応じた学習支援、読書指導、学力テストの結果の活用、サマースクール等を実施し、読み・書き・計算等の基礎的・基本的な学習内容の定着を図る。
- 教師の授業力向上を図るために、「授業力向上」「指導技術」「教育理論」等の研修を行い、各学年ごとにテーマを設定した「積み上げ方式」による授業研究を実施する。
- 家庭学習の手引きを利用し、それぞれの学年の発達段階に応じた学習の仕方を身に付けさせるとともに、間違えた内容をできるまで繰り返し学習する習慣付けを図る。

(2) 教育課程内の取組

① 校内研修の充実

本校では、国語科を中心とした「読解力育成のための授業及び学習態度の改善」を目指した研究を行った。特色としては、「学年別授業研究」と「積み上げ型の授業実践」である。「学年別授業研究」は、児童の発達段階や学習内容等に留意しながら、学年別に課題を設定し、授業研究を核とした研究及び実践を推進することにした。「積み上げ型の授業実践」は、教師の指導技術を高めることによって授業の質的改善を図り、学年ごとの課題解決を目指した授業研究の手法である。これは、研究授業を実施する際に事前に各学年の担任全員で順次模擬授業を行うもので、全ての担任が同一領域・同一単元・同一段階の授業をそれぞれの学級で行い、その都度工夫・改善のポイントについて検討を加えながら、より効果的な授業の在り方を究明していくというものである。

また、主題研究の他に、教師の授業力向上を図るために、「授業力向上」「指導技術」「教育理論」などの情報を職員に提供し、日々の授業に生かしてもらっているところである。

(3) 教育課程外の取組

① 学びタイムの活用

読み・書き・計算は学力の根底をなすもので、授業以外の場面で繰り返し練習を行うことにより、一層基礎・基本の定着を図ることができる。本校では、この時間を「学びタイム」と名付け、基本的に毎週木曜の朝の活動時間に実施している。

この「学びタイム」の活用の一例として、全校一斉漢字大会を実施した。児童一人一人に目標を持たせることで学習意欲の喚起と漢字に対する基礎的な力の向上をねらったものである。実施内容については、学びタイムの第1・2週目に学年単位で漢字の練習を行い、漢字大会に向けて漢字力の定着を図った。また、年間指導計画作成時に生み出された余剰時数(年間10時間)を活用して、習熟を図るための時間に充てたり、同一日に全校一斉の漢字大会を行ったりした。

② 読書活動の推進

毎週月・水・金曜日を「読書活動」とし、読む力の育成を目指している。また、週に1回ボランティアの方々による読み聞かせを昼休み時間に行い、読書への親しみを高めるよう工夫している。その他の手立てとして、1か月に自分が何冊の本を読んだかを把握し、読書の励みとなるように、図書委員会から提案された「ぶっくんカード」を活用している。

③ 単元テストの分析と活用

児童の実態や変容をより系統的に把握するねらいから、全校で教材会社を統一して採用した。添付の個人別学力到達度診断ソフトを活用し、個人の観点別達成状況や単元ごとの到達度状況を細かく把握するとともに、学級・学年の傾向もつかむことができた。

また、結果については、朝自習の時間や授業中の習熟・復習の時間及び家庭学習などで活用する補充・発展問題を作る際の参考にすることができた。さらに、児童の実態をもとに習熟度別授業を行ったり、個に応じた指導を行ったりすることもでき、家庭訪問や個人面談の際には、資料の一つとして、個人別学力診断シートを活用した。

(4) 保護者・家庭、地域との連携

① 地域及び保護者への発信

学校と家庭が連携しながら、児童一人一人に基礎的な学力を身に付けさせることをねらい、本校における学力向上の取組に関する事項を「学校の広報誌」「学年通信」「学級通信」で、地域及び保護者に発信した。

② 家庭学習の充実

学習内容を確実に身に付けるためには、授業で学んだことを家庭においても復習する必要がある。そこで、本校では、各学年の発達段階を考慮して「家庭学習に関する手引き」を作成し、家庭での時間の使い方を工夫して学習時間を確保してもらい、家庭学習の習慣化を目指している。また、「早寝・早起き・朝ごはん」を合い言葉として、基本的な生活習慣の育成を各家庭にお願いしているところである。

3 成果と課題（今後の取組を含む）

(1) 成果

- 学年別研究への取組及び積み上げ型の授業実践によって、教師個々がより主体的に授業研究に取り組むようになり、授業の質的改善が見られた。
- 全校一斉漢字大会や朝自習の取組によって、読み取る力の基礎となる漢字力を身に付けようとする児童の意欲が高まった。
- 家庭への資料の配付や説明会の実施等の取組が、児童の学力向上に対する意識の啓発につながった。

(2) 課題

- 基礎的・基本的な学習内容の確実な定着と同時に、応用力・思考力・イメージ力を培っていく必要がある。

小林市立南小学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

平成17年度の「小学校学力調査」、「CRT検査」、平成18年度「NRT検査」のそれぞれを分析、検討しながら課題の抽出を行った。特に、学年全体で到達度に課題のある内容と到達度に関係のある内容に分けて学習状況をとらえる努力を行ってきた。その結果、学校全体としての課題や学年固有の課題が教科ごとに浮き彫りになってきた。

(2) 意識調査結果からの課題

平成17年度の「小学校学力調査」に伴う意識調査の結果、家庭学習について課題が指摘された。また、学校独自の意識調査を行っていないということも課題の一つとして挙げられた。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

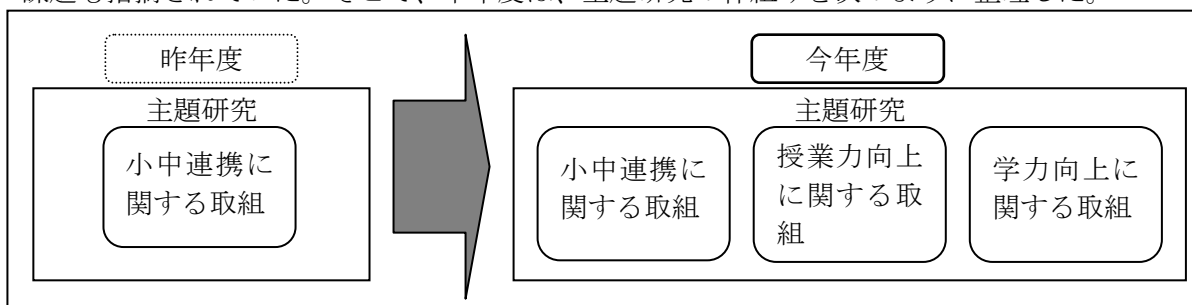
(1) 学力向上に向けた経営方針

「育てられる人(子ども)がいて、育てる(指導する)人(大人=教師)がいて、信頼関係の上に立った教育活動を展開するとき、効果的な人間形成がなされていくものである」という基本理念に基づき、PDCAのサイクルを重視した教育活動の展開を目指している。常に子どもを根底に置き、児童理解による実態把握や、指導法の工夫改善に努め、一人一人に応じたきめ細かな指導や教育活動を展開することを基本方針の最初に位置付けている。

(2) 教育課程内の取組

① 校内研修に関する工夫改善

昨年度は「知」・「徳」・「体」に関する推進拠点校としての取組を主題研究として位置付けていた。しかし、本校の児童の実態に即応した取組が組織的・計画的に進められないという課題も指摘されていた。そこで、本年度は、主題研究の枠組みを次のように整理した。



【図1 主題研究の枠組みの変更】

特に、「学力向上に関する取組」に関する研修では、各種学力検査で学校全体としての課題として浮き彫りになった「叙述に即した内容の理解」という課題に対して、授業改善を通して解決していくことにした。他にも様々な課題が指摘できたが、優先順位をつけ、課題を絞り込んだ結果、「国語科における叙述に即した読み取りの充実」をテーマに、全職員が知恵を出し合い、よりよい指導法の発見、共通実践に取り組むこととした。

② 小中連携の「知」に関する取組の推進

昨年度から推進拠点校として小中連携の研究を進めている中で、本年度は到達目標に対する評価計画を作成し、「読み・書き・計算・コミュニケーション能力」の評価を行っている。「どの場面で」、「どんな方法で」、「どんな評価」を行うのかを明確にした評価計画作成により、本校の「基礎・基本」の定着状況についての実態把握を行うことができ、諸検査とのクロス集計により、より本質的な課題の抽出ができると期待している。

(3) 教育課程外の取組

① 補充の時間の位置付け

週時程・校時程に、木曜日以外の放課後の15分間を使い、基礎学力定着を図る時間を「習熟の時間」として設定している。ただし昨年度までは、この時間の指導内容や形態は学年の

主体的な計画に委ねられていた。そこで今年度は、諸検査で明らかになった前学年までの既習事項の中で、学年全体で到達度に課題のある内容と到達度に関きのある内容に対しての補充的な指導を行う計画を学年ごとに立案し、意図的・計画的な活用へ変更した。さらに、特別支援教育の観点から「習熟の時間」に学級担任以外の教員を充てる計画もあるため、複数教員による指導形態をとることが可能になっている。

【表1 南小の週時程・校時程】 ※一部抜粋

時刻	月	火	水	木	金
	5校時				
14:45		帰りの会	帰りの会	帰りの会	
15:00	6校時	習熟の時間	習熟の時間	移動・準備	6校時
15:15				クラブ委員会	
15:45	帰りの会				帰りの会
16:00	習熟の時間				習熟の時間
16:15					

② サマースクールの実施

夏季休業中に、習熟に関きの出る高学年の希望児童を対象に「サマースクール」を開催している。国語、算数の指導を中心に、少人数習熟度別の指導形態により、基礎学習から発展学習まで幅広く対応するようにしている。基本的には全ての教員で指導にあたるよう計画をしている。

③ 教育環境の整備

諸検査の結果、第3学年以上での「辞書の活用」に課題があることが判明した。そこで、これまで図書室に一括保管されていた辞書を第3学年以上の各教室に移動し、日常的に辞書を活用できる環境を整えた。図書室での使用も必要になるため、今後図書室用の辞書をまとめて購入し対応していく予定である。

(4) 保護者・家庭、地域との連携

① PTA 広報部と連携した意識調査の実施

学校独自の意識調査を行っていないという課題解決のため、PTA 広報部が主体となった保護者・児童を対象とした意識調査を実施した。これらの結果をPTA 新聞に掲載し、学校・保護者・地域が現状を把握し、具体的な取組を進めていく基盤づくりを行った。

② 家庭学習の啓発

本校は過去に「学力向上フロンティア事業」の中で、「家庭学習レインボープラン」を作成した。それをもとに昨年度は、小中連携の観点から改善を図り、「家庭学習の手引き」を作成し配付した。同時に、学校でも学級懇談会や学級通信等により、その具体的な活用を呼びかけた。さらにPTA 総会においても、本校の学力向上の取組等について説明・報告している。

3 成果と課題(今後の取組を含む)

(1) 成果

- ・諸検査の分析の方法を統一し、課題を視点ごとに分類して抽出した結果、その対応策がより具体的、計画的に行えるようになった。

(2) 課題

- ・小中連携の取組において、「読み・書き・計算・コミュニケーション能力」の評価結果をもとに、今後の対策を検討していく必要がある。

小林市立三松小学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

算数の場合、内容別では、「概数」「円と球」で落ち込みが見られ、領域では、「図形」や「数量関係」が苦手である。さらに、理科の場合、「地球と宇宙」「生物と環境」の領域の正答率が低く、社会科においては「資料の活用」と「知識・理解」の観点の正答率が低い状況にあった。さらに、詳しく個別の結果を分析してみると、個人差が大きく到達度の低い児童の学力を上げる必要があることが明らかになった。また、全体的に到達度が低い領域や内容があるため、重点的な取組が必要であることが明らかになった。また、理科の内容などにおいては、身近な自然の事象等と関連させたり、課題意識をもち実験及び観察等の活動を十分行わせる中で確実に理解させるよう工夫する必要がある。

(2) 意識調査結果からの課題

学校での学習への取組や家庭での生活や学習についての様々な課題が明らかになった。

テレビやゲームに費やす時間は、平日、休日ともに、県平均を上回る傾向にあり、読書の時間や学習の時間についても平日、休日ともに、県平均を下回る傾向にある。このことから、テレビ等の視聴時間の減少と読書や学習時間の増加とその習慣化が図られれば、今以上の効果が表れることが期待できる。

また、家庭での会話の時間についても、県平均より少ない傾向が見られ、このことが友達に分かりやすく伝えるなどの子どもたちの言語能力や表現力にやや欠けているなどの実態につながっているようである。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

- ① 学校経営の基本方針の第1に「わかる授業で基礎学力の向上や確かな学力の育成を図る。」と掲げ、少人数指導や習熟度別授業など個に応じた指導の展開を図った。
- ② 教材や指導方法を工夫するなど発展的な学習で一人一人の個性に応じて子どもの力を伸ばすよう指導の充実を図った。
- ③ 朝の学習タイムや読書活動を実施するなど、学ぶ喜びを体得できる機会の充実を図り、学習習慣を身に付けるよう工夫した。
- ④ 家庭学習の習慣化を図り、学習内容の充実と定着化を図った。

(2) 教育課程内の取組

① 校内研修の取組

本校では、「確かな学力を身に付け、自ら課題を追究する児童の育成」という研究主題を掲げ研究を行ってきた。研究の柱には、「算数科における指導の重点化」と「指導過程の工夫」が挙げられる。「算数科における指導の重点化」ということでは、学力調査の結果を受け、学年を中心に分析し問題点を抽出した。そこで分かった内容を受け、「最重点単元」（学年全体として正答率の低い内容に関する単元）や「重点単元」（個人差の大きい内容に関する単元）を設定した。最重点単元については、教科書配当時数より2時間多く配当して、単元導入時に前学年の既習事項の復習を1時間、単元のまとめや復習の時間を1時間確保し、指導の充実を図った。

次に、「指導過程の工夫」においては、問題設定の工夫や「具体・映像・記号」の認知過程の位置づけ、数学的な考え方に着目したまとめ方を行うなどの研究をとおして、自ら課題を追究しようとする意識をしっかりと持てるように基本的な指導過程の流れを工夫した。さらに、学び方や考え方が定着できるよう継続的に授業改善を図った。

② 小・中連携による教科別研究

小・中連携による各教科部会を定期的に行った。教科部会は内容や指導方法など教科の特質を考慮して6つのブロックに分け、小・中学校の職員による合同研修会を行った。

算数・数学部会では、両校で実施する授業研究を中心として、小学校から中学校の9か年を見通した指導の系統性やポイントを出し合い、共通理解するなど相互の理解を深めることができた。さらに、これらの研修の成果をそれぞれの学校での授業や教材研究に生かし、重点的に、また力を入れた指導に心がけた。

(3) 教育課程外の取組

① 朝の計算タイム・漢字タイムの取組

学力調査結果の分析により学年全体として到達度の低い内容や領域の問題を中心に、朝の習熟の時間（計算タイム・漢字タイム）の計画を立て、重点的に指導を行った。

② サマースクールの取組

国語・算数で個別に支援を必要とする児童を対象に実施した。前期4日間、後期3日間の計7日間実施した。学力検査の分析の結果本人の到達度が低い内容や領域、7月までの当該学年の内容で十分に理解できていない単元等を中心に、担任以外の教師も指導に入り少人数での指導を行った。

(4) 保護者・家庭・地域との連携

① 「家庭学習の手引き」の活用

平成16年度に、小・中連携で作成した「家庭学習の手引き」の内容を見直し、各家庭に配付したり、家庭学習の内容や時間等について参観日の懇談等で啓発したりして、保護者の家庭学習への意識を高めるようにした。

② フリー参観の実施

フリー参観で保護者が全学級を参観する機会を設け、授業についての意見をいただくことにより、教師の指導力の向上につながるようにした。

③ 家庭への啓発

「学校たより」等をとおして、学力調査の結果や考察について説明し、今後の取組や家庭学習の必要性についての啓発を行った。

3 成果と課題

(1) 成果

- 教師集団が算数を中心にした主題研究をとおして、児童の問題意識を大事にして問題設定や指導過程を工夫するなどの、授業改善が図られた。
- 教師自身が学力調査の結果を分析する研究をとおして、児童の学力向上を系統的、計画的に実践しようとする意識改革が図られた。
- 学力テストの分析をもとに、意図的・計画的に教育課程内外における対策をとったことで、年度末に行った同問比較調査では、ほとんどの内容について目標を達成することができ、その対策の有効性を確認することができた。
- 家庭や保護者の中でも、学校の取組への理解が図られ、家庭学習の充実のための助言や賞賛などが多く見られるようになり、学力向上を含めた教育活動への関心も高まってきた。

(2) 課題

- 教育課程内で確かな学力を身に付けることができるよう、教師一人一人の指導力をさらに向上していく必要がある。
- 少人数指導の充実や個別指導の時間の確保など、個に応じた指導の充実などきめ細かな指導を行うことで、児童一人一人に対応した学習の改善を図っていきたい。
- 家庭や保護者に向けた啓発活動や説明の場を定期的に設定し、家庭においても学力向上について関心を高め、適切な支援の充実を図っていく。

高原町立高原小学校の学力向上への取組

1 平成 17 年度の本校の学力調査結果及び意識調査から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

本校では平成 15 年度から 3 年間、授業におけるきめ細かな指導の在り方を究明しながら研究・実践を行い、基礎・基本を定着させ、学力向上をめざしてきた。表 1 を見てみると学力テストの偏差値が徐々に伸びてきていることがわかる。

【表 1：学力テストの年度別偏差値の推移】

	国語	算数
H16 年度	48. 4	50. 2
H17 年度	51. 1	52. 4

しかし、学年または個人による基礎・基本の定着の差が見られた。各教科の基本的な学習指導過程を、共通理解し、全職員で実践していくとともに、個に応じた指導の工夫が必要である。

(2) 意識調査結果からの課題

与えられた課題に対して、ねばり強く取り組むことや意欲的に学習することを苦手とする児童がいる。そのため、学習を自分のものとしてとらえ、主体的に学習する手立てを講ずる必要がある。

特に、国語科については、他教科に比べて苦手意識があり、指導に重点を置く必要がある。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

本校では、学力向上に向け、以下のような経営方針で学習指導に当たっている。

- 各教科、総合的な学習の時間を中心に、体験的な活動や問題解決的な学習の充実を図り、自ら課題を見付け、意欲的によりよく問題を解決する力を育成する。
- きめ細かな指導や個性を生かす教育、到達目標達成の取組を推進し、基礎・基本の確実な定着を図る。

(2) 教育課程内の取組

○ 問題解決的な学習の充実

児童一人一人に基礎・基本を定着させるためには、児童自らが課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断し、よりよく問題を解決する力を身に付けさせることが大切である。そこで、本校では各教科の基本的な学習指導過程を「つかむ」「予想する」「見通す」「調べる」「まとめる」の 5 段階とし、授業を進めている。

○ きめ細かな指導の展開

本校では、評価をもとに児童の実態を把握し、個に応じた指導・支援を行い、確実に基礎・基本が定着するような学習を展開することで、評価と指導・支援の一体化を図っている。個に応じた指導・支援とは、意識調査やレディネステスト、前時までの児童の学習状況に対する教師の評価から児童の実態を把握し、「A：目標に十分達成している」「B：おおむね目標に達成している」「C：努力を要する」の実態に応じた手立てを講じていくことである。特に、本校では学習指導過程の「調べる」段階に重点を置き、基礎・基本を確実に定着することができるようにしている。

【表 2：きめ細かな指導・支援の例】

段階	児童の実態	きめ細かな指導・支援例
A	目標に十分達成している	・発展問題、リトルティーチャー、問題作成等
B	おおむね目標に達成している	・類似問題、辞書の活用、小グループでの話し合い、ペア学習等
C	努力を要する	・個別指導、ヒントカード、具体物・半具体物、補充問題等

○ 自己評価・相互評価

「まとめる」段階に自己評価・相互評価を取り入れ、児童が意欲をもって学習に取り組めるようにするとともに、基礎・基本が確実に定着できるようにした。自己評価・相互評価の観点は「情意面に関すること」「学習内容に関すること」とした。さらに、累積的な自己評価・相互評価も取り入れ、児童自身が自己の変容を知ることができるようにした。

○ 少人数指導の工夫

本校では 2 名の少人数指導教員が配置されている。平成 17 年度は、算数科において全学年で少人数指導を実施した。平成 18 年度は、児童の実態から国語科と算数科において、少人数指導

を実施している。児童が学習に主体的に取り組み、基礎・基本を定着させるために、少人数指導における学習形態の工夫や、きめ細かな指導を行うための手立てを工夫している。

【表3：少人数指導における指導形態】

指導形態	学習内容
習熟度別グループ編成	○ 知識・理解などの習得に個人差が著しく見られる学習 ○ 作業や嗜好の速さに個人差が著しく見られる学習
等質グループ編成	○ 児童同士の教え合いが期待できる場合 ○ 習熟の差があまり見られない場合 ○ コース決定や課題選択が難しい低学年
課題別グループ	○ 導入時に課題を複数提示し、児童が内容



また、少人数指導教員が学級担任と協力して宿題や家庭学習にも積極的に関わるようにし、学習内容の確実な定着を図っている。

○ ぶんぶんタイム（1単位時間）

平成18年度は、児童の実態から1単位時間の「ぶんぶんタイム」を年間5時間（国語科）設定し、読み取る能力の取り立て指導を行っている。その際、クラスに2名以上の教師が入り、指導を行い、児童の実態に応じたよりきめ細かな指導を行っている。

(3) 教育課程外の取組

○ 計算タイム

2校時終了後の業間の時間（10：25～10：35）を「計算タイム」と称し、全学年で毎日計算練習に取り組んでいる。児童が意欲的に取り組むことができるように、時間や点数を記録したりして、意欲的に実施できるようにしている。これまで継続して取り組んできたことで、確実に計算力が付いてきている。

○ ぶんぶんタイム

月曜日の朝の時間（8：15～8：25）を「ぶんぶんタイム」と称し、以下のような内容で指導を行い、「書く力」「読む力」「漢字力」の定着を図った。

【表4：ぶんぶんタイムの各学年部ごとの内容】

週	内容	低学年	中学年	高学年
1週	言葉	伸ばす音、撥音、拗音等	指示語、接続語等	送りがな、仮名使い等
2週	作文	「～は～です。」の練習	段落に分けて書く。	書き出しを工夫して書く。
3週	漢字	平仮名、片仮名、漢字	漢字、学習した漢字を使って文を書く。	熟語の構成から言葉の意味を考える。
4週	読み取り	文章題を中心に問題を解く。		

○ 読み聞かせ

毎週金曜日の朝自習の時間に保護者やボランティアの方々が、各クラスごとに読み聞かせを行っている。児童も楽しみにしており、読書への意欲付けになっている。

(4) 保護者・家庭、地域との連携

○ 家庭学習の手引き

本校では、児童の家庭学習の充実を目指して、「家庭学習の手引き」を作成し、全家庭に配付している。家庭学習の進め方や家庭学習の内容、目標時間などを記載している。児童へ指導するとともに学級懇談や個人面談の際、家庭学習の定着や内容の充実についての啓発を行っている。

3 成果と課題（○成果、●課題）

○ 問題解決的な学習を取り入れ、個に応じたきめ細かな指導を展開してきたことで、基礎・基本が定着してきた。平成18年度の学力テストの結果（国語 52.7、算数 54.0）にも成果が現れている。

○ 自己評価・相互評価を取り入れたことで、児童が自分を振り返る習慣が身に付き、学習意欲が高まり、主体的に学習に取り組むようになってきた。

● 今後も評価と指導の一体化を図り、個に応じたきめ細かな指導・支援を充実していく必要がある。

都農町立都農小学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

- 国語は「話す力・聞く力」、「読む力」、「話す力・聞く力」が十分とは言えない。
- 社会は、「社会事象についての知識・理解」が十分とは言えない。
- 算数は、県の平均を下回り、特に「数学的な考え方」や「数量や図形についての表現・処理」の力が十分身に付いていない。
- 理科は、「自然事象についての知識・理解」が十分とは言えない。
- 学級間の学力差が大きく、学級編制の方法を改善する必要がある。

(2) 意識調査結果からの課題

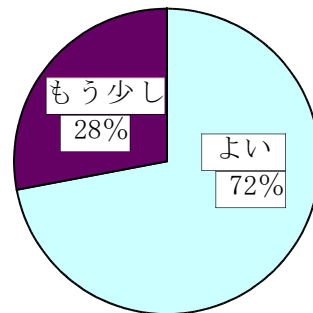
- 「学びを律する力」の中の「パソコンやインターネット」体験が十分ではない。
- 「自己責任」の中の「同じ間違いを繰り返さない」という意識が十分ではない。
- 「学習スキル」が十分身に付いていない。
- 「心の豊かさ」の中の「責任を持ってやり抜く」意識が十分ではない。
- 「学校での指導・活動」の中の「ふり返りテスト」での確認が十分ではない。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

- 諸検査やアンケートを活用して、児童の実態を把握・分析し、重点的に指導していく内容などを明らかにし、指導計画を立案する。(資料1：家庭学習に関する実態調査結果の一部。この調査から、自主的な家庭学習の習慣形成が不十分な実態を把握できた。)
- 年間指導計画の確実な実施により十分な指導が行えるよう、授業時数を確保し、指導内容を精選して繰り返し指導を徹底する中で、基礎・基本の定着を図る。
～あまりに多くのことを教える事なかれ。しかし、教えるべきことは徹底的に教えるべし(英：ホワイトヘッド)～
- 教師の指導力を高める研修の充実を図る。主題研究や校内小・中連携対策会の中で指導方法の工夫・改善を行い、授業の充実を図り、CRTの学年の平均点が5点増加することを目指して指導に取り組んでいく。

自分から進んで家庭学習をする。



資料1

(2) 教育課程内の取組

- 日々の授業において、基礎・基本の定着を徹底する。国語、社会、算数、理科の4教科で「ふり返りテスト」を実施し、目標得点90点をすべての児童が達成するよう繰り返し指導を行う。
- 分かる授業の工夫・改善に努め、児童の実態に応じた学習プリントを作成し、授業や宿題で活用していく。ふり返りテスト等で使用する学習プリントは、学年毎の棚に整理して準備しておき、必要なとき即座に活用できるように、指導資料の整備・活用の工夫も行っていく。

(3) 教育課程外の取組

- 「読む力」の向上を図るため、毎週水曜の業前活動に「読書の森」の時間を位置付けると共に、10月を読書月間として業間の5分間読書に取り組み、読書活動を推進する。
毎月6冊以上の本を読む児童の割合が80%になることを目指して取り組んでいく。
- 読む力、書く力、話す・聞く力を高めるために、毎週木曜の業前活動に「スキルタイム」を位置付け、視写・聴写活動を行ったり、自作の進級テストを行ったりして、個に応じた指導を充実させる。
- 基礎・基本の定着を図るため、月曜の放課後に「個別指導の時間」を位置付け、個に応じたきめ細かな指導を充実させる。また、様々な時間を活用して、児童の間違いやつまづきに対し、理解できるまで繰り返し指導する。



資料2

(4) 保護者・家庭、地域との連携

- 家庭読書の日（毎週水曜）を定め、家庭での読書を推進する。また、10月を読書月間とし親子読書の取組を進め、読書力向上を図る。
業前の「読書の森」では、保護者を中心とした読み聞かせボランティアグループと連携し、月2回の読み聞かせを行い、読書に対する興味・関心を高めていく。（資料2：読み聞かせに聞き入る児童）

- 家庭学習習慣の形成を充実させるため、従来の「家庭学習の手引き」を改善の上、配付し、新たな活用を図る工夫を進めていく。通信や懇談等を通して家庭学習の重要性について啓発

- 家庭学習習慣の形成を充実させるため、従来の「家庭学習の手引き」を改善の上、配付し、新たな活用を図る工夫を進めていく。通信や懇談等を通して家庭学習の重要性について啓発を図ると共に、2学期末に行う「家庭学習調査」で、すべての児童が学年の家庭学習時間の目標を達成することを目指して取り組んでいく。（資料3：家庭学習の手引き。高学年児童用。資料4：家庭学習の手引き。保護者用）
- 家庭学習で課した課題（プリントやノート等）には必ず目を通し、間違えていたところはやり直しをさせたり個別指導を行ったりして、確実な理解へとつなげていく。

資料3

資料4

3 成果と課題（今後の取組を含む）

(1) 成果

- 学力調査結果から見た成果として、平均点では国語、算数、理科で向上が見られた。
- 意識調査結果から見た成果として、平成17年度の課題についてほぼ解決が図られている。
- 現在取り組んでいる指導方法の有効性が今回証明された形となった。

(2) 課題

- 学力調査結果から見た課題としては、社会の平均点の向上がある。更に指導方法の工夫・改善を図りたい。

延岡市立恒富小学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

- 国語科の話す力・聞く力が低い。
- 理科の観察・実験（技能・表現）の能力が低い。
- 基礎に関わる回答率が低い。
- 個人差が大きいため達成率が低くなっている。

(2) 意識調査結果からの課題

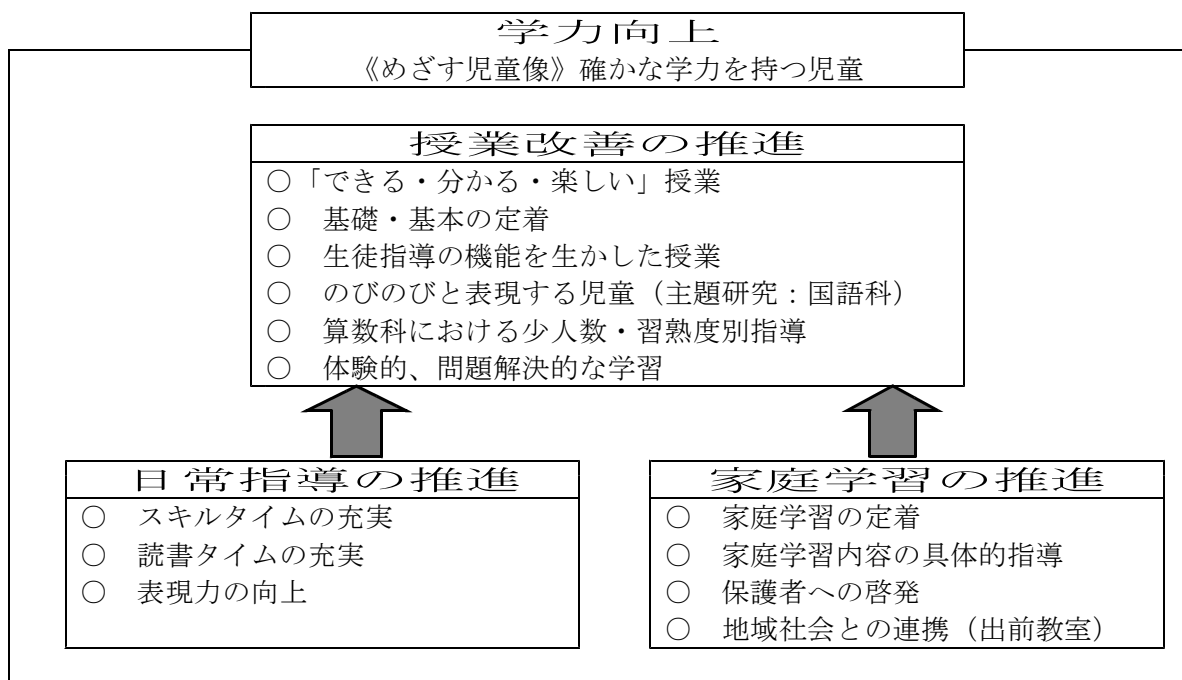
- 生きる力の中でも自己成長力が特に低い。
- 自ら学ぶ力が全体的に低調である。
- 学習意欲がやや低い。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

本校では、教育目標「夢（もくひょう）を持ち行動（どりよく）する児童の育成」を具現化するため、学力向上推進プランを立て、学習指導に当たっている。

【恒富小 学力向上推進プラン】



(2) 教育課程内の取組

① 「できる・分かる・楽しい」授業を目指した教師の授業力向上

児童の学力向上のためには、教師の授業力向上が不可欠であると考え、校内研修での全員授業の取組や研究授業、管理職の模範授業等を実施した。その結果、指導力の向上が見られ、児童アンケートでは、80%以上の児童が「学習内容がよく分かる」と回答していた。

また、恒富中学校区学力向上プロジェクト会議の取組として、小中3校で授業研究会を年間3回実施し、小中連携を通じた指導力の向上に努めている。

② 基礎・基本の定着を図るとともに、学習意欲の向上を図る授業の創造

本校では、児童が主体的に学習に取り組めるように、国語科・算数科を中心に問題解決的な学習を展開している。また、自己存在感を認め、互いに励まし合いながら、できるだけ多くの自己決定の場を取り入れた学習指導を行っている。

③ 校内研修（主題研究）の充実

話す力・聞く力が低いという課題を解決する手立てとして、国語科を中心にした言語活動を通して、確かな学力を身に付けのびのびと表現する児童の育成に取り組んでいる。具体的な取組として、音読やスピーチ・群読、視写・聴写等を実践している。

④ 算数科における少人数・習熟度別指導

第4～6学年の算数科の授業において、少人数・習熟度別指導を行っている。児童の実態に応じて、補充的な学習や発展的な学習を取り入れることで、個人差の解消が少しずつではあるが図られてきている。

(3) 教育課程外の取組

① スキルタイム・読書タイム（8：05～8：35）の充実

月	火	水	木	金
スキルタイム 読書タイム	各種集会	スキルタイム 読書タイム	読書タイム (ロング)	スキルタイム 読書タイム

毎朝（火曜日を除く）上記のような計画で、漢字や計算力の向上をねらいとしたスキルタイムを実施している。また、木曜日の読書タイムでは、教師やPTAボランティアによる読み聞かせを行うことで読書好きの児童が増えてきた。

② 表現力の向上

ア 表現活動「やまももタイム」の実施

校内放送で、給食時間に児童の作文や俳句などの紹介、朗読などの活動を行っている。意欲的に表現しようとする児童の育成に役立っている。

イ 集会活動の充実

全校集会、学年部集会等の時間を利用して、児童の発表の場を設けている。

(4) 保護者・家庭、地域との連携

① 家庭学習の定着

学年×（10～15分）の学習時間を確保するために、保護者への協力を呼びかけている。また、家庭学習の内容についても、児童や保護者に具体的な例を示すことで、児童一人一人が取り組みやすいように配慮している。

② 保護者への啓発

「子どもたちのよりよい家庭学習のために（家庭版）」を利用して保護者への啓発を図った。

③ 「夏休みパワーアッププラン」の実施

「親子で楽しもう夏休み！」を合言葉に、夏休みに親子で取り組む具体的な活動（学習・生活・健康）を紹介したプランを作り、各家庭へ配付し実践化を図った。

④ 出前教室の実施

夏休みと冬休みに、職員が各担当地区に出向き、学習教室を実施している。公民館などを会場として実施することで地域との連携も図られている。

3 成果と課題（今後の取組を含む）

(1) 成果

- 個に応じたきめ細かな指導を実践することで、児童の学習意欲が高まってきた。
- 発表や表現の場を増やしたことで、自信をもって発表できる児童が増えてきた。
- 研究授業を通しての研修を重ねることで、教師の授業力の向上が見られるようになった。

(2) 課題

- 自分の将来に対して夢や希望が持てる児童を育てるための具体的な手立てを工夫する。
- 家庭での学習習慣をより一層定着させるために、保護者との連携を更に深める。

延岡市立西小学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査の結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

- 国語科では、説明的文章と比較して文学的文章の読み取りの到達度が低く、文脈に即した内容の理解と記述、人物の心情の理解、比喻表現等の力を高めていくことが課題として挙げられた。
- 算数科は、基礎的な計算問題はよくできているが、数量関係の立式や複雑な面積を求める問題を苦手としている傾向が見られた。

(2) 意識調査結果からの課題

- 全ての項目に渡って学習に対する意識のばらつきが見られた。
- 読書習慣は、1か月に読む本の冊数が県の平均に届くことができなかった。
- 家庭学習を自分自身の力で取り組む姿勢が不足している。また、ゲームをする時間が県平均より多いという結果が出ており、生活リズムの改善が必要である。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

- 「基礎学力」の内容（読む・聞く・書く・話す・計算する）といった学習の基礎的な技能を定着させる。
- 基本的な生活習慣も含めた基本的な学習態度を定着させることで、学びに対する意欲や学びに対する態度を育てる。

(2) 教育課程内の取組

① 国語科と算数科を中心とした学習指導

<問題解決的な学習指導過程>

- つかむ・見通す・調べる・まとめる・たしかめるなどを基本とし、見通しをもち筋道を立てて考える力を育てる学習指導過程を児童にも意識させることができた。
- 児童の興味・関心を引き出すことが学びに対する意欲を高めることにつながると考え、発問を工夫したりグループ活動を取り入れたりすることで、話し合いにも意欲的に取り組む児童が増えてきた。

<全文視写を取り入れた読み書きの一体的指導>

- 改行の仕方や会話文の書き方などをきめ細かに指導することで、日記や作文でも正しい文章を書くことができるようになってきた。
- 低学年段階では、教材文の全文を授業の中で指導しながら視写させることで、読む力も付いてきた。

<音読先習による指導>

- 国語科において年度当初より新出漢字を読む練習を行わせた。読む力を伸ばすためには、まず漢字を読めるようにすることが大切であると考えたからである。また、既習の漢字についても平行して音読してきた。6年生においては、3年生段階からの音読を実施している。

② 学習態度の育成

<自分の考えをもち、発表するための手立て>

- 発達段階に応じた基本的な話型表を作成し、各教室に常掲し、具体的な発表の仕方を示していった。その結果グループや少人数の話し合いでも自信をもって発表できるようになってきた。

<『学習態度育成週間』の設定>

- 下表のような項目を教室にカード形式で掲示することで、意識して学習態度の定着を図った。なお、この項目については、週間中、自己評価カードを用いることで意識付け

を図ってきた。

月曜日・・・チャイムの合図で黙想しよう
火曜日・・・机やロッカーの中をきれいに整頓しよう
水曜日・・・姿勢に気をつけて学習しよう
木曜日・・・鉛筆を正しくもってていねいに書こう
金曜日・・・休み時間に次の学習の準備をしよう

この結果、恒富中学校ブロックで共通実践している三つの約束の一つである『チャイム黙想』も定着し、落ち着いて学習に臨む姿勢が身に付いてきた。

(3) 教育課程外の実践

① 校時程の工夫

- 月曜日の朝の活動の時間（8：05～8：15）で漢字テストを全校的に実施してきた。また、水曜日と金曜日については教師の指導のもとで、漢字ドリルと計算ドリルに取り組みさせた。また職員朝会を実施する時間（8：15～8：25）には、読書活動を取り入れることで、読書活動の推進に努めた。この結果、漢字を書く力や読書に対する意識の高揚が見られた。

② 『恒富中学校区意見発表会』への積極的な参加

- 日頃学習してきた成果を発表する場として、各学年より代表1名を選出し、意見発表会に参加している。全文視写や日記指導の成果もあり、どの学年も素晴らしい発表を行うことができた。

③ 校外における作品発表への積極的な参加

- これまでに取り組んできた作文や習字などをさまざまな場で発表させることで、成就感を児童に与えるだけでなく、今後の学習への意欲付けを図ることができた。

(4) 保護者・家庭・地域との連携

① 『学習の手引き』の作成と啓発

- 家庭学習の進め方を作成し、全家庭に学級懇談会を利用して啓発してきた。手引きの内容としては、家庭学習で行うべき内容の例やノートの使い方の約束、そして、目標となる各学年段階における学習時間の目安を示した。この結果、家庭学習が充実してきた。

② 地域への発信

- 『西っ子フェスタ』や『運動会』などの学校行事の場を通して、児童の学習への取組を幅広く発表してきた。その結果様々な学習に対して、地域の方々の学校に対する積極的な協力が見られている。学校だけでなく、地域全体で子どもたちを育てようとする気運が高まってきている。

3 成果と課題

(1) 成果

- 16年度までの課題を解決していく研究を進めた結果、18年度の学力検査では、国語、社会、算数、理科全ての教科において県平均を大幅に上回る成果を見ることができた。
- 国語科の授業研究と常時指導を一体化した指導の結果、読む力が高まり、他の教科についても大きな飛躍につながった。
- 算数科については、問題解決的な学習指導過程を児童にも意識させて取り組ませたり、少人数指導の進め方を工夫したりする中で、かなり高い達成率をあげることができた。

(2) 課題

- 全体的な底上げはできたが、現段階ではまだ個人差が大きい。したがって、より底辺の児童の力を伸ばす必要がある。また、上位の児童をさらに発展させていく必要がある。
- 本研究の成果は、十分に見られたが基礎学力を身に付けさせるためには、確実に指導を継続していくことが大切である。今後もこれまでの研究の成果と課題を整理し、今後の指導に生かしていきたい。

延岡市立東海小学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

教科等	学習到達度調査結果にみる課題
全体	国語、社会が県の平均点を下回っており、学習指導の工夫改善が特に必要である。
国語	叙述に即した読み取り、丁寧語等の言葉についての知識・理解、ローマ字の定着が不十分であり、言葉についての基礎的・基本的事項の指導の徹底が必要である。
社会	地域の人々の生活を支えるもの、都道府県の様子についての知識・理解、思考・判断が不十分であり、地域素材や資料の充実及び活用、学習内容の理解度の確認、日常生活における社会的事象に目を向けさせる指導等の工夫改善が必要である。
算数	図形、量と測定の知識・理解が不十分であり、学習内容の理解度の確認をもとに定着・習熟を図っていく必要がある。
理科	地球と宇宙、生物とその環境など、観察・実験をもとにした科学的な思考、自然事象についての知識・理解が不十分で、観察・実験の目的や観点、結果をもとにしたまとめや確認などの学習指導を工夫していく必要がある。

(2) 意識調査結果からの課題

観 点	学習意識調査結果にみる課題
全体	学びの基礎力は、県平均とほぼ同様な傾向を示しているが、生きる力においては、問題解決力、社会的実践力、心の豊かさが県平均を下回っており、主体的に考え責任をもって行動しようとする態度の育成が課題である。
学びの基礎力	学習スキル、学習定着のための方略、自宅学習習慣、学習のけじめ、学習環境の整備において、県平均を下回る項目がみられ、学習規律の徹底や学習習慣の形成などの指導の工夫改善が必要である。特に、見直しを確実に行うこと、まちがいをやり直すこと、学習したことを復習することの指導の徹底を図る必要がある。
生きる力	問題解決力、社会的実践力、心の豊かさにおいて、県平均を下回る項目が多くみられ、学び方や自分の考えのまとめ方、社会問題に対する見方・考え方、自らの行動に責任をもつ態度、他者の考えや意見を尊重する態度を高めていく必要がある。
指導・活動	学びの基礎力における自ら学ぶ力、学びを律する力、生きる力における問題解決力、社会的実践力、心の豊かさについて、児童の意識からは、学校での指導・活動が不足しているという傾向がみられ、学校における指導の工夫改善と徹底が必要である。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

- 楽しく分かる授業づくりや朝自習等の工夫により、基礎学力の向上に努める。
- 少人数指導(算数)、「わくわく算数学習」をはじめとして、個別指導の充実に努める。
- 朝の読書活動の充実により、豊かな情操と言語力の育成に努める。
- 立腰教育の推進し、学びへの姿勢づくりに努める。
- 校内研修の充実を図り、教職員の資質向上に努める。
- 主題研究における学習指導の実践的研究により、教師の授業力・指導力の向上に努める。

(2) 教育課程内の取組

取組事項	取組の内容と方法	備 考
楽しく分かる授業づくり	表現活動を生かした学び合いの場を設定するとともに、学年の発達段階に応じた発表の仕方、ノートのとり方などの基本的な学習訓練を徹底する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 主題研究により共同研究を進める。 ○ 国語、算数を中心に実践する。 ○ 全校を挙げた共同実践を行う。
授業中の確認問題(確認テスト)	国語、算数、社会、理科の授業における確認問題(確認テスト)を学年単位で作成し、形成的評価として、授業の内容に応じて実施する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 国語、算数…全学年実施する。 ○ 社会、理科…3～6年で実施する。 ○ 授業の終末段階に実施する。
立腰教育の推進	授業と休み時間のけじめをつけさせ、集中して学習に取り組もうとする意欲・態度を高めるために、授業のはじめと終わりに立腰を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 立腰…腰骨を立てること ○ 三息法(1分間に3呼吸)を取り入れてもよい。
学習指導の実践的研究	国語、算数における指導方法の工夫改善の手立てを班別研究で具体化し、個人研究において実践化し、授業の充実に図る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 個人の研究授業は自主公開とする。 ○ 班別に事後研究を実施する。 ○ 実践についてはレポートをまとめる。

(3) 教育課程外の取組

取組事項	取組の内容と方法	備考
読書活動の推進	毎週木曜日の朝、「読書の森」の時間を設定し、朝の読書を20分間実施する。	○ 読む本は、事前に準備しておく。 ○ 月1回の読み聞かせ(ボランティア)
漢字・ローマ字検定	毎週金曜日の朝自習後に、学年で作成した検定問題を5分間で実施する。	○ 新出漢字を中心に問題を作成する。 ○ 検定問題は学年研修で作成する。
わくわく算数学習の工夫	毎週水曜日の朝、「わくわく算数学習」の時間を設定し、個に応じた指導を行い、習熟を図る。	○ 授業や宿題とのつながりを考慮する。 ○ 学年で共通の内容・進め方で実施する。

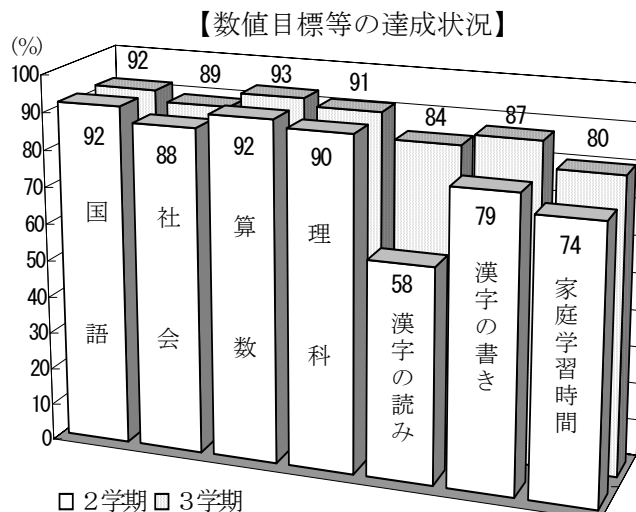
(4) 保護者・家庭、地域との連携

取組事項	取組の内容と方法	備考
学年での宿題等の作成と活用	授業で使う確認問題(確認テスト)や漢字検定問題、「わくわく算数学習」の問題とのつながりを考慮し、宿題等を学年で吟味・作成する。	○ 内容については学年で吟味する。 ○ 学年で共同作成したプリント等を進度や児童の状況に応じて各学級で活用する。
「家庭学習の手引書」の活用	延岡市教育委員会が作成した「家庭学習の手引書」を活用した授業及び懇談を実施する。	○ 参観日を中心に実施する。 ○ どの学級も年間1回は必ず実施する。
「生活ふりかえりカード」の活用	食事、手伝い、学習準備、家庭学習時間などを項目とした「生活ふりかえりカード」を学年ごとに作成・配付し、活用させる。	○ 毎月第1週に「生活ふりかえり週間」を設定して取り組む。 ○ 保護者・教師がコメントを記入する。

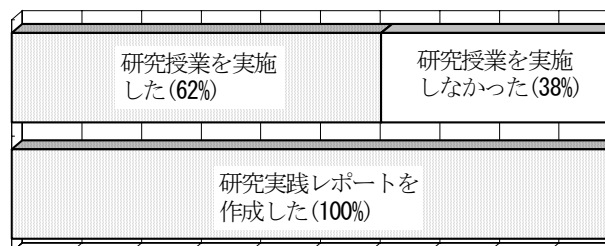
3 成果と課題(今後の取組を含む)

(1) 取組の成果

- 国語、社会、算数、理科の授業の中で確認問題(確認テスト)を実施することにより、児童に基礎・基本の事項を確実に身に付けさせることができてきている。
- 校内漢字検定・ローマ字検定を実施することにより、児童の学習意欲を高めるとともに、当該学年の漢字の読み書きの定着がよくなってきている。
- 朝の読書の時間を設定することにより、児童が意欲をもって読書に取り組むようになってきている。
- 延岡市教育委員会作成の「家庭学習の手引書」を活用した授業や懇談を実施することにより、家庭学習に対する保護者の意識も高まってきている。
- 「生活ふりかえりカード」を活用し、基本的な生活習慣や学習習慣について振り返らせることにより、児童・保護者の意識が高まってきている。
- 班別研究における指導方法の工夫・改善に関する研修と個人研究における授業研究を関連させることにより、教材研究が深められ、指導の手立てに一層工夫がみられるようになった。



【学習指導研究への取組】



(2) 今後の課題

- 学力向上への取組を継続して実践し、知識・理解、技能だけでなく、児童の意欲や態度、学び方、学習習慣等においても一層向上させていく必要がある。
- 学力向上への取組において、学年間・学級間に差が生じないように、学校全体での共通理解を深め、校務分掌との関連も考慮した組織的・計画的な取組の徹底を図る必要がある。
- 家庭や隣接する幼稚園・保育園・小学校・中学校との連携を強化し、基本的な生活習慣や学習規律の定着についても研究・実践に取り組んでいく必要がある。

門川町立西門川小学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本県の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

① 平成17年度学力調査の結果 ※ () 内は18年度

	国 語	社 会	算 数	理 科	平均
自校の平均点	86.0 (91.3)	83.8 (80.2)	79.0 (86.0)	79.5 (88.2)	82.0 (86.4)
管内の平均点	72.5 (74.9)	70.8 (70.9)	74.0 (76.4)	63.4 (70.5)	70.2 (73.2)
県の平均点	75.0 (76.6)	72.6 (71.8)	75.7 (76.2)	65.3 (70.6)	72.2 (73.8)
来年度の目標平均点	88.0 (80.0)	85.0 (80.0)	80.0 (80.0)	80.0 (80.0)	

② 平成17年度学力調査の結果からの課題

【算数】

- 数量や図形についての表現・処理
 - ・ 小数の減法 (25%) → (県: 58.4%) ・ 四捨五入 (50%) → (県: 84.9%)
- 数学的な考え方 ・ 文章題; 四則の混合した計算 (50%) → (県: 72.6%)

【理科】

- 観察・実験の技能・表現 ・ 星座早見盤の使い方 (25%) → (県: 58.4%)

(2) 意識調査結果からの課題

- 学習のはじめ
 - ・ 学習を始めたら、他のことに気をとられないで、集中している。(25%) → (県: 61.7%)
- 学習環境の整備 ・ 正しい姿勢で学習している。(25%) → (県: 59.3%)
- 授業を受ける姿勢
 - ・ ふだんから、ちこくや忘れ物をしないようにしている。(50%) → (県: 82.4%)
- 基本的な生活習慣 ・ 朝、自分で起きることができる。(25%) → (県: 68.6%)
- テレビを見る時間 (平日 120分、休日 120分) → (県: 平日 95.5分、休日 109.7分)
- ゲームをする時間 (平日 37.5分、休日 142.5分) → (県: 平日 27.3分、休日 45.4分)

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

- ① 基礎的・基本的な内容の確実な定着と個性を生かす教育の推進
- ② 主体的に学ぶ力を育てる学習指導法の工夫・改善
- ③ 学校図書館の整備と読書指導の推進
- ④ 国際理解教育・情報教育の推進

(2) 教育課程内の取組

① 複式指導解消の工夫

本校は、小・中連携による推進拠点校に指定され、小・中兼務の教員が配置されており、第4・6学年の国語科においては中学校の国語科の教員が担当した。また、第3・5学年の算数科は、教頭が担当した。これにより一部複式指導を解消し、少人数単式指導によるきめ細かな指導が行われた。

② 複式指導におけるガイド学習の導入

これまで間接指導時の学習の深まりに課題があったが、ガイド学習を導入することにより、児童だけで主体的な学習が進められるようになり、自力解決能力を高めることができた。

③ 学力検査の分析及び学力テストの実施と分析

5月に実施した第5学年の学力検査と、2月に全学年を対象に実施した国語・算数の学力

テスト（CRT）結果の分析をもとに、本校における課題を洗い出し、いつ・どのようにして解決をするか協議し、全校で補足的な学習（学び直し）を継続して実施した。

④ 調べ学習の工夫

2学年の学習を複式指導する場合、校外での学習に制限がある。そこで、インターネットやビデオ教材を活用した調べ学習を多く取り入れた。

(3) 教育課程外の取組

① 補充・発展的な指導の充実と読書指導

朝の時間（8：10～8：30）を以下のように活用して指導の充実を図った。

	月	火	水	木	金
8:10	読書	ぐんぐんタイム	読書	スキルタイム	読書
8:20	-----	-----	-----	-----	-----
8:30	(職員朝会)	(国語)	(職員朝会)	(算数)	(職員朝会)

読書については、職員朝会前の10分間は担任が在室して指導を行った。

ぐんぐんタイムとスキルタイムにおいては、20分間担任の準備した問題によって、補充・発展的な指導を行っている。また、月に3、4回は担任が交代（教師間交流）することで、マンネリ化を防ぐとともに、全学年の学力の実態を把握するように努めている。

② サマースクールの実施

夏季休業中の7月下旬と8月下旬に各2日間の午前中、2地区に教員が出向いて、個別指導が必要な児童を対象に課題別の学習指導を実施した。

③ 小・中連携による共通理解

年間20回を超える合同研修会の中で、学習指導及び生徒指導において、独自に行うことと共通して行うことがはっきりとしてきた。また、小中の教員が一緒になって児童生徒を育てるという意識が高まり、互いに望むことを提案・協議・実施・改善できるようになってきた。

(4) 保護者・家庭、地域との連携

① 家庭・地域に向けた情報の発信と公表

学級通信や週1回発行の学校便りの中でも、児童の学習や行事の様子、家庭・地域へのお願い、学力検査や学校評価の結果等に関する情報を発信した。また、保健便りにおいても、「早寝・早起き・朝ご飯」の重要性等、健康生活を支える基本的な生活習慣について啓発を図っていった。

② 「西門川の教育を語る会」の開催

年3回（学期に1回）地域の有識者とともに、西門川小中学校における教育の在り方について考える会を開催した。学校側からは、児童生徒の学力や生活態度についての報告と授業や行事への協力依頼を述べ、地域からは、学校教育への期待と地域での児童生徒の様子が報告された。それを受けて、互いに質問や意見を交わす等、西門川小中学校の未来について考える機会となっている。

③ 23が60（にさんがろくまる）運動の推進

小中連携の中での取組として、毎月23日をはさんだ1週間、家庭で合計60分間の読書運動を展開した。朝の読書活動とも重なり、児童の読書量や質が向上してきている。

3 成果と課題（今後の取組を含む）

(1) 成果

- 学力検査及び学力テスト結果の分析から明らかになった本校の課題に対して、授業はもとより、朝の学習や家庭学習において意図的に解決を図ったことにより、学習内容が定着した。
- 小中学校の職員が連携し、学力の向上に取り組む体制ができた。

(2) 課題

- 社会科と理科における複式指導は、体験を通した問題解決的な学習が困難であった。年間指導計画の中での単元の組合せや、一部教科担任制の導入を検討する必要がある。

日之影町立高巣野小学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

- ① 文脈に即した内容の理解と記述などに関する問題の正答率が低い。(国語)
- ② 下水処理やごみに関する事項や宮崎の人々の暮らしに関する知識が十分に身に付いていない。(社会)
- ③ 複雑な図形の面積など、図形に関する問題の正答率が低い。(算数)
- ④ 星座の動き、水の対流の問題の誤答率が高い。科学的な思考力を要する問題をやや苦手としている。(理科)

(2) 意識調査結果から見た課題

- ① 本やドラマなどを見て、人の生き方に感動することがあまりない状況である。
- ② 授業で習ったことを自分なりにまとめたり、生活と結びつけて考えることが少ない。
- ③ 正しい姿勢を意識できていない。
- ④ ニュースや新聞など、社会の出来事に関心が低い。
- ⑤ 家族との関わり、基本的な生活習慣が十分身に付いているとは言えない。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

昨年度の調査結果に見る課題を受けて、その課題解決に向け、児童一人一人の確かな学力の向上に努める。

- ① 主題研究で、「自分の思いや考えを分かりやすく伝え合う児童の育成」を目指し、読みを深める話し合いの在り方を授業研究を中心にして検証し、職員の指導力の向上を図る。
- ② 常に目標を持って学習に取り組む意欲付けを行い、何ができて何ができていないのか自己認識を深める評価を行う。
- ③ できるまで繰り返し学習を行う習熟の時間等を設定し、基礎・基本を確実に定着させる。
- ④ 家庭・地域と連携しながら、基本的な生活習慣・学習習慣の定着を図る。

(2) 教育課程内の取組

① 「話すこと・聞くこと」と「読むこと」の関連的指導

主題研究では、全ての学習の土台となる読解力が不足している（詳細に気をつけて読み取ることができない）という実態から、「話すこと・聞くこと」と「読むこと」との関連的指導を図り、読みを深める話し合いの在り方の研究に取り組んできた。児童と共に作る学習問題の設定や発問の精選、話し合いの焦点化を通して、相互交流の中で読みを深める話し合いの在り方を究明している。

② 個を生かす評価と支援の在り方

何ができて何ができないのか、自己認識を深める「児童の自己評価の在り方」、個の指導に生かす「教師の評価の在り方」を研究している。

③ 到達目標の設定

- ・ 「読む能力・書く能力・計算の能力・コミュニケーション能力」に関する各学年の到達目標を設定し、評価を実施する。
- ・ 「全校漢字、計算テスト」「町の共通テスト」においても、児童一人一人の目標を設定し、目標達成に向けて努力させている。

(3) 教育課程外の取組

① 日常の表現活動の場の工夫

国語で身に付けた読み取りと話し合いの力を日常の表現活動の場を工夫して、広げていくような取組を行っている。

- ・ 発表集会では、発表が終わったあとに必ず児童にその感想や意見を発表させるようにしている。聞き手に分かりやすいように工夫しながら意見を発表しようとする児童が多くなってきている。
- ・ 学級スピーチでは、スピーチする内容がマンネリ化することがないように、「サイコロ

スピーチ」「新聞を読んで」等の工夫をしながら実施している。

- ・ 全校児童が活動できる「スペース」という場所の一角に「表現のひろば」「わくわくチャレンジ」コーナーを設け、詩や四字熟語を紹介したり、国語や算数に関するクイズを掲示したりしている。掲示物は定期的に貼り替えを行い、児童の興味・関心を高める工夫をしている。

② 習熟の時間の充実

授業等の入らない木曜日の6校時目を活用して、習熟の時間を実施している。この時間は、3年生以上を対象にして、各学年に校長・教頭をはじめとする全職員を配置し、授業を進める中で特に理解が難しかった内容を抽出し、個別指導を行っている。個別指導を行うことにより、児童の理解度が上がるとともに、複数の教師で指導に当たり、協力し合うことで、効果的な指導の在り方を探ろうとする場にもなっている。

③ 家庭学習の充実

家庭学習を充実させるための手立てとして、学習内容に応じた基礎学力の定着を目指して課題の与え方を工夫している。課題は担任がその都度チェックし、なかなか家庭学習が定着しない児童に関しては、家庭への協力を仰ぎながら、根気強く指導を行っている。

(4) 保護者・家庭・地域との連携

① 読書環境づくりの工夫

- ・ 毎週水曜日を「全校読書の日」に設定し、読書活動を推進している。活動を全校一斉に行うことにより、読書に適した静かな環境のもとで、集中して読書活動をするようにしている。
- ・ 毎月第3週末を「家族ふれあい読書の日」に設定し、家族で共に読書をする時間を作ってもらったり、親から読み聞かせをしてもらったりしている。活動した様子は、カードに記入してもらい、家庭での活動の様子を把握したり、家庭での読書についてのアドバイスを行ったりすることに活用している。
- ・ 本校では「全保護者による読み聞かせ」を実施している。朝のひろばの時間を活用し、担当する保護者に自由に読み聞かせをする本を選考して頂き、学年部ごとに読み聞かせをして頂いている。子どもたちはいつも以上に集中して読み聞かせに参加するようになったと同時に、保護者の読書に対する意識高揚にもつながっている。

② 基本的な生活習慣・学習習慣の形成

毎月1回「健康チェック表」「家庭学習チェック表」を家庭に配布し、親子でそれぞれの家庭での洗顔、歯みがき、食事、睡眠、テレビやゲームの視聴に関すること、家庭学習の在り方、学習準備など、基本的な生活習慣や学習習慣に関わる大事な事項を親子で振り返るようにしている。この結果を「学力向上対策委員会」において問題提起をした後、問題解決に向けての協議を行い、共通理解を図った。

③ 「町教育の日」の設定

地域開放の日として、11月の第4日曜日を「町教育の日」と定め、地域の方々に学校における児童の学習や生活の様子を自由に参観して頂きながら、学校教育に関する理解や関心を高めていこうとする取組を行っている。

3 成果と課題（今後の取組を含む）

(1) 成果

- ① 読みを深める話合いの在り方の研究を深めることにより、授業の改善が図れ、児童が意欲的に学習に取り組む姿が見られるようになってきた。
- ② 習熟の時間等を利用して、繰り返し学習を行うことにより、基礎学力が向上してきた。
- ③ 児童に自己評価を行わせることで、常に自分のめあてを意識しながら学習に取り組む姿が見られるようになってきた。
- ④ 家庭との連携を図ることより、学習習慣や基本的な生活習慣を改善していこうとする意識の高揚が見られるようになってきた。

(2) 課題

- ① 児童が目的をもって自主的・意欲的に学習に取り組む態度を身に付けさせていく。
- ② 家庭や地域との連携をさらに深めることにより、家庭学習の充実・基本的な生活習慣の確実な定着を図っていく。

五ヶ瀬町立三ヶ所小学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

- (国語) ・ 県平均に比べ、全体的に到達度が低く、上位と下位の児童の差も大きい。
 - ・ 文章を読みとる力が不足している。
- (社会) ・ 下水処理、ゴミ処理、水道、博物館の使い方など五ヶ瀬町と他の地域と仕組みが異なるものについての理解が不十分である。
 - ・ 年表やグラフの読みとりができていない。
- (算数) ・ 「数と計算」「数量関係」領域の到達度が低く、県平均と比べ特に差が大きい。
 - ・ 「十進位取り記数法と数直線」「分数の大小」「折れ線グラフの読みとり」に関する問題の通過率が県平均と比べ特に低い。
- (理科) ・ 「応用」に関する問題の通過率が県平均と比べて特に低い。
- (全体) ・ どの教科についても、「関心・意欲・態度」に関する意識が低い。

(2) 意識調査結果からの課題

- 「学びの基礎力」「生きる力」ともに県平均を下回っているものが多い。
- 読書量が少ない。
- 家庭での指導援助について肯定的な解答をしている児童の割合が低い。
- 学力調査で「国語、算数、社会が好き」と答えた児童は半数以下である。
- 学習時間は県平均を上回っているが、学力調査の結果にそれが反映されていない。
- テレビを見る時間やゲームをする時間が県平均を大きく上回っている。睡眠時間や起床時間も含め、基本的な生活習慣が身に付いていない児童が多い。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

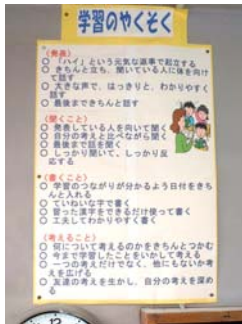
- 学習指導法の改善と指導技術の向上
- 基本的学習習慣の定着と学ぶ意欲・学び方の育成
- 児童の実態把握に基づく個に応じた指導の推進
- 読書活動の充実
- 保護者との連携による家庭学習の充実
- 小中連携による学力向上の推進と英語活動の充実

(2) 教育課程内の取組

- ① 主題研究を中心とした校内研修の充実
昨年度は算数科、今年度は国語科で「基礎・基本を身に付け、意欲的に学ぶ子どもの育成を目指して」の研究主題のもと、研究実践を重ねてきている。理論研究だけでなく日々の実践を重視し研究授業も学級担任全員が一人一回は行うようにした。
- ② 「知」に関する目指す児童像の具体化と到達目標の設定
目指す児童像である「よく考え勉強に励む子」について、具体的な変容の姿や変容を促すための具体的な方策を目標や指導方法の工夫として学級経営案に位置づけ、日々の実践に取り組んできた。学期末にその結果を自己評価・反省し、次の段階の目標設定を行った。
- ③ 学習習慣の徹底と学習環境の整備
学習の基礎となる学習習慣を定着させるために、児童に身に付けてほしい学習習慣である「学習のやくそく」を作成した。また、教室での学習環境として「話型表」「問題解決的な学習の流れ」「反応名人になろう」を掲示し見通しをもった意欲的な学習を目指した。
また、前時までに学習した内容を掲示し学習意欲を喚起するための「算数コーナー」や単元の学習内容のまとめや次の単元に関連する内容を掲示する「あしあとコーナー」を設置し学習に対する興味や関心の持続を図った。
更に、校内に低・中・高学年ごとの「算数コーナー」「国語コーナー」を設け、学習した内容の復習や学習クイズ的な問題を毎月出題し日常的に取り組ませた。

④ 指導体制の工夫

基礎・基本の定着を図るために複数教員で指導にあたるようにした。算数科におけるT・T担当教師とのチーム・ティーチング、学級担任と教頭によるチーム・ティーチング、専科や放課後の時間を利用した学級担任とペア学年担任によるチーム・ティーチングを計画的に行った。



【学習のやくそく】



【算数コーナー】



【T・Tによる指導】

(3) 教育課程外の取組

① 校時程の工夫

授業前の朝自習の時間の活用として、月・木・金に朝の10分間読書、水曜日は20分間のチャレンジタイムを計画し、単元の復習や計算力向上のための問題に取り組みさせた。

② 夏季休業中の算数教室

算数学習に苦手意識を持っている児童や学習内容の定着が不十分な児童を対象に算数教室を行った。全学年までの内容を中心とした診断テストを実施し、その結果をもとに少人数グループで指導した。

③ 読み聞かせ会

読み聞かせボランティア「つくしんぼ」の方による読み聞かせを月に1回程度、学級担任による読み聞かせ会や保護者ボランティアによる読み聞かせ会を計画的に行い、児童に読書の楽しさを体験させ、読書意欲を高めた。

(4) 保護者・家庭、地域との連携

① 学校便り

毎月学校便りを発行し、学校内の様子を積極的に情報公開し、家庭・地域の教育力向上のための啓発に努めている。

② ホームページの更新

毎月定期的に学校便り等のお知らせや学校行事等に関するホームページの更新を行い、本校の経営方針や教育活動などを公開している。

③ 夏休み個人面談の実施

夏休みに全家庭を対象にした個人面談を実施し、学習・生活面の資料をもとにした個に応じた学習の在り方や家庭での協力等についての連携を深めた。

3 成果と課題

(1) 成果

- 学力向上に関する校時程の工夫や指導方法の工夫改善、家庭との連携を通して個別指導の充実が図られた。
- 学習の振り返りや学習意欲を持続させるための学習環境の整備を行い、児童の学習意欲が高まり、確かな習熟や定着につながっている。
- 読書活動の充実により、児童の読書意欲が高まり貸し出し冊数が増えてきている。

(2) 課題

- 学力検査の結果をもとにした学年差や到達状況に応じた指導法の工夫改善を図る。
- 小中連携と到達目標による取組の充実を更に図る。

VIII 優秀実践校の取組 (中学校)

宮崎市立宮崎西中学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査からの課題

- ① 成績下位の生徒に基礎・基本の内容を十分身に付けさせることができなかった。
- ② 家庭学習を十分定着させることができなかった。

(2) 意識調査結果からの課題

- ① 「テストのやり直し」「復習や反復練習」といった自ら学ぶ力が低い。
- ② 「自己成長力」が低い。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

学校経営ビジョンの中で、学力向上に向けての基礎基本の定着のために

- ①各教科の具体的な数値目標の設定
- ②生徒が分かる喜びを体得できるよりよい授業の構築(指導と評価の一体化)
- ③習熟度別少人数指導の充実(国語・数学・英語)

を掲げ、その上に立ち、昨年度の反省を踏まえて、できるだけ個別指導を実施し、家庭学習の充実をさせ、基礎基本の徹底を図る。

(2) 教育課程内の取組

課 題	課題解決のための取組	
基礎的・基本的内容の定着	国語	○毎日の漢字ノート提出と週1回の漢字テストを実施する。 ○習熟度別少人数指導を実施する。
	社会	○单元ごとに復習し、小テストを実施して定着を図る。
	数学	○毎時間必ず小テストを実施する。 ○習熟度別少人数指導を実施する。
	理科	○单元末に確認テストを実施する。
	英語	○毎時間小テストを実施し、既習事項の定着を図る。 ○習熟度別少人数指導を実施する。
表現力の向上(英語)	○ワークシートを活用し、既習事項を使って、英作文などに取り組む。	

(3) 教育課程外の取組

指導力向上のための研修の充実(全教科)	○毎週の教科部会の実施(全教科)。
家庭学習の定着	○週末課題に取り組ませる。
学習意欲の向上	○サマースクール(夏休み)の実施。(全教科)
基礎的・基本的内容の定着	○昼休み・放課後等を利用しての個別指導を実施する。(国語、数学、英語)
読解力の育成(国語)	○朝の読書指導の充実。
社会的事象に対する興味や関心の向上(社会)	○朝の会、帰りの会等を通じて、その日世界や日本で起きた諸事象についての話をして、社会的事象に対する興味や関心を高める。
苦手意識の克服(数学)	○昼休みに教科教室を開放し何でも調べ、聞き合える雰囲気づくり。

(4) 保護者・家庭、地域との連携

家庭学習の定着(全教科)	○家庭学習を充実するため定期的に課題を出す。 ○生活振り返り表を活用する。
補充的学習(全教科)	○ボランティアの大学生にサマースクールや定期テスト直前の勉強会に参加してもらい、生徒の学習への支援を行う。

3 成果と課題(今後の取組を含む)

【成果】

- ① 基礎・基本の定着を各教科で工夫して取り組んできた結果、各教科ともその効果が顕著に現れた。
- ② 朝の読書に取り組むことで、落ち着いた状態で1日をスタートでき、その後の授業への取組にもよい影響を与えた。
- ③ 国語・数学・英語においては、昼休みや放課後に、小テストの再テストや課題のやり直し等の個別指導を徹底して行ったことで、苦手意識をもつ生徒の学力を向上させることができた。
- ④ 週末課題の提出を徹底させ、その点検と自己採点を確実に行ったことが、基礎学力の定着につながった。
- ⑤ 夏休みの「サマースクール」に学習支援ボランティアが参加したことで、個別指導を行うことができ、学力向上に役に立った。
- ⑥ 教科部会が、毎週1回時間割に設定されていることにより、教科指導上の問題点等の意見交換と共通理解が図られ、教師の意識の向上につながった。

【課題】

- ① 教科教室の利用が、限定的になっており、目標としている「生徒が自主的に学習に利用する」ところまでには至っていない。
- ② 「生活振り返り表」の利用の促進。

【今後の取組】

- ① 各教科教室に年間計画を掲示し、生徒が自主的に学習に取り組めるような教科教室の活用を工夫する。
- ② 家庭との連携を密にし、家庭学習の充実を図るため、「生活振り返り表」の活用を工夫していく。

宮崎市立大淀中学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

- ① 国語・数学・英語に比べて、社会・理科の落ち込みが若干見られる。
- ② 国語では「話す力・聞く力」が、社会では「社会的事象についての知識・理解」が、数学では「数量、図形などについての知識・理解」が、理科では「自然事象についての知識・理解」が、英語では「理解」が、それぞれ他の領域に比べると落ち込んでいる。

(2) 意識調査結果からの課題

- ① 「学びの基礎力」「生きる力」がともに、宮崎県の平均を下回っている。
- ② 「学びの基礎力」では、「学びを律する力」が落ち込んでいる。特に、「学習環境の整備」が悪く、正しい姿勢で学習ができていない点も課題となっている。
- ③ 「生きる力」では、「心の豊かさ」が落ち込んでいる。特に、「責任をもってやり抜くことができる」ことができていない。
- ④ ゲームをする時間が県平均に比べて、著しく長い。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

- ① 「確かな学力」「強い心」「健康な体」を本校の教育目標としている。この中で、「確かな学力」を具現化するための方策として、「基礎的・基本的な学力の定着」を学習指導上の重点事項とする。
- ② また、すべての教科等の学習を進める上で必要な「読み・書き・計算・コミュニケーション能力」等の基礎学力の育成については、拠点推進校としての主題研究における取組を通して、学習指導法の工夫改善を進める。

(2) 教育課程内の取組

① 国語科における実践

- ア 9年間を県の指導方針を参考にいくつかのまとまりに分け、指導事項の重複を減らし重点化するなどして再編成し、発達段階を踏まえて、情緒力から論理的思考の育成へと指導の系統化を図った。
- イ 思考力を高め、論理的言語技術を身に付け、相手や目的に応じた表現力を育成するために、論理的な文章を読むことや書くことの指導、相手を説得する討論の指導を重視した。

② 社会科における実践

- ア 各学年の生徒の実態を分析し、最も克服すべき課題として挙げられた基礎的知識の定着を図る場を、授業ごとの指導過程の中で設定した。
- イ 知識注入型の授業に偏ることがないように、生徒の思考を意識した授業設計を行い、現実の社会と関連付けた学習の場を設定した。

③ 数学科における実践

- ア 基礎・基本については、知識・技能を中心に生徒の学習の定着を図った。そのために、身近な生活場面を取り入れた文章問題を用いるなど、指導の工夫改善に力を入れた。
- イ 数領域における計算能力を高めるため、ドリル学習を繰り返し行った。教師が何度も丁寧に説明をしたり指導内容を拡充したりしながら、練習問題の量を増やした。

④ 理科における実践

- ア 自然の事物・現象を適切にとらえ、課題を明確にした観察・実験を重視した授業を展開し、学んだことを生活に活かしていけるよう、理科の学習と日常生活との関連を図った。
- イ 基礎的な内容の理解を深め、定着を図れるような授業の展開を工夫した。

⑤ 英語科における実践

ア 基礎的・基本的な事項の定着を図るため、個々の力に応じた課題を工夫し、学習成果を発揮できる場を授業の中で多く設定した。

イ 実践的コミュニケーションがとれる場として、ALT 訪問などの活用や通常の授業での表現力を培う活動に力を入れた。また、聞くことや話すことに関して、リスニングテストやスピーキングテストなどを多く設定した。

(3) 教育課程外の取組

① 週末課題の実施

国語・社会・数学・理科・英語の各教科では、週末課題としてやや問題量が多い教材プリントを作成し、生徒に配布している。ただし、超過負担を避けるために教科間で話し合い、出題量を検討しながら実施している。また、解答後はすぐに自己評価を行うことが大切であると考え、課題プリントと同時に解説解答プリントも配ることを通例としている。学習部の係りの生徒と担当教師とで連携し、週明けの提出を徹底させたり、未提出者には昼休みや放課後における支援も行ったりすることで、真面目に取り組むことの大切さを強調している。

② 各種検定の実施

漢字検定、硬筆検定、英語検定、数学検定の4つの検定を、各教科の担当教諭が計画・準備し、年間それぞれ2回程度ずつ実施している。実施については、生徒・職員ともに通常教育課程に対する負担が少ない時間帯であることを考慮して、金曜日の放課後や土曜日の午前中を利用している。回を重ねるごとに関心が高まり、参加者が増えている中で、多くの生徒が受検級の合格を果たし、次の検定での昇級を目指すとする意欲的な態度を見せている。

(4) 保護者・家庭、地域との連携

① 参観日アンケートの実施

外部評価・学校評価の一環として、参観日ごとにアンケートを実施し、生徒の様子や授業・懇談に対して寄せられた保護者の評価を分析した。当初は厳しい数字が示された項目もあったが、5段階評価の各項目に対し、4段階以上の評価を得られることを目標として取り組み、年間で4回実施したアンケートの評価平均値を3.9まで引き上げることができた。

② 大淀地区連携通信「ハーモニー」の発行

小・中連携の様子を大淀地区に発信する広報誌を発行し、大淀中学校・大淀小学校・古城小学校の全PTAに配布した。この中で、「知」・「徳」・「体」の調和のとれた児童・生徒の育成を目指して設定された到達目標について触れ、「どのようなことを目指しているのか」「その目標に到達するためにどうすればいいのか」について具体的に示した。

3 成果と課題

(1) 成果

- 県国語テスト・県数学テストなど県版の各教科テストでは、県平均との比較が向上している教科や学年が多く見られた。
- 各教科で基礎的・基本的な知識を身に付けさせるための教材の工夫改善に力を入れたことで、定期テストなどへの取組が大いに改善された。
- 参観日アンケートでは、設定した目標数値を平均値としてはほぼ達成することができた。

(2) 課題

- 各教科テストで、県平均との比較が向上している中で、学力が特に身に付いていない生徒に対する支援の在り方が今後の課題として挙げられる。
- さらに、発達段階や習熟の度合いに応じた指導の工夫を加えると同時に、評価の在り方についても研究を深める必要がある。
- 参観日アンケートで、ポイントが低い部分がある。重点課題として改善に取り組みたい。

宮崎市立赤江中学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

- ・ 学力テストの平均で比較すると、各教科でも全体でも県の平均を上回っている。ただ、教科毎に細かく見ていくと、次のような点が落ち込んでおり今後の課題と考えられる。
 [国語] 特に書く力と言語についての知識・理解、技能が落ち込んでいる。
 [数学] 数学的な見方・考え方、そして応用力が落ち込んでいる。
 [英語] 言語文化の理解と表現力が落ち込んでいる。
 [理科] 科学的な思考の分野の成績が低い。
 [社会] 応用力がやや落ち込んでいる。
- ・ 全体的に基礎基本は概ね定着しているようだが、応用力がまだまだ身に付いていない傾向にあり、一歩進んだ発展的な学習などの必要性を感じる結果であった。

(2) 意識調査結果からの課題

- ・ 県の平均と本校の実態を比較すると、「学びの基礎力」は全体的に県平均よりもやや低く「生きる力」は「心の豊かさ」を除いて県平均を上回っている。細かく見ると、「学びに向かう力」や「自ら学ぶ力」「学びを律する力」などが本校ではポイントが低い傾向にある。
 また、右の表のように読書量や学習時間が少なく、テレビを見たりゲームをする時間が多いことがよくわかる。
 つまり向上心を持って学習計画を立て、時間を有効に使って自宅で学習や読書に取り組む習慣が身に付いていない生徒が多いという現状である。
 学校だけでなく、家庭と協力しながら家庭での過ごし方や家庭学習の進め方についても研究していく必要がある。

学習意識調査の概要

		県	本校
学びの基礎力	(全体)	60.2	58.7
	豊かな基礎体験	53.6	56.6
	学びに向かう力	75.0	72.3
	自ら学ぶ力	56.7	51.2
生きる力	学びを律する力	60.5	57.4
	(全体)	55.7	57.0
読書習慣 学習時間	読書(1ヶ月に読む本の平均冊数)	3.7	2.8
	学習時間(平日・分)	96.2	85.8
	学習時間(休日・分)	103	76.3
TVをみる時間	TVをみる時間(平日)	98.9	109
	TVをみる時間(休日)	141	145
ゲームをする時間	ゲームをする時間(平日)	17.9	22.9
	ゲームをする時間(休日)	49.2	51.1

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

本校は学力向上に向けて何か新しい試みをするのではなく、基本的に「授業で勝負」という考えから、日頃の1時間1時間の授業の充実にもっと力を入れている。各教科の担当が、生徒の実態に合わせて分かりやすい授業を目指し、毎時間工夫しながら取り組んでいる。また、「学習態度コンクール」「姿勢指導週間」などを設け、生徒会の活動とタイアップしながらより良い学習習慣の確立・定着を目指している。

また、授業を効果的に行うためには生徒が落ち着いた学校生活をおくることが何よりも大切であるので、本校の生徒指導の方針でもある「排除せず 迎え入れ 抱え込む生徒指導」「厳しさの中にも 温もりのある生徒指導」を全職員で行うよう努力している。

(2) 教育課程内の取組

① 各教科の授業の充実

とにかく毎時間の授業を充実させることを大切にしている。そのために、パソコンやプロジェクトターの活用も含めて教材や教材提示の工夫を行い、分かりやすい授業を目指している。

② 少人数指導の充実

本校では英語、数学を全学年で少人数指導で行っている。クラスは個人の実態に合わせて習熟度別に分け、特に基礎・基本の定着を図る必要があるクラスの人数を少なくし、個人指導がより徹底するようにしている。過去には、理科（平成16年度）社会科（平成17年度）も実施しており、成果を上げている。

（3）教育課程外の取組

① 朝自習の時間を利用しての読書、基礎事項の復習

1年生と2年生の12月までは、授業が始まるまでの時間を利用して読書を行っている。職員朝会の無い火曜と木曜は、学級担任も一緒に学級で読書に励んでいる。2年生の1月から3年にかけては基礎・基本の確認を目的としたプリント学習に取り組んでいる。また、そのプリントは小単元毎に確認テストを行い、生徒は自分の学習をふり返り、教師はその後の生徒の指導にも役立てている。

② 夏季休業を利用してのサマースクール

各学年毎に夏季休業中に6～10日ほど補充学習を主な目的として、サマースクールを実施した。学年に応じた取組を工夫し、1年生は夏休みの課題の完成を第一に考え夏休み後半に実施した。1・2年生は、教科毎に開設された講座を希望者が申し込み参加するという形式をとった。参加者は教科や講座によって様々であったが、参加者には好評であった。

③ 放課後の補充学習

各学年・各教科で実状に併せて実施している。3年生は6月の中体連終了から夏季休業に入る前の約1か月、5教科で曜日を決めて補充学習を放課後30分程度、希望制で行った。また、英語検定の前には多くの生徒が放課後の勉強に熱心に取り組んでいた。

（4）保護者・家庭、地域との連携

① 教育相談の充実

意識調査の結果にもあるが、家庭学習も含めた家庭での過ごし方が大切であるため、その実態の把握や指導のために教育相談は不可欠である。4月当初の家庭訪問以外に、夏季休業を利用して全校生徒を対象に三者面談を行った。その中には、生徒本人の悩みや保護者の悩みなどに対応するため、学級担任が窓口となりスクールカウンセラーとの相談をもつケースもあった。

② スクールカウンセラーとの協力

学力の向上のためには学校生活が充実することが大切であると考え、学校生活に関するアンケートを定期的に行い生徒の悩みの実態を把握するようにしている。その際、スクールカウンセラーがアンケートの分析に加わり、様々な観点から生徒の実態把握と相談に応じてもらっている。また、夏季休業中には職員研修としてスクールカウンセラーを講師とした研修を毎年実施し、生徒理解のための示唆をいただいている。

3 成果と課題（今後の取組を含む）

（1）成果

基礎・基本の内容はある程度しっかりできるようになった生徒も増えた。また、教師の指導もあって英語検定や漢字検定、歴史検定や理科検定などに積極的にチャレンジしようという雰囲気ができつつある。また、図書室の整備も進み、落ち着いて読書に取り組む生徒も多くなってきた。

（2）課題

各教科において成績の上では一定の成果が上がったと考えられる。しかし、家庭学習は塾での勉強に頼り、自分で時間のやりくりをして、学習に励む習慣はまだついていない。補充学習が必要な生徒に授業の中だけの指導では不十分で、放課後の時間などを使って指導しているが、その他の生徒指導、職員研修、部活動の指導などもあって十分には行えていない。今後、時間をどう生み出すかを考えていきたい。また、新しい取組だけでなく、最も基本的な授業のさらなる充実を図りたい。

宮崎市立宮崎北中学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

すべての教科で、県の平均到達度、達成率を上回っている。しかし国語・社会は、県の平均値との差が小さく、国語では、「漢字の読み、書き」「部首」「文脈に即した内容理解と記述」等が平均値より低く、社会では、「世界の国々」「律令国家における農民の生活」「武家と公家の関係」等が平均値を下回っている。また、理科では、「物体にはたらく力」、数学では、「文字式の表し方」「数量の関係を式で表現」が平均値を下回っている。英語は、すべての分野で平均値を大きく上回っている。



(2) 意識調査結果からの課題

- 全体的に県の平均値よりやや高い数値となっているが、自己責任、自己効力感、授業を受ける姿勢（聞く態度・集中力）については、平均値との差が小さい。
- 読書の冊数が県の平均値よりやや少ない。
- TVを見る時間、平日のゲームの時間がやや多い。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

経営方針は、「1つ1つの教育活動をていねいに行い、生徒のもつ力を『引き出し、鍛えて、伸ばす』ことにより、生徒たちに達成感をもたせ、感動ある体験を通して『自信』を付けさせる」である。

この経営理念の根本にあるのは、教師が「プロに徹する」ということ、「学力は活力である」ということ。そして、教師の目指す「目標」まで生徒は達するのであるから、プロの教師たる者は、「常に高い目標を掲げ、粘り強い指導を心がける」という意識改革を図ることを、最重要課題として取り組んでいる。

特に次の3点について共通実践を促している。

- ① プロであるなら、生徒の学力をしっかりと見届け、その結果に「責任をもつ」はずである。学校とは本来、「学力」をしっかりと身に付けるところであり、だからこそ1時間1時間の「授業」の充実が大切であるという観点から、生徒が「分かって・できて」楽しいと感じる、「魅力ある授業づくり」に日々努めるべきである。
- ② プロなら、常に「目標」を高く、一人一人の達成度を見届け、「補充学習」を通して、根気強く生徒の学力を「鍛える」はずである。
- ③ プロなら、学習環境を整えるために、「学習訓練」（姿勢、返事、声の大きさ、忘れ物、等）を徹底させて、学習の基盤づくりに努めるはずである。（『しつけ』のないところに教育は成立しない）

(2) 教育課程内の取組

- ① 全教師、年1回以上研究授業を行い、授業研究会等を通して「授業力」の質の向上を図る。
 - 特に主題研で取り組んでいることは「活気ある授業の構築」。
 - その具体策として、
 - 1) 「生徒を巻き込む活動」が工夫された授業であること。
 - 2) 「生徒の表出力を高める」工夫がなされた授業であること。
- ② 「習熟度別少人数指導」の活用を図る。
 - 「数学科」「英語科」は、全学年、全時間、習熟度別のコースに分けた授業を実施し、個に応じた授業を展開している。
 - 学力向上において、この2教科が特に顕著な伸びを示しており、「核」になるこの2教科

が、他の教科によい刺激を与え、全体の底上げに貢献している。

③ 「補充学習」の充実を図る。

- 昼休み、放課後等を活用して、小テスト、定期テスト等で、目標に達していない生徒一人一人の習熟の度合いに応じて、「わかる」まで補充学習を行う。（「英語」「数学」が中心）結局、学力向上は、「生徒一人一人に向き合う」ことによって実現される。

④ 「学習訓練」の共通実践を図る。

- 学習の最も大切な基盤づくりとして、基本的な「学習訓練」の徹底を、全教科共通して取り組んでいる。（チャイム席、姿勢、返事、声の大きさ、聞く態度、忘れ物、等）「学習環境づくり」が、学力向上に大きな影響を及ぼす。

(3) 教育課程外の取組

① 「サマースクール」の充実を図る。

- 夏休み期間中、延べ25日程度、3年生全員を対象に、5教科について「学力補強講座」を実施している。1,2年生については、前半と後半の1週間を、それぞれ「基礎学力徹底週間」「課題徹底週間」とし、該当の生徒を対象に実施している。
この取組が、9月以降に大きな成果となって表れる。

② 「内部評価」「外部評価」の活用を図る。

- 生徒による「各授業の評価」を活用し、プロとして、真摯に自らの授業力を振り返り、授業の一層の工夫・改善に努めている。

③ 「教科内の連携」の強化を図る。

- 一人一人の教師がバラバラな取組をしていても成果は上がらない。各教科の先生方が共通した実践に取り組むことによってはじめて成果が期待できる。したがって、日頃の教師間のコミュニケーションを密にし、さらに月1回の教科部会等を通して、授業の工夫・改善・充実化を図ることや、各テスト結果の分析・改善・評価、等を行い、学力向上に向けて、教師一人一人の意識改革及び教科間の連携強化に努めている。

(4) 保護者・家庭・地域との連携

① 「外部評価」の活用を図る。

- 参観日の保護者による授業評価アンケートを実施し、授業の一層の充実・改善に努めている。

② 「各通信」を通して啓発を図る。

- 各学担とも、毎日～週1回程度の頻度で通信を各家庭に届けている。通信を通して、特に「宅習」への取組状況について、各家庭との連携に努めている。

3 成果と課題

(1) 「成果」

- ① 「数学科」「英語科」の学力向上が牽引力となり、他教科の学力を引き上げた。
- ② 英語、数学のみならず、補充学習に取り組む教科が増えてきた。（社会、国語）
- ③ 全教師による研究授業、及び授業研究会、各内部・外部評価の活用、教科部会の活性化などの取組を通して、各授業の「質」が向上し、生徒が意欲的に活動し、考えや意見を表出する場面が多く見られるようになり、授業に活気が出てきた。

(2) 「課題」

- ① 「家庭学習」の充実、「読書の奨励」について、各家庭へのさらなる啓発を図る。（まだまだテレビやゲームの時間が多い）
- ② 校内研修の充実に努め、「授業力」の温度差をさらに是正する。

宮崎市立生目中学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

学力調査結果から本校の課題を見たところ、国語科では「部首」「同音異義語」が県の平均を下回っており、「文脈に即した内容の理解」が低い通過率であった。数学科では、「正四角錐の体積」「反比例の関係を表す式」「事象の中の比例関係」「具体的な事象と反比例」、英語科では、「英語的表現」「会話表現・状況判断」がそれぞれ50%~60%台の低い通過率であった。理科では、「合弁花と離弁花」「葉と蒸散の関係」「火山灰の観察方法」が県の平均を下回っており、「焦点距離」は26.1%という低い通過率であった。社会科では、「日本の領域」「日本の経済水域」「鎌倉幕府の成立」がいずれも40%台という低い通過率であった。

(2) 意識調査結果からの課題

意識調査結果から本校の課題を見たところ、「自分の物の見方や、読書をするのが好きである。」に肯定的な解答をした生徒が58.8%と県の平均を約10%下回っており、「自然や科学(理科)についての本や図鑑、テレビ番組をよく見る。」でも県の平均を4%下回っていた。さらに「本や新聞を読む」で肯定的な解答をした生徒は55.8%と県の平均より5%以上低かった。また、「放課後や土曜日などの学校行事に参加している。」では8%、「家族といっしょに工作や料理をする。」では、4%県の平均を下まわっており、とりわけ「自分のことは自分ですするという習慣を身に付けよう。」では50%と、県の平均を10%も下回っていた。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上へ向けた経営方針

学校経営案に、「学力向上を目指す教育を推進する。」という表題で以下の3つが掲げられている。

- ① 確かな学力を身に付けさせ、進路保証の指導を実践する。
- ② 分かる授業と学び直しが保証される指導を実践する。
- ③ 2学期制を生かした学習成績等連絡表「夢チャレンジャーへの道」の活用を促進する。

また、本校教育目標の具現化を図り、教育的課題を解決するため、生徒一人一人への関わりを強めるための努力事項として、以下の9つが掲げられ実践されている。

- ア 授業の完全実施(週時間割の作成)
- イ 自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力の育成
- ウ 基礎的、基本的事項の精選と指導の徹底
- エ 学習能力の的確な把握と個別指導の充実、宅習の推進
- オ 教育機器、教具、資料の活用と学習指導法の改善
- カ 自主的、自発的な学習態度の確率
- キ 全教育活動を通じての進路指導の充実
- ク 進路指導の計画的実施と内容充実
- ケ 小学校、高等学校との連携

(2) 教育課程内の取組

学力調査および意識調査結果から、まずどの教科にも共通する「文脈に即した内容理解の力」「表現の力」を向上させることに力をおいた。国語科と連携し、文章をしっかりと読み取る力を付けるために下記のことを力を入れてきた。

- ① 教科書の文章を使い、内容を細かくていねいに読み込む練習をさせる。
- ② 週末課題で文章問題を出し、教科書以外の文章を多く読む機会を与える。
- ③ 朗読テープ等を用い、音読の練習に力を入れる。

また、総合的な学習の時間等で教師や講師による講話を聞く機会を多く持ち、内容をつかむ力の向上に努め、その後、感想レポートやお礼の手紙等を書かせることによって自分の意見をまとめ

たり、発表会を行って、表現する力や人の意見を聞き取る力の向上に努めている。

(3) 教育課程外の取組

学力調査、意識調査共に「読みとる力」が不足しているという結果であった。これを向上させるために生徒の読書量を増やすことが必要であり、読書のきっかけをつくらなければ自発的に読書を始めることはできないと考え、以下のことを実施した。

① 学級文庫の創設と定期的な入れ替え

図書室に行かなくても、読みたいときに簡単に取り出して読むことができるように、年間を通じて常時学級文庫に約50冊の本を準備し、定期的に入れ替えを行っている。

② 教育相談期間中の読書

年間の時間	1日30分×10日×3回	(合計15時間)
-------	--------------	----------

本校では、年に3回教育相談期間を設け全校で取り組んでいる。帰りの会終了後の30分間を使い、担任教師と生徒が1対1で行っている。その間他の生徒は、学級文庫や図書室または自宅より読みたい本を準備し読書活動を行っている。副担任の教師は、教室を見回ったり、一緒に読書を行っている。簡単な読書カードを作成し、自分の読書量の成果が確かめられるようにしている。

③ 学年図書の設定

学年教師が読んだ本で、生徒にも勧める本を職員室前の一角に置き、一言断るだけで貸し出し可能にしている。読後感を生徒と話し合えるなど、コミュニケーションにも一役かっている。

(4) 保護者・家庭・地域との連携

① セミナー学習

本校では、全学年セミナー学習を取り入れている。セミナー学習の実施方法・意義は、入学説明会、家庭訪問、学級懇談、三者面談や各種の通信を通じて保護者に説明をし、家庭での協力を依頼している。また、地区懇談会や学校評議委員会でも学校の取組として地域の方に紹介し、理解を頂いている。

セミナー学習の方法

- ・ 家庭学習として毎日1枚を自宅で解き、翌日の朝自習の時間に解答し、セミナーノートに間違えたところを、やり直す。
- ・ 各講座終了時に、朝自習時間を利用してセミナーテストを実施する。
- ・ セミナーテストの学年平均点の目標を380点としている。
- ・ テスト結果は、「夢チャレンジャーへの道」によって保護者に伝える。

② 夢チャレンジャーへの道の活用

「夢チャレンジャーへの道」は、本校独自の学習連絡表で、成績の記録やグラフ欄の他に、「自分の良さのあゆみ」という題で、部活動やボランティア活動における活躍を記録する欄や、体力テストの結果を貼付する欄もある。さらには保護者との共同作業で記入する進学希望や将来の希望職業の欄もあり、成績の反省だけに留まらず、保護者の願いや励ましも書かれ、生徒の指針となっている。

3 成果と課題（今後の取組を含む）

(1) 成果

- ① 学力調査結果より、具体的な課題をとらえることができた。
- ② 読み取る力、聞き取る力、表現する力の向上に力を入れることができた。
- ③ 意識調査結果から、読書に親しむ機会を与えることができた。
- ④ 夢チャレンジャー（学習成績等連絡表）や、地区懇談会、三者面談などを通して、保護者との連携を密にすることができた。

(2) 課題

- ① 学力調査結果から分かる各教科の細かい課題を、一つ一つクリアしていくために、教科担当教師による、対策委員会を頻繁に開き、日々の授業や課題で実践する。
- ② 日常的に読書を楽しむことができる生徒を育てるための研究をする。
- ③ 学力向上のための家庭や地域との連携のあり方を研究する。

宮崎市立生目台中学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査からの課題

- ① 国語科においては、漢字の読みや文法などの言語事項について基本的な内容が定着していない。また、課題に応じた材料を集めてそれらを分かりやすくまとめ、伝えようとする力が不足している。
- ② 社会科では、地理分野の時差と日本の領域、歴史分野では、中世の内容が落ち込んでいる。
- ③ 数学科では、数学的な見方や考え方の部分よりも数量・図形などについての知識・理解の部分が低い。
- ④ 理科では、分布のピークが2つある。また、得点がとれていない学習内容が5つある。
- ⑤ 英語科では、英語的表現の内容で通過率が低い。また、到達度100%の割合を伸ばす必要がある。

(2) 意識調査結果からの課題

- ① 学力調査の結果では、5教科合計スコアで県平均を約30点上回っているにもかかわらず、学習意識の面では、それに見合ったレベルの結果が得られていない。
- ② 学習動機、自己効力感、自宅学習習慣の3項目が県平均を下回っており、自ら学んでいこうとする意識の面が、他の領域と比較して低い。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

本校では、学校経営方針に「学習活動を中心においた学力の向上」が掲げられている。これは、特別なことを行うのではなく、授業や家庭学習など、日頃の地道な学習活動を通して生徒に学力を身に付けさせ、それを向上させていくことの重要性を全職員で共通理解していくものである。

そのために、本年度の学習に関する努力事項を「学習指導の充実」として次のように設定した。

- ① 主体的な学習を培う教育課程の編成と指導方法の工夫改善
- ② 学習意欲の喚起と自主的自発的学習の推進
- ③ 学業指導の徹底による学習態度の確立
- ④ 教育機器活用の推進
- ⑤ 諸診断テスト結果の活用
- ⑥ 学習事項の徹底を図る個別指導の推進

(2) 教育課程内の取組

① 個に応じた指導の充実

英語科・数学科で「習熟度別少人数指導」を行い、2つのコースで個別指導を積極的に取り入れるなどの個に応じた指導を行っている。また、単元末テスト等の検証活動を行い、生徒の実態の把握を行うとともに、生徒を惹き付ける授業を行うために、全職員が研究授業（写真）をするなどの指導方法の改善を行っている。



② 各教科での工夫

各教科において、様々な工夫を行っている。国語科では、文章を読みとる力を育成するために新聞の社説やコラムを読んでその感想をまとめていく「大好きノート」を提出させている。数学科では、全ての時間に生徒の思考の流れに合わせたワークシートを準備している。社会科では、興味・関心をひき、学力の向上を目指すために、パソコンを全ての時間に活用している。理科では、週末課題を準備し、家庭学習におけるドリル学習の充実を図っている。英語科では、繰り返し学習のための「ひたすらノート」を作成させ、毎日提出させている。

(3) 教育課程外の取組

① 朝の読書活動の充実

本校の1・2年生では、朝の授業前の時間に読書の時間を設定している。これは、各教科における基礎的・基本的な内容の確実な定着を図るためには読解力の育成が図られるべきであるという目的から始めたものである。生徒の読みたい本を読む時期や、国語科の選定した本を学級ごとに読む時期を設定するなど、読書によって文章を読みとる力や内容を理解する力を培っている。

② 夏季休業中のサマースクール

夏季休業中の6日間で各3時間、計18時間において、各学年、各教科ごとに学習内容を設定し、生徒に提示し、選択させ、基礎的・基本的な内容の定着を図っている。生徒が、自分の興味・関心や、苦手な内容を把握し自分独自の時間割を作成して受講している。これにより、日頃の授業で十分に理解できなかった内容を再度学習することになり、習熟の程度が向上してきた。

(4) 保護者・家庭、地域との連携

① 家庭学習の充実

家庭学習の実態を学校参観日の学級懇談会で報告し、望ましい家庭学習の在り方について話し合う機会を設ける。

② オープンスクール及び学校参観日

本校は、1年を通してオープンスクールを実施しており、特に9月から10月末にかけて、自治会の回覧板を通して地域の方々へお知らせして、学校評議員や保護者だけでなく、地域の方などに参観してもらう取組を実施している。また、学校参観日においては、参観授業のポイントや流れ等が分かる資料を示し、保護者が参観しやすい工夫を行っている。また、授業の感想や授業評価を保護者にお願ひし、今後の指導に生かすようにしている。

3 成果と課題（今後の取組を含む）

昨年度の結果から本年度の平均点目標を設定したが、合計では目標を上回った。また、全教科、全ての観点で県の平均を上回り、平均点も合計で37.4点上回るよい結果を残すことができた。これは、昨年から一貫して取り組んできた学力向上の成果である。しかし、さらに伸ばしていかなければならない観点や要素もあると思われる。

(1) 成果

- ① 昨年度の各教科ごとの課題で挙げられたもののうち、国語科の漢字の読みと英語科の英語的表現以外は全て改善が見られた。
- ② 生徒が、どの教科でも基礎的・基本的な内容の定着が見られるとともに、発展・応用的な内容についても力がつきつつある。
- ③ 意識調査結果にみる課題については、学習動機と自己効力感について改善が見られた。また、「学びに向かう力」については、全ての項目で県の平均を上回ることができた。
- ④ 学習意識調査において、「生きる力」は全て県の平均を上回り、身に付いている。

(2) 課題

- ① 本校の通過率を見ると、県の通過率と比較して5ポイント以上劣っている内容は、英語科の「英語的表現」、理科の「沸騰石のはたらき」、社会科の「日本の経済水域」の3つの内容となっているので、今後補充学習で理解と定着を高める必要がある。
- ② 平素の授業の様子から見ても、分からない所を質問したり、工夫しながら学習したりするなどの、自ら積極的に学ぶ態度が十分に身に付いているとはいえない。そのために、各教科の授業において興味や疑問をもたせる工夫や、学級活動の時間を通して学習の仕方や学び方を身に付けさせる必要がある。

清武町立加納中学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

- 書く力や読む力の育成
- 文章記述で解答したり、説明したりする能力の向上
- 資料やグラフから適切な情報を読みとる能力の向上
- 数学的な表現や処理能力の向上
- 数量の関係を式で表現する力の育成
- 観察や実験の時間の技能の向上
- 英語における表現力の向上

(2) 意識調査結果からの課題

- 見直しや確かめをすることの習慣化
- 掃除・ボランティア活動へ積極的に参加する態度の育成

2 学力向上へ向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

開校以来築き上げてきた向上・向学の精神のもと、自信をもち主体的に生きる力を育てる学習指導の展開に努める。先人に学び地域に根ざした学習に意欲的に取り組み基礎学力を高め、一人一人の能力・適性に応じて可能性を最高に開発する教育を実践する。そのために、

- ① 特色ある教育課程の実施と改善をする中で、一人一人を大切にする学習指導の改善に取り組んでいく。
- ② 基本的な学習習慣や態度を指導する中で、少人数指導やわかる授業等の指導方法の改善と基礎・基本を身に付ける教科指導の改善を行う。
- ③ 主題研究との関連を図り、生徒相互が学び合い伸ばし合う学級集団の育成に取り組む。

(2) 教育課程内の取組

① 基礎学力の向上を図る授業の実践

ア 学力調査結果の課題に基づく指導の工夫

夏季休業中に行った学力調査結果の分析を生かして、各教科で重点目標を定めた授業実践を行い、学力調査結果からわかった課題の解消を目指す。各教科において課題に対応する指導方法を工夫するとともに小テスト、夏休み課題テスト、中間テスト後の定着確認を行うなど、基礎学力の定着を図る。

イ アンケート実施による生徒の実態把握

10月下旬と学期終了時に学習への意欲や態度についてアンケートを実施し、生徒の変容の把握を行った。アンケートの内容は、教科への興味・関心、授業の学習内容の理解度、宅習内容や宅習時間の変化などに関することとする。その結果を分析し、2学期の生徒の取組や教師の授業の反省の在り方の反省をし、3学期の授業に生かすようにした。

ウ 学業指導週間の設定

宮崎県の実施した「小・中学校学力調査」結果の意識調査分析から判明した本校の課題を生徒に提示し、その中から、生徒自らが現在の問題点としてとらえている課題を洗い出して、学力向上の基となる学習態度の向上を図ることとした。各学年ごとに学習の取組の目標を設定し、2週間の学業指導週間の中でその改善を目指すようにする。

指導週間の指導を定期的実施し、学業や学校生活の環境がよりよくなるように生徒会の自主的な活動を活性化させながら学力向上の指導に取り組んでいく。

[具体的な方法]

- (ア) 「小中学校学力調査」の意識調査結果による課題項目の分析。
- (イ) 課題項目をもとに、学習部によるアンケート調査内容の絞り込み。
- (ウ) 各学年のプログラム委員会（学級委員長の会）による具体策の決定。

エ 校内主題研究と関連した教職員の共通実践

学校の研究主題である「学びあい、認めあい、共に伸びようとする生徒の育成」を目指す上で、学習内容への関心を高める発問や教材の工夫を行い、生徒が分かる授業、主体的に活動する授業などの指導の改善に努める。また、お互いが学習者として学び合い、伸ばし合うために、意見をよく聞き、考え方を認め、自分の意見を発表し合うなど、生徒が分かり合い、学習内容の深化を図る授業を実践する。

(3) 教育課程外の取組

- ① 昼休みや放課後などに個別指導を行い、基礎学力の定着を図る。
- ② 週末課題という名称で、教科担当教師が課題プリントを準備し、金曜日に家庭学習の課題として生徒に持たせ、翌週に解答するなどの学習習慣育成の工夫を行う。

(4) 保護者・家庭、地域との連携

① 保護者・家庭との連携

「教科の勉強法」という各教科の宅習のやり方を示したプリントを作成し、各家庭に配布する。また、定期テスト時に学級通信を使って、宅習方法を保護者にも連絡し、家庭での指導に役立ててもらおうようにする。

3 成果と課題（今後の取組を含む）

(1) 成果

① 生徒の変容

- ・ 「学力調査結果」の分析から実態を知ること、学習への意識付けや課題の理解をすることができた。
- ・ 学力の実態をもとに、アンケートや努力事項を設定することで、課題を明確にした対策を考えるなどの活動ができた。
- ・ 課題テスト、再テストなどの実施により、学習内容を定着することの大切さを意識できるようになった。
- ・ 学び合う学習風土や伸び合う学習の在り方が学力向上に大切であることを意識するようになった。

② 教師の変容

- ・ 「学力調査結果」の分析から指導重点事項や課題を明確にすることができた。
- ・ 指導内容の定着を図る指導方法の工夫や学習集団の在り方、教師の共通実践の大切さを意識するようになった。
- ・ 指導方法の改善に努め、よりよい授業を目指す工夫改善を全職員で取り組めるようになった。

③ 取組の波及効果

- ・ 家庭との連携や小学校との共通研修など学力向上への取組の理解と実践を広げることができた。

(2) 課題

- ① 学習は、自宅学習まで充実してこそ効果があるものである。学習習慣育成の指導を一層進め、自主的な学習態度の確立に努める。
- ② 一人一人を大切に、相互が伸びあう学習環境の一層の整備・充実に努める。

日南市立酒谷中学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

国語：基礎・応用 文法の定着率が低い。「読むこと」に関する問題の正答率が低い。
社会：応用 調べる活動、資料活用（社会的な見方・考え方）を苦手とする。
数学：基礎 計算ミスに気づけていない。見直しと演習の習慣化、個別指導が必要。
理科：基礎・応用 漠然とした理解のため正確な解答を書くことができない。1分野が苦手。
英語：基礎 内容把握とリスニングが弱い。文法理解が不十分で、英作文が苦手。
※ 調べる、考える、見直すといった学び方の基礎が身に付いていないため、学習の定着が不十分である。
※ 到達度分布状況において、20%しか到達していない生徒がどの教科でも見られることから、手立てを講じる必要がある。

(2) 意識調査結果からの課題

教科の理解度に関して、分からないという否定的な回答をした生徒が3割近く見られる教科もある。学習意欲の面からもこの数値の改善を目指したい。
授業の内容や文章中の語句など、よく分からない事柄があったときに、それをよく考えたり、調べたりすることをしようとしめない傾向がある。
生きる力の社会的実践力の「テレビのニュースや新聞などで最近の社会のできごとをよく知っている」の問いに関して、否定的な回答が多い。社会の一員であるという意識が低い。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

生徒の学力が向上するためには、学校が楽しいものでなければならない。学校生活の大半が授業であり、楽しい学校とは授業が楽しく、理解できるものでなければならない。そのためには、職員の指導力向上を図ることが大切である。一人年1回の研究授業を目標にし、職員の指導力向上を図る。また、小規模校であり、一人一人の生徒に十分に目が行き届く環境にある。授業時間だけでなく、昼休みや放課後などを利用したきめ細かな指導やニーズにあった指導の実践を心がけ、職員、生徒がお互いにやるべき事をきちんと実践できる学校経営を目指す。

(2) 教育課程内の取組

① 授業中における指導の工夫・改善

小单元ごとに「ステップアップシート」を活用してきた。生徒の理解度や集中度を自分自身で客観的に評価できるように工夫した。生徒自身に授業への取組・反省をさせ、教師が生徒の理解度を確認し、指導のあり方を工夫する機会としてきた。

また、「調べる、考える、見直す」を苦手とするため、授業に「調べる」・「考える」場面をできるだけ取り入れるようにした。学期末の反省で「各教科の現状と対策」を話し合い、改善点を検討してきた。

② 個別指導における支援のあり方

生徒の中には、勉強をどのように進めればよいかわからない者もいる。そこで、定期テス

ステップアップシート

【 年【 】番 氏名【 】

- (1) 空気中の水蒸気は、()ものにふれると水滴になる。
(2) くみ置きの水も温度を下げていくと、コップの表面に小さな()ができる。
(3) (2)の露ができる温度を()という。
授業の反省 (よくできた ◎ できた ○ あまりできなかった △)
(1) 授業では、集中して話を聞きましたか。()
(2) 授業に積極的に参加できましたか。()
(3) 授業内容の重要語句は理解できましたか。()
(4) 授業内容の中で観察、実験の方法について理解できましたか。()

【ステップアップシート】

ト前には特設のテスト対策の時間「ステップアップタイム」を実施し、重要語句をまとめたカード、「ステップアップカード」を作成させることにした。この時間には、生徒が各教科に分かれ、職員の指導のもと、基礎・基本の定着のための学習方法を体験させ、学習意欲を高めるようにした。「ステップアップカード」は、学級の朝の会・帰りの会で、英語のフラッシュカードのように使い、学習している。定期テストでは、このカードの内容を問題に取り入れ、解答用紙に[S]マークをつけ、学習した内容は必ず解けるように指導することで、生徒が成就感・達成感を味わえるようにした。最初のうちは、「ステップアップカード」の内容すらできなかった生徒も、徐々に「ステップアップタイム」の意味を理解し、定期テストでの正答率も上昇してきた。



【「ステップアップカード」の使い方】

(3) 教育課程外の取組

- ① 毎月第4金曜日の「くすのき集会」（「学力向上集会」）を実施している。この集会は、企画・運営を生徒会学習委員会が行う。内容は「学力向上委員会の報告」、「3年生の進路選択までの経緯や入試を体験しての感想」、「教師の体験談」などバラエティーに富んだものになっており、生徒の主体的な活動として定着している。
- ② 「漢字検定」や「英語検定」に挑戦させている。平成17年度の受験率は漢検が57%、英検が73%であった。生徒の積極的な取組が見られた。



【「くすのき集会」の様子】

(4) 保護者・家庭、地域との連携

学力向上のためには、学校の取組以外に家庭との連携が重要である。そこで、「学力向上委員会」を設立した。この会は、生徒・教師・保護者が一堂に会し、学力向上に関するお互いの考えや思いを伝える機会とし、それぞれの機能を生かした取組を話し合う場とした。毎年夏に「学力向上座談会」も実施している。この会では、「NRT」の結果分析を生徒・保護者に説明し、生徒の学力の現状を把握してもらい、その後、分科会に別れ、各教科の学習方法やその取組の現状を車座になって話し合う会である。



【「学力向上座談会」の分科会】

分科会では国語、英語、数学の3分科会に分かれて、活発な意見交換を行った。また、「学校評議員会」を年間2回開催し、学校運営状況を説明するとともに、生徒・保護者・職員による「学校評価」のアンケート調査結果を公開し、意見をいただく機会としている。

3 成果と課題（今後の取組を含む）

成果として、

- ステップアップシート、ステップアップカードの活用を通して、基礎・基本の定着が図られ、定期テストでの[S]マーク問題は正答率がほぼ80%を超えるようになった。
 - 漢字検定や英語検定に挑戦することで、目標をもって学習する態度が身に付いてきた。
- 課題として、
- 授業中に「調べる」・「考える」場面を取り入れたが、十分な成果を出せなかった。
 - 三位一体（生徒・学校・保護者）となって、家庭学習を充実させるための手立てを工夫する必要がある。

串間市立都井中学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

学力調査の結果より、以下の3点が課題として挙げられた。

- ・ 問題文で問われている内容を読み取る読解力が十分でない。
- ・ 図や表などの読み取りの問題に弱い。
- ・ 過去に学習した内容を絡めて判断することが十分できない。

これらの課題を分析すると、文章題への取組において、問題文を根気強く読まないままに、早とちりをして、思いつきの答えで解答欄を埋め、それだけで安心していると考えられる。さらに、出題者が図や表のどこを見て判断して欲しいのかをよく汲み取っていないとも考えられる。また、單元ごとのテストでは、テスト範囲が狭く、学習内容が過去の単元の既習事項と離れていることは少ないので正答が得やすいものの、実力テストのように、範囲が広い場合、既習事項や経験と絡めて判断することに困難を示す生徒が見られた。

(2) 意識調査結果から見た課題

意識調査の結果より、以下の3点が課題として挙げられた。

- ・ 豊かな基礎体験の面で地域的に触れるものが少なくハンデが大きい。
- ・ 経験や知識が少なく、柔軟な思考ができない。
- ・ 学習の計画や実行などの面で根気強さが無い。

これらの課題を分析すると、自然に恵まれた校区内で生活をしているにもかかわらず、休日には、外で遊ぶことはほとんどなく、図書館等の文化的な施設も近隣の場所にはない。また、実体験が少ないので、本やその他の資料から得た知識も、定着しづらく、使いこなせないと考えられる。その他に、対外テスト以外に、学力を比較するには少人数すぎるので、切磋琢磨する態度に欠けるのではないかと考えられる。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

学力向上を意識した経営方針として、①学力向上を果たした生徒のイメージを想定した日々の実践と、②効率の良い教育課程編成の二つを考えた。

①のために、本校では生徒が夢中になり、分かる授業を実現するために、基礎・基本を確実に獲得させる授業づくりを目指すこと、また、生徒の意欲を引き出す学習指導を充実させ、定期的に生徒による授業評価を行い改善に役立てることにした。

それらのために、諸テストの分析に職員全員がかかわり、生徒の全体像をつかんで、弱点補強に努めた。また、研究授業を教科担任全員が行ったり、毎学期ごとの授業アンケートをフィードバックに役立てたりしながら、授業技術の向上に努めた。

②のためには、授業時数の確保を行い、年間授業時数を明確にし、教科の実施率を100%に近づけることと、自習時間をなくすことを目標とした。また、選択教科の選択の幅を広げ、基礎・基本の充実と発展的な学習の両面で生徒の要求に答えられる条件整備を行った。さらに、学校裁量の時間を活用して、学校行事、学校の行事、生徒会活動などを精選して、生み出された余剰時間を教科の時間に割り当てた。

(2) 教育課程内の取組

教育課程内の取組として、①読書活動、②選択教科、③ステップアップの時間、④総合的な

学習の時間、⑤文化発表会、⑥行事について工夫した。

①読書活動では、朝の登校後20分間に、職員も参加して、生徒が前日から用意した本を集中して読ませ、語彙の獲得に役立っている。②選択教科では技能教科にも力を入れ、地域的に触れるものが少ないといったハンデをなくそうとしている。③ステップアップの時間は、国社数理英の基礎・基本の習得とそれ以前に身につけておかなければならない知識等を定着させることが目的である。各教科ごとに、それぞれ朝の読書の時間を利用して一週間の学習期間を与えて自学自習をさせ、その成果をテストで確認し、全員が合格するまで個別指導を行った。④の総合的な学習の時間と⑤の文化発表会では、生徒各自に研究テーマを持たせ、研究と発表を行う機会を与えた。これにより、自分の意見や考えを相手に分かるように伝える表現力と、図や表の読み取りなどの力をつけることに役立てることができた。⑥行事では、生徒全員に持ち回りで作文の発表の機会を与え、文章表現力や、人前で臆することなく自己表現ができる力をつけるように努めた。

(3) 教育課程外の取組

教育課程外の取組として、①早朝セミナー、②宅習の確認、③放課後の質問の時間、④各種検定の参加が挙げられる。

①早朝セミナーでは、3年生を対象に5教科について、1日ごとに入れ替えて25分ずつ、問題集を解かせ、実際の問題を解くための訓練を行った。②宅習の確認では、教科担任が教科ごとの宅習を生徒に提出させ、専門的な立場から宅習ノートの添削を行う方式で行った。学級担任は、教科担任の報告を受け取って宅習提出の状況を知ることになる。③放課後の質問の時間は、強制はしていないが、気軽に話ができるように、なるべく教師が放課後にデスクワークをしながら、生徒の質問を受けやすいような雰囲気作りを行っている。④各種検定では、実用英語検定と漢字検定を定期的に行い、学力の向上を全国レベルと比較して確認できる機会を与えた。生徒の受検率や合格率も満足のいく結果を得ることができている。

(4) 保護者・家庭・地域との連携

小規模校である本校の保護者は全員が評議委員会の役員であり、学校と家庭の密接な連携が可能となっている。

特に学力に関しては、学力向上委員会を設けて、①親子読書の時間、②親子の対話の時間、③宅習の呼びかけと確認といった、活動を行っている。

①親子読書の時間では、夏季、冬季の長期休業の際に、各家庭において、親子で読書の時間を設けて読書活動を進めている。②親子の対話の時間では、新聞記事の内容を生徒が選び、それについて自分の見解をまとめて学級で発表するものである。発表に至るまでに、親の意見を参考にし、自分の意見をノートにまとめている。このときに子どもが何をどう考えているかを親がつかめ、親子での対話の時間も自然に増えていくといった効果が上がっている。

3 成果と課題（今後の取組）

成果：

- ① 5教科平均の合計点が昨年度の353.2点から422.7点へと大きく向上した。
- ② 生徒による授業評価において、授業満足度のポイントが80%以上に至るまでになった。
- ③ 授業中、積極的に挙手や発表をする生徒が多くなった。

課題：

- ① 図や表よりデータを読み取る力や、それを自分の言葉で表現する力を今後もつけなくてはならない。
- ② 問題文の読解力と、問題に対応した解答の仕方を身につけさせる必要がある。
- ③ 特別支援教育を考慮した、全校生徒へのきめ細かな指導の具体的取組を進めていく。
- ④ 義務教育9年間の到達目標と評価基準を設定し、学力向上に関する小中連携を強化する。

都城市立小松原中学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本県の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

5教科ともに管内、県平均ともに上回っている中で以下の点で課題が残される。

- ・ 文学的文章の読解及び話す力・聞く力が県の達成率を下回っている。
- ・ 数量、図形などについての知識・理解が不足している。
- ・ 中世の日本の項目で県の達成率を下回っている。
- ・ 植物の生活と種類について県の平均到達度を若干下回っている。
- ・ 並べ替えの英作文、表現の知識・理解及びリスニングにおいて定着が不十分である。

(2) 意識調査結果からの課題

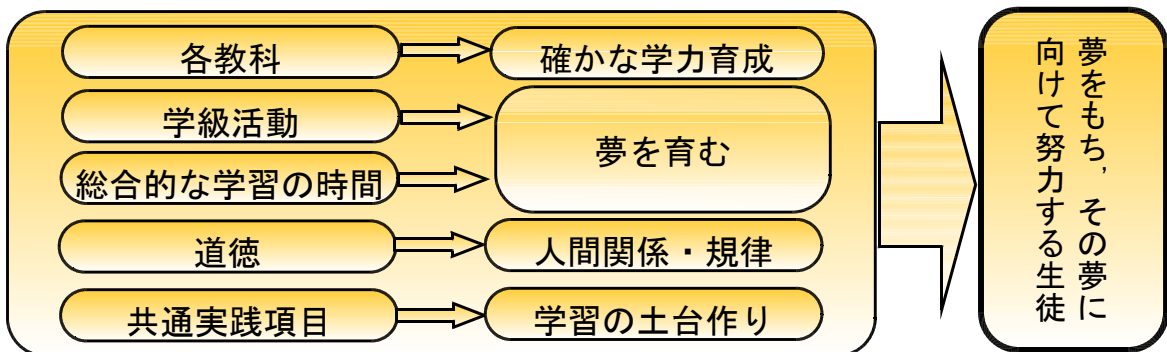
すべての項目において県の数値を上回っているが、生きる力においては全体的に低い値である。「豊かな基礎体験」全般と「間違えた問題や自信のない問題に繰り返し挑戦する」や「将来かなえてみたい夢がある」という項目では県と比較すると若干低い値がでている。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

本校は都城市教育委員会の研究指定を受け、小中連携による学力向上について研究を進めている。また、文部科学省のキャリア教育推進地域指定事業の実践協力校の指定を受けている。そこで、次のような研究の仮説を決め、学力向上に向けて研究を進めている。

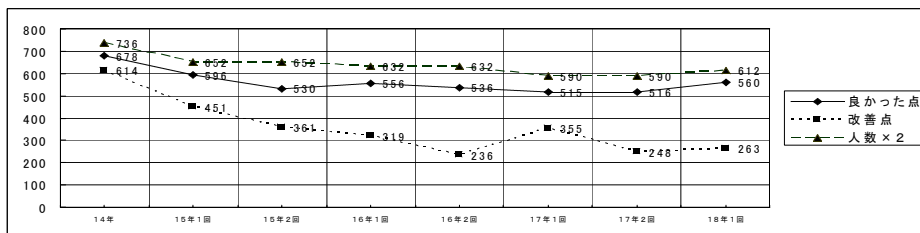
学ぶことの楽しさを体験させる学力向上の取組を継続し、「学級活動」と「総合的な学習の時間」を中心に、教育活動全体を通してキャリア教育の充実を図ることで生徒が夢をもち、その夢の実現に向けて努力する生徒を育成することができるであろう。



(2) 教育課程内の取組

① 学習実態調査（生徒による授業評価）

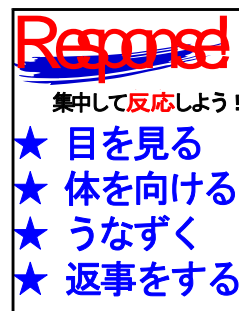
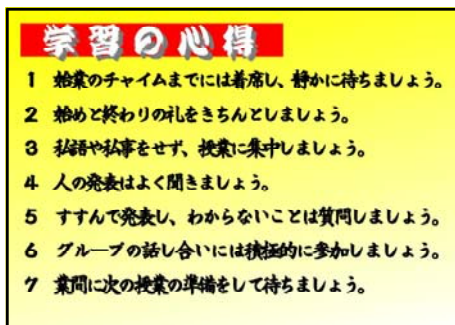
学力向上には授業力向上が不可欠である。そのために生徒からの授業の評価をもとに授業改善の柱をつくり、各教科・各教師で改善を図った。その結果、平成14年度には614個の改善要望があったが、平成18年度1回目の調査では263個の要望数に減った。



※5教科と技能教科に分けているため、人数は2倍してある。

② 授業における基本的な学習習慣の育成を支援する掲示物の作成

本校では以前から学習の心得があったが、各教室で統一した掲示がなされていなかった。そこで、全教室に学習の心得を整備し、統一して指導できるようにした。また、授業づくりにおいて特に重要になる部分をレスポンス掲示物にまとめ、全教室に掲示し、意識の高揚を図った。



(3) 教育課程外の取組

① 週末課題

学力向上において授業で学習した事項の定着を図ったり、演習をしたりすることは大変重要なことである。そこで、毎週金曜日に各教科から課題を出し、月曜日に提出させる取組を行っている。

② 掲示物の作成

特別教室や、廊下、トイレなど、目につくところに各教科の重要事項などの掲示物を作成し、掲示した。アンケートによると、77%の生徒が役に立っていると答え、効果があると考えられる。生徒の要望に応じて色をたくさん使うことと、問題形式の掲示物を増やすこと、イラストを多くするように工夫した。また、掲示物の大きさも考慮に入れA1サイズの掲示物も多く作成するようにした。



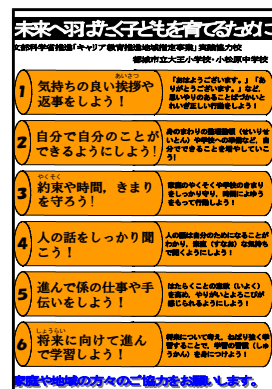
(4) 保護者・家庭、地域との連携

① 小中合同リーフレットの作成

小学校と合同でリーフレットを作成し、全家庭、各地区の公民館へ配付した。これまで、キャリア教育についてはあまり啓発がされておらず、まず、キャリア教育とは何かについてとらえてもらう必要があった。そこで、キャリア教育の定義やその背景、キャリア教育のねらいについて説明するとともに、キャリア教育を推進する上で重要となる6つの項目についてまとめた。

② 学習の手引きの作成

本校では年1回、学習集会を実施し、各教科の学習の仕方について説明を行っている。保護者においては「家庭学習における基本的な心構え」「家庭学習を効果的にするために」「各教科の具体的な勉強方法」「保護者の協力」などをまとめた「家庭学習の考え方・進め方」を配布している。生徒だけでなく、保護者の協力ももらいながら家庭学習を充実させている。



3 成果と課題（今後の取組を含む）

- 学習実態調査により教師の授業に対する意識が変わることで生徒の意識も変わってきた。
- 週末課題や掲示物作成の取組により、基礎的・基本的な事項の定着を図ることができた。
- 小中合同リーフレットの配布により、保護者や地域にキャリア教育について啓発することができた。これにより、キャリア教育から学力向上へ結びついていくことが考えられる。
- 学習実態調査により授業の改善を行うことができたが、個への対応を今後研究していく必要がある。
- リーフレットなどの配布により、啓発を行うことができたが、今後どのように家庭や地域と連携を図っていくかが課題である。

都城市立祝吉中学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

5教科中、3教科が県平均、管内平均を上回っているが、下記の点で課題が残される。

- ・ 国語科では、文脈に即した内容の記述や漢字の読み書きなどが不十分である。読む力や言語についての知識・理解・技能の定着と関連させながら強化していく必要がある。
- ・ 数学科では、数量・図形に関する知識・理解の定着率が他項目に比べて低い。
- ・ 理科では、知識・理解面を強化させることが課題であり、徹底して覚えさせる必要がある。
- ・ 社会科では、基礎の達成率が県平均より低く、知識・理解の力を付ける必要がある。
- ・ 英語科では、県の平均点を下回っており、特にリスニングの問題や会話表現・状況判断に関する問題の正答率が低い。

(2) 意識調査結果からの課題

- ・ 読書について、他の取組と比較すると消極的であることが分かり、読む力を育てる点が課題である。
- ・ 自宅での学習の時間が短く、学習の方法がよく分かっていない生徒が多い。
- ・ 全体的に自分から調べるとか、自分から実行するという意識が低いことから、課題解決を行う意欲や態度が弱い。
- ・ テストのやり直しやその日の学習内容の復習が不十分である。また、ふだんから計画を立てて、こつこつと学習する習慣が身に付いていない面がある。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

本校は、平成15・16年度都城市教育委員会指定研究学校並びに北諸県教育事務所研究協力校として「個に応じた指導方法の工夫改善」等の学習指導の研究に取り組んできた。しかし、生徒は意欲的に取り組むものの、基礎学力の定着にかなりの個人差がみられた。又、年度当初に「教師の授業力」についてアンケートを行ったところ、自分自身の授業に満足していない教師が4分の3をしめる実態も明らかになった。教師が「分かる授業」を創造していく力を「授業力」ととらえ、仮説を次のように設定し研究を進めた。

学習指導において、一人一人の教師が「授業力」を向上させ、「分かる授業」を実践すれば、生徒が自主的・積極的に学習活動に取り組むようになり、確かな学力を身に付けることができるであろう。

「授業力」の向上を図るための工夫改善を図り、一人一人の教師が実践目標を設定し、以下の項目をふまえて研究・実践を行った。

- ・ 自らの授業を振り返り改善するための指導状況の把握
- ・ 「分かる授業」を企画・創造するための教材分析や指導計画の立案
- ・ 「分かる授業」を実践するための指導技術の工夫改善
- ・ 生徒を学ぶ集団へと高めるための学習環境の整備

(2) 教育課程内の取組

「前年度踏襲に陥らない」ことを念頭におき、今まで実施してきたことを再検討し以下のように改善した。

- ・ 授業時数の確保（昨年度より多い時数の確保）
- ・ 教育課程の見直し（行事等の見直し）
- ・ 総合的な学習の時間のまとめ取り（まとめて一定の期間あるいは、一日、半日で実施）
- ・ 時間割の工夫（季節に合わせ4期に分けて作成）

(3) 教育課程外の取組

① 朝自習の充実

朝自習を小テスト形式で実施した。教科で学習した内容から、基礎的・基本的な事項を選んで出題した。繰り返し取り組ませたことで、苦手としていた生徒も徐々にできるようになり「分かった」という成就感を味わわせることができた。

② 家庭学習の充実

教科で家庭学習を行うためのノート「数宅」「英宅」「社宅」（教科の宅習という意味の造語）の提出を求めている。数学科では既習事項の復習を中心とし、理解の早い生徒は予習にも使用している。支援を要する生徒は、授業中に十分理解できなかった内容の練習問題を繰り返し復習したり、授業の内容をまとめたりして活用している。

③ 夏季休業中の学習

夏季休業中に、補充的な学習をするコースと発展的な学習をするコースを開設した。補充的な学習コースは、生徒の実態に応じた課題を作成し生徒が選択できるようにした。発展的な学習コースは、基礎・基本が身に付いた生徒で、より多くの問題を解きたい、より難しい問題に挑戦したいという生徒の要望に応える内容で開設した。多くの生徒が自主的に参加し、意欲的に取り組んでいた。

(4) 保護者・家庭、地域との連携

① 進路だよりの発行

進路指導部から定期的に「進路だより」を発行し、主体的な進路選択ができるよう努めている。内容は「苦手教科の克服法」、「進路情報」、「職場体験報告」等で、進路の選択方法や職業及び上級学校等に関する新しい情報を掲載し、生徒及び保護者への啓発を行っている。

② 校種間連携

祝吉中学校区では、「祝吉中学校区幼小中高合同研修会」を毎年実施するとともに、身に付けたい基本的な習慣（聞く態度・時間を守る・学習時の姿勢）の重点的指導と家庭学習の奨励を地域で行っている。特に、小中学校間では、教科ごとに共通の実践目標を設定して学力向上に取り組んでいる。

祝吉中学校区幼小中高合同研修会



3 成果と課題（今後の取組を含む）

- 「分かる授業」を目指して研究授業も一人複数回実施できた。
- 授業が変わったことで、これまでより生徒自身が学習の到達度を意識するようになった。
- 「前年度踏襲に陥らない」よう改善したことが、教師自身の意識の変容につながった。
- 生徒は落ち着いた学習態度で意欲的に取り組むものの、まだ基礎学力の定着にかなりの個人差がみられる。今後は、課題解決のために、教師一人一人が年3回の研究授業に取り組み、指導技術の向上を目指した授業改善を図ることで、もっとよく「分かる授業」を組織として実践していきたい。

都城市立志和池中学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

各教科の平均到達度が県の平均値を上回ったのは国語科のみであった。特に、数学科と理科は大きく下回っており、すべての観点項目や領域においても県平均値を大きく下回っていた。なかでも数学科では、「数学的な見方・考え方」の観点項目、関数に関わる領域において、理科では、「実験・観察の技能・表現」に関する内容の通過率が非常に低かった。これらの結果から、各教科とも、生徒一人一人の結果分析を行い、基礎的・基本的な内容を定着させるためのきめ細かな授業や目的意識をもたせる授業の工夫改善の必要性がはっきりした。

(2) 意識調査結果からの課題

学力向上のために大切である「学びの基礎力」は全体的には県平均値を上回っていた。しかし、基礎的な生活習慣である「学習のけじめ」や「授業を受ける姿勢」などの「学びを律する力」を身につけるための指導の在り方の必要性、さらに、家庭と連携して生徒の教育に当たる手立ての必要性もはっきりした。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

教師の指導力向上と、生徒の基本的な学習態度の育成が重要であると捉え、それに向けた取組を進めた。

教師の指導力向上については、主題研究とそれぞれの個人研究で、生徒の基本的学習態度の育成については、日々の授業実践、生徒会学習委員会の取組を中心に進めた。

(2) 教育課程内の取組

① 授業における取組

○ 到達目標設定による学習指導過程の展開

1時間ごとの授業において、その時間の到達目標を設定し、その達成に向けて学習過程を編成していった。それによって、教師自身もその時間においてすべての生徒に身に付けさせたい力が具体的に、効果的な学習指導過程を工夫することができた。一方、生徒にとってもその時間のねらいが明確になり、自分はその時間の内容を理解できたかどうか把握しやすくなった。

また、各時間の中で到達目標の達成状況を評価する場面を設定し、生徒の達成状況を把握して、その後の指導に生かすようにした。

○ 生徒の達成度状況把握のための「単元テスト」や「生徒の自己評価」の実施

生徒の達成状況を的確に把握するために、単元テストや生徒の自己評価を実施した。また、その結果はその後の指導に生かし、指導と評価の一体化を図った。

○ 数学科における少人数授業習熟別指導の充実

少人数指導に係る加配の入った数学科で、学習集団の特性に応じた学習指導過程の工夫など少人数指導の充実を図った。

また、それぞれのコースの進度をおおむね合わせることで、いずれかの教師が出張等の際には、2つのコースを合同で授業を行い、自習がないように配慮した。

(3) 教育課程外の取組

① 授業以外での取組

○ 志学の時間（朝自習）を利用した読書活動の充実

朝自習の時間に読書を中心に行うことで、生徒の読解力を高めるようにした。また、学期に1回程度自分の読んだ本の中でおもしろいものを紹介する取組も行い、読書に対する意欲を高めた。

○ 「計算力や漢字コンクール」の実施

学期ごとに「計算力コンクール」「漢字コンクール」「英単語コンクール」を実施してきた。取組は生徒会が主体となり、各学級でスタディータイム（後記）を利用するなどして、定着を図ってきた。コンクールの結果は各学級の平均点で競い、基準点以上の学級には、すべて表彰してきた。

○ スタディータイムの設定

帰りの会の前に10分間時間を設定し、補充学習を中心に学習を展開した。

この時間の学習教科は、2週間単位で設定しており、同じような内容を繰り返し学習することで定着を図ってきた。2週間の最後の日には定着の様子を見る小テストを実施し、その後の指導の参考にしてきた。

○ 放課後を利用した個別指導の実施

生徒の達成状況をいろんな場面で評価し、その後の指導に生かしてきたが、どうしても授業等（**スタディータイムでプリントに取り組む生徒**）だけで対応できない生徒がいた。そうした生徒に対しては、放課後の個別指導で対応してきた。

② 職員研修

授業研究を中心においた主題研究に取り組んできた。しかし本校では、教科担当が一人しかいない教科もあり、教科ごとでの研究では深めることが難しい。そこで、教科の枠を取り払い、お互いに授業を見て協議をすることで授業力の向上を図ってきた。全教諭が研究授業を行い、それぞれが工夫した基礎基本定着のための手だてや基本的な学習態度の育成のための手立てについて研究をすすめた。本年度は、板書や発問に視点を絞って、互いに授業力向上を目指して高めあっている。

③ 一人一研究

教師一人一人が学力向上に向けた研究主題及び授業改善の具体的な取組を設定し、個人研究に取り組んできた。取組の結果は論文にまとめ、全教諭が都城市の教育研究論文に応募した。

④ 学習態度徹底週間

基本的な学習態度の確立のために、指導週間を設定してきた。それぞれの月の重点項目も決め、各教室に掲示して意識化を図ってきた。

(4) 保護者・家庭・地域との連携

① 家庭学習の手引き

「家庭学習の手引き」を作成し、全生徒に配付している。またその内容については、年度当初に全校生徒に効果的な活用について具体的に指導した。

② 学級懇談の活用

参観日等で、生徒の実態を具体的に話し、一人一人の生徒に応じた学習方法など、家庭学習の必要性について理解を深め、協力を依頼してきた。

3 成果と課題（今後の取組を含む）

○ 昨年度の取組がそれぞれ効果を現し、スタディータイムや、学習態度徹底週間については本年度の教育課程の中に位置づけをして継続的に取組を進めている。

● それぞれの取組をより効果的に行うための、内容や方法の充実を図る必要がある。

● 取組の中で、保護者・家庭・地域との連携の部分が他の取組に比べて弱かった。本年度、志和池地区が「地域教育システム創造」実践モデル事業の県指定を受けており、この事業とも連携し、学力向上のみでなく、知・徳・体のバランスのとれた子どもの育成に向けて努力していきたい。

都城市立夏尾中学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果等から見た課題

(1) 学力調査結果等からの課題

本校における国語科、英語科については、全領域において平均到達度が高い状況にあり、確かな学力が定着してきている。他の教科については、平均到達度の高い領域等がある一方で、十分でないところも若干見られる。例えば、社会科では、社会的な思考・判断や観察・資料活用の技能・表現の観点については平均到達度は高い状況であるが、社会的事象についての知識・理解については十分でない状況が見られる。また、数学科では、数と式や図形の領域についての平均到達度は高い状況であるが、数量関係の領域については十分でない状況が見られる。今後、生徒の一人一人のよさを伸ばすとともに、それぞれの領域に即して、生徒の興味・関心を高め確かな学力の定着を図るための指導の改善が必要である。

(2) 意識調査結果等からの課題

意識調査の各設問に対しては、本校の生徒は全体的に肯定的な回答をしているものが多いという状況である。肯定的な回答をしていない設問は、「分からないことはそのままにせず、分かるまで努力している」「自分の意見や考えを相手に分かりやすく伝えることができる」等である。今後、ねばり強くこつこつと努力する姿勢を支援したり、表現力を育成するための指導の改善を行ったりする必要がある。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

人間尊重の精神を基調に、教育活動の全領域において、生徒一人一人の可能性を最大限のばし、生徒の自己教育力の育成に努める。

① 学校の教育的課題

ア 小規模校の特性を生かした学力向上の推進

○ 授業における個別指導の工夫 ○ 朝自習の充実 ○ 読書活動の充実

② 特色ある教育の内容〔少人数を生かした教育の充実〕

ア 教科の特性を生かした指導体制の工夫

イ 基礎・基本の徹底を図るためのきめ細かな学習の工夫（チャレンジタイム、ステップアップタイム）

ウ 幅広い教養と読解力を身につけるための読書活動の推進

(2) 教育課程内の取組

① 各教科における取組

ア 基礎・基本の定着を図るために、問題解決能力を育成する学習指導過程の工夫を行っている。

イ 授業内においては、個に応じた段階別課題や定期的な小テストなどを実施している。

ウ 5教科においては、共通理解のもと、授業実施の際必ず個に応じた家庭学習用の課題を出している。

エ 教科毎に、計画的に週末課題を与えている。

② 校時程の工夫

ア 職朝を週2回（火・金）行い、他の3日間は、全職員で生徒の朝自習の個人指導にあたっている。朝自習は、積み上げの必要な国語・数学・英語の3教科にしぼり実施している。さらに、定期的な小テスト等を行い、チャレンジタイムを利用して、確認・分析も行っている。

イ 帰りの会終了後、毎日の課題であるセミナープリントの解答・解説を全学年対象に行っている。その後、理解度の低い生徒に対してステップアップタイムを設け、個別指導を行っている。さらに、月1回程度、セミナーテストも実施している。

	月・火・金	水
職朝	8:10～8:20	
チャレンジタイム	8:10～8:25	8:10～8:25
朝の会	8:25～8:35	8:25～8:35
1校時	8:40～9:30	8:40～9:30
2校時	9:40～10:30	9:40～10:30
3校時	10:40～11:30	10:40～11:30
4校時	11:40～12:30	11:40～12:30
給食	12:30～13:00	12:30～13:00
休憩	13:00～13:45	13:00～13:45
清掃	13:45～14:00	
5校時	14:10～15:00	13:45～14:35
6校時	15:10～16:00	
帰りの会	16:05～16:20	14:40～14:55
セミナー学習	16:20～16:35	14:55～15:10
ステップアップタイム	16:35～16:55	15:10～15:30
職研		15:30～16:50
退庁	16:55	16:55

③ 時間割の工夫

ア 年間を見通した時間割を4月に作成し、「A・B・C」の3パターンの時間割を交互に配列するなど、工夫を行うことで確実な授業時数の確保を行っている。

イ 出張、年休を事前に把握し、授業の入れ替えを前週の段階で行うことで、自習を一切な

くし、学習の進度に影響が出ないよう配慮している。

④ 校内研究の充実

ア 毎月1回、事前研・研究授業・事後研を1サイクルにして、授業研究会を行い、相互の授業力の向上に努めている。特に、学習指導過程においては、生徒一人一人に対して、学習内容の定着が図れるような授業の展開を意識した研究の推進を行っている。

イ 少人数であるため、相互の関わりによる「高め合いの学習」が展開されにくい実態が見られる。そこで今年度は、特に「聞く能力」「話す能力」の育成についての研究の充実を行っている。

⑤ 生徒の授業評価を参考にした授業改善

毎月1週間程度、「学習態度育成週間」を設け、生徒による授業評価を実施している。さらに学期1回程度、教師の指導に対する授業評価を行っている。評価を行うことで、生徒、教師共に、授業に対する取組の問題点に気付付き、自ら自覚することで、さらに分かる授業の工夫改善につながるよう努めている。

⑥ 興味・関心を高める学習環境づくり

興味・関心を高める工夫として、廊下や階段の掲示板、ボックスに各教科による問題の書かれたプリントを用意し、学習に対して、自主的にチャレンジできるようにしている。問題については、日頃授業で行っている内容は意図的に避け、興味が湧きそうな問題をできる限り取り扱うようにしている。学習環境の整備をすることで、自ら学ぼうとする意欲や態度が全生徒に広がってきている。

(3) 教育課程外の取組

① 朝の強化学習（3年）

始業前に自主的な学習の時間を設定し、セミナー等を利用して1、2年時の既習事項の振り返り学習を行っている。さらに、確認テストも行うことで、課題を明確にし、個別の指導の焦点化を図っている。

② 休業日等の強化学習（全学年）

休業日等の部活動前の時間を利用して、プリント中心による自主学習を行っている。各教科とも弱点補強プリントを用意し、個別に集中して取り組ませることで、既習事項の定着が図れるようになっている。

③ 読書指導の充実

第1・2学年は登校後始業まで朝の読書活動の時間としている。第3学年は、強化学習があるので実施していない。教師が内容の確認をした上で、興味のある本を静かな雰囲気の中で読ませている。

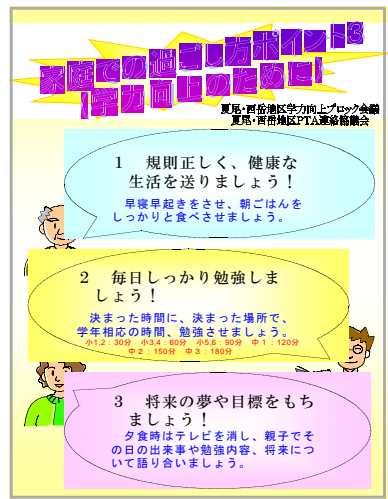
(4) 保護者・家庭、地域との連携

① すこやかチェックリストの活用（週末のみ実施）

毎週金曜日に「すこやかチェックリスト」（項目：起床・就寝の時間、排便のチェック、あいさつ、朝食の確認、テレビ・学習・読書の時間、手伝いの内容など）を生徒に配布し、保護者によるチェックをお願いしている。その結果、保護者の意識も少しずつ高まり、協力体制作りができてきている。

② リーフレットの活用

西岳地区合同で作成したリーフレットをもとに、参観日の学級懇談時や学校だより等を通して、家庭におけるよりよい生活環境についての共通理解、共通実践を行っている。



3 成果と課題（今後の取組を含む）

- 全教科において研究授業を計画的に取り入れ、事前・事後研究会を行ったり、生徒による授業評価を取り入れたことで、生徒・教師共に、積極的な授業改善を図ることができた。特に、個に応じた指導方法の改善については、これまで以上に意識が高まってきた。
- 朝のチャレンジタイムで行っているドリル学習や放課後のセミナー学習など、どれも落ち着いた雰囲気の中で取り組むことができた。教師が常に支援を行うことのできる場を設定したことで、生徒の理解度を把握でき、その後の個別指導にも役立てることができた。
- 保護者・家庭との連携においては、リーフレット等を利用して共通理解、共通実践を行ったが、家庭での学習時間や学習環境に個人差が見られた。今後は、保護者を含めた教育相談を充実させながら、家庭における教育力の向上にも努めていきたい。

野尻町立紙屋中学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本県の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

- ① 英語の平均到達度アップ
- ② 英語の「表現」、「言語文化理解」の指導強化
- ③ 社会の「基礎」の指導強化

(2) 意識調査結果からの課題

- ① 「学びの基礎力」に関して、「学びに向かう力」の中の「自己責任」の数値の低さ
- ② 「学びの基礎力」に関して、「自ら学ぶ力」の中の「学習定着のための方略」、「学習計画力」の数値の低さ
- ③ 「学びの基礎力」に関して、「学びを律する力」の中の「学習継続力」、「学習環境の整備」の数値の低さ
- ④ 「生きる力」の中の「社会的実践力」、「自己成長力」の数値の低さ

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

個に応じた学習指導法の工夫改善による基礎学力の向上(確かな学力の向上を目指して)

- ① わかる授業の実践に努める。
- ② 教授型指導から問題解決的な学習指導への脱皮を図る。
- ③ 学習意欲を喚起する指導方法の工夫改善に努める。
- ④ 基礎的・基本的内容の指導の徹底に努める。
- ⑤ 教育機器の効果的な活用に努める。
- ⑥ 個に応じた指導を実践し、生徒個々の学力の確実な定着と向上を図る。

(2) 教育課程内の取組

① 積極的な生徒指導の推進

「生徒指導は学力向上の基盤」という観点から、生徒指導に関する研修を行っている。特に、「ブローケンウィンドウズ理論」を原点に置き、小さなことの積み重ね(あいさつ、容儀、整理整頓、言葉づかい等)を大切にすることを全職員で共通理解するとともに、個を大切に積極的な生徒指導を推進している。

② 学力分析

各種の学力診断テストの結果を分析し、課題を整理し、教科・学年としての取組を共通理解・実践している。また、小規模校の特性を生かし、生徒個々について日頃の学習の状況を情報交換し、全職員で指導に当たっている。

③ 研究授業・授業研究会の実践

主題研究の取組のひとつとして、一人年1回の研究授業の機会をもっている。本年度の指導案の型を作成し、問題解決的な授業を推進している。参観の視点に基づいて授業を参観し、授業研究会では活発な質疑が行われ、充実した会となっている。各教科の基礎・基本の定着と「伝え合う力の育成」のための取組について、教科を超えて学び合うことができている。



④ 各教科での小テストの実施

基礎・基本の定着のために、授業の中で小テストの機会を多くもっている。定着の十分だった生徒については、昼休みや放課後等を使って、個人指導と再テストを実施している。

(3) 教育課程外の取組

① 家庭学習の方法についての指導

教科別に家庭学習の方法についてまとめた冊子を作り、宅習の見本を付けて「家庭学習の手引き」を作成している。冊子を使って全校一斉に指導をし、「家庭学習記録カード」の記入についても併せて指導を行った。学習委員会の活動と絡めて宅習時間調査も実施し、集会で表彰を行った。また、調査結果について一覧表を作成し、協議したことで、学年や個人の傾向を把握でき、その後の指導に役立てることができた。その結果、生徒の意識も高まり、質・量共に改善されてきた。

② 宅習の充実

宅習量を充実させ、基礎・基本の定着を目指して、毎日宅習2ページ、漢宅（漢字の宅習）1ページ、英宅（英語の宅習）1ページを課している。臨時に、社会や数学の宅習が加わる時もある。内容については、研究班や学級活動、学年の取組等を通して改善されてきている。

③ 校内漢字検定・英単語コンクールの実施

1・2学年は、朝自習の時間で、3学年は国語科・英語科の授業の中で実施している。学年に応じた級を作り、再テストも実施している。級の設定と併せて表彰をすることで、生徒の意欲も高まってきている。

④ 学習に関する教育相談

1学期に学習に関する教育相談を実施している。事前にアンケートをとり、生徒のアンケート結果一覧表を作り、一人一人の生徒が抱えている問題の分析や適切なアドバイスの在り方を検討しながら実施している。生徒の学習のつまずきや悩みが明確になり、個に応じた指導をすることができた。

⑤ サマースクールの実施

夏季休業中の前期、後期の計8日間の午前中にサマースクールを実施した。時間割を組み、教科外の職員もつき、全職員が協力し、個に応じた指導を行った。生徒は希望者としたが、結果的に全生徒が受講した。上学年ほど、意識の高い取組が見られた。

(4) 保護者・家庭・地域との連携

① 研究便りの発行

子どもの学習に対しての保護者の興味・関心を高めてもらうことをねらいに「保護者の皆様へ」という研究便りを発行した。効率的な学習や進路指導の情報等を載せ、また、学習記録カードのチェック等の協力依頼も行った。コメントを添えて返してくれる保護者も少しずつ増え、意識の高まりを感じた。

② 様々な機会での家庭への啓発

保護者に対して、年度当初に学校長が学校経営方針を説明し、学級懇談会・PTA合同委員会（全保護者参加）等で学習に対する生徒の実態報告と協力を依頼した。また、学校評価を実施し、説明を加えながら公表したことで、保護者の理解と協力が深まってきた。

③ 学校評議員会・地区座談会での説明・意見交換

学習・生活に関する取組を説明し、意見交換の機会をもった。学校の教育活動について理解してもらうことができ、地域で子どもを育てる意識が高まってきた。

3 成果と課題

(1) 成果

- ① 一人1回の研究授業と校内研修の積み重ねによって、教師の指導力が向上してきた。
- ② 保護者に対して、いろいろな機会を捉え、学習に関する現状と本校の取組、諸テスト等の結果等の情報を伝えたことで、保護者の学力に対する意識が高まった。
- ③ 各種検定受検者が増え、よい結果を出すとともに、学習への意欲が向上した。

(2) 課題

- ① 生徒指導の充実を基盤とした授業力の向上を目指す学習指導方法の研究に、全職員で継続して取り組んでいきたい。
- ② 校内漢字検定・英単語コンクールの上級取得を目指し、宅習・朝自習等の手立てを工夫していきたい。

高鍋町立高鍋東中学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

国語	文脈に即した内容の理解 漢字の書きと部首
社会	古代から中世の歴史の重要語句とその理解
数学	等式の性質 事象の中の比例関係 文字式の表し方
理科	植物の葉と蒸散の関係 地震の基礎知識 身の回りの物理現象(凸レンズ)
英語	返答の表現や人称代名詞・文型の理解と定着

(2) 意識調査結果からの課題

- 学習に対する動機付けとやればできるという気持ちをもたせる指導
- 学習スキルとしてノートにメモをする習慣を付けること
- 集中して学習し有効な学習方法を模索する気持ちを高めること
- 先生から頑張っている先輩や友達の話の聞いたりすることや友達の悩みについてみんなで話し合ったりすること

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

- ① 基礎・基本の定着ときめ細かな学習指導方法の工夫改善
- ② 個性を伸ばし、学力向上につながる資格取得等への積極的支援
- ③ 保護者との連携及びPTAの学力向上推進委員会の活動の推進

(2) 教育課程内の取組

① 各教科

教科	内 容
国語	・漢字練習帳を使った漢字練習 ・言語事項についての小テスト
社会	・具体的な資料の提示 ・難しい用語の解説
数学	・授業はじめに復習の小テスト ・教えあい学習 ・リトルティーチャーの活用
理科	・作図を授業に取り入れ、パワーアップコンテストでも出題
英語	・授業はじめに人称代名詞を覚える時間の設定 ・ALTとの一問一答

② 授業時間(50分)の確保

チャイムと同時に黙想、その後すぐに授業を開始し、50分間の授業を大切にしよう努めている。また、授業時数の確保については、出張等に伴う自習をなるべく出さないように努力している。

③ 分かる授業づくり

本校の主題研究との関連を図りながら、基礎的・基本的事項に関する指導の徹底を目指し、学習指導過程の工夫改善に努めている。特に、以下のことはすべての教師の共通した実践事項である。

- ・ 前時の復習と本時の目標の確認(小テスト等、学習問題の提示等)
- ・ 板書等の工夫(授業中に学習内容を随時確認できる、視覚に訴える)
- ・ 授業終了時に学習内容を振り返らせる工夫(学んだ事項の確認)
- ・ 学ぶための基礎・基本の力の育成を図るための「総合的な学習の時間」の指導

④ 到達目標の設定

「知」・「徳」・「体」の調和のとれた生徒の育成を目指し、小学校との連携を図りながら、到達目標及び数値目標を設定し、指導方法の工夫改善に努めている。

⑤ 学力向上サポーターの活用

昨年度後半に学力向上サポーター(英語)が配置され、能力に応じた少人数指導を行い、学習指導方法の工夫改善に努めることができた。

⑥ パワーアップコンテスト

基礎学力の定着を図るために、国語、社会、数学、理科、英語の5教科における基礎的

容の確認として、全学年を対象に年間5回実施している。生徒の学習意欲を高めるために、合計得点の満点賞や90点以上の優秀賞を設け、全校集会で表彰している。また、本年度からは、教師の指導資料として、学年及び学級順位も出している。

⑦ 生徒による評価

分かる授業の構築を目指し、教師自身が自らの指導方法を改善に役立てるために、学期末に、生徒による授業評価をすべての教科で実施している。

(3) 教育課程外の取組

① 朝の読書

毎朝、登校後の朝自習までの時間、雨が降って外で活動できない日の昼休みの時間を、読書をして過ごすように勧めている。また、毎月の第3週の朝自習（明倫学習）の時間を基本的に全校一斉の読書週間とし、読書を奨励している。さらに、1学年は読書週間の中で地域のボランティアの方による「読み聞かせ」を各学級で取り入れている。

② 小中連携

高鍋東小学校との連携指導の充実に努めている。具体的には、年間3回の合同研修会及び授業研究会、挨拶運動、国語の兼務教諭による授業などである。

③ 長期休業中の補充学習

夏季休業や冬季休業中に各学年独自の計画で補充学習を行っている。

④ 生活の記録（MSL マイ・スクールライフ）の活用

本校の主題研究との関連で、帰りの会の時間にその日の学習計画を立てさせている。自主的な学習習慣の確立につなげたいと考えている。

⑤ 各種検定試験

英語検定試験、実用数学検定試験、漢字検定試験等、受験の機会を確実に設定し、積極的な挑戦を呼びかけている。

(4) 保護者・家庭・地域との連携

① 学校通信「明倫」の発行

本校に在籍する生徒の全家庭、及び地区の回覧板を利用して、広く地域の方々に、現在学校で取り組んでいること等を紹介することで、学校教育に対する理解と協力を得られるように努めている。

② PTA学力向上推進委員会

「知」「徳」「体」の到達目標の設定による推進拠点校として、学校と家庭との指導内容につながりをもたせることで、より効果的な指導を目指し、年6回開催している。

3 成果と課題（今後の取組）

(1) 成果

- ① 「知」「徳」「体」のバランスを考えながら、学力向上に向けた取組を推進したことにより、教師と生徒の信頼関係が深まり、教育活動の質の充実が図られつつある。
- ② 各教科の到達目標を設定することで、具体的な取組を明確にすることができた。それによって、きめの細かい学習指導方法の工夫改善が可能になり、生徒の学習意欲の向上につながることができた。
- ③ 小中が連携して取り組むことで、一貫性・系統性のある具体的な取組の有効性を、教師が改めて認識できた。また、生徒にとっては、一貫性のある指導内容が、学校に対する安心感や信頼感につながっているようだ。
- ④ 保護者・家庭・地域との連携を推進したことで、学校に対する信頼感が高まってきた。

(2) 課題

- ① 学力向上に向けた地道な取組をねばり強く続ける必要がある。また、「総合的な学習の時間」を有効的に活用し、学ぶための基礎・基本の力を養っていきたい。
- ② 到達目標を実態に応じて見直し、具体的な指導方法や評価の方法についても研究を深める必要がある。
- ③ 小中の一貫性・系統性のある取組を、さらに焦点化、具体化して実践していきたい。
- ④ 保護者・家庭・地域とさらに連携を図りながら、学校がすべきこと、家庭や地域にお願いすべきことを具体的にしていきたい。

新富町立新田中学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

本校の中学2年生は5教科すべてにおいて県の平均点を下回っている。高い到達度を示す生徒もいるが、平均にほど遠い到達度合いの生徒も多く、その差が大きい。平均を下回っている生徒達の多くは基礎的・基本的な内容の定着が不十分で、自分から積極的に学習に取り組む姿勢が低いために伸び悩んでいると考えられる。したがって、本校のこれからの課題は、学習に主体的に取り組む生徒の育成であり、このことが基礎的・基本的な内容の定着につながっていくと考える。

(2) 意識調査結果からの課題

学びの基礎力の向上のためには自宅での学習習慣の定着が不十分である。また、生きる力において心の豊かさや自己成長力に課題が感じられ、調査全般から自分に自信が持てない生徒の多いことが読み取れる。したがって、意識面での本校のこれからの課題は、自己肯定感を持ち、積極的に諸活動に取り組む生徒の育成である。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

本校は教育目標に「人間性豊かでたくましく実行力のある生徒の育成」を掲げ、その具現化に向けて学力向上は重要な課題として取り組んでいる。特に本年度は小中連携による「知」・「徳」・「体」の一貫教育を推進していく中で学力向上に関わる研究を深めていく。また、生徒指導の充実を学力向上に不可欠の要素としてとらえ、日頃のボランティア活動や委員会活動など生徒の主体性を高める活動を推進している。

(2) 教育課程内の取組

① きめ細かな指導の充実

ア 生徒の興味・関心を高める指導法及び一人一人の学力や特性に応じた支援の在り方の工夫

主体的に学習する生徒の育成を図るためには、全教科で共通したことを意識して行うことが大切である。そこで、全教科の授業で取り組むことができる項目の検討を行い、「本時の目標の提示」、「小さな満足感を大切に励まし」、「生徒の活動の場を増やす取組」、「学習態度の評価」の4項目を考え、このことをすべての教師が意識をして授業を行っている。

イ 自己評価表の作成と実施

生徒の学習への内面的向上を促すためには教師及び生徒が常に意識をすることが大切である。そこで、毎時間評価ができ、週の合計や反省、来週の目標が記入できる自己評価表を作成した。評価項目は「学習に関するアンケート」（6月実施）の結果を基にして、6項目と設定した。そして、授業の終末に各自評価し、帰りの会でその日（金曜日はその週）の集計を行った。

② 各種専門委員会の取組の充実

学習環境を整備するために、学習委員会では授業態度の徹底、生活委員会ではきちんとした身だしなみの徹底、保健委員会では換気の徹底、給食委員会では食育の指導、美化委員会、文化委員会では教室環境の充実といった活動をそれぞれに積極的に行っている。その活動の中で、教師は常に専門委員長と話し合いの場をもつなど、密接に関わり、助言するよう心がけている。

学習態度徹底旬間実施計画		学習委員会
1	ねらい	学期初めの時期に、時間を守るという礼儀を身につけ、はじめをもって授業に取り組めるよう、全教師で取り組み、学習委員会活動の活性化を図る。
2	期間	平成18年1月16日(月)～1月27日(金) 10日間
3	内容	2分前行動と黙想・礼を徹底させる。
	評価基準	3：チャイム2分前には行動を起こし、全員チャイムの前には着席しており、黙想・礼もしっかりできた。 2：チャイム席、黙想・礼のどちらかが、きちんとできなかった。 1：チャイム席、黙想・礼の両方ともできなかった。
4	留意点	・保健体育、選択教科、音楽以外の教科について評価する。 ・評価できない教科等については、斜線を引く。 ・自習等の場合には、学習委員長と学級委員長が責任を持って評価する。 ・教師は、公正・公平に評価するために、授業教室への移動に留意する。
5	係活動	① 評価表は毎時間教卓の上に置いて、必ず評価を書いてもらう。 ② 特別教室の場合も忘れずに持って行く。 ③ チャイム2分前に学級委員長・学習委員長は着席を呼びかける。 ④ 学習委員長は、放課後に全校学習専門委員長に、評価表を提出する。 ⑤ 全校学習専門委員長は評価を集計し、掲示する。翌日に、給食時の放送で、各学級の前日の状況を報告する。

【学習委員会の取組】

(3) 教育課程外の取組

① 家庭学習の定着

授業で学習した内容を身に付けさせるためには、家庭での学習の在り方も重要になってくる。そこで、家庭学習の定着を図るために、「家庭学習の手引き」を配布し、参観日や地区懇談会を利用して意見交換会を実施した。また、数学科では、基礎的・基本的な内容の定着を図るために、8分程度でできるプリントを作成し、毎日取り組ませている。

② 読み聞かせサークルとの連携

火曜日の朝の時間を利用して、地域の読み聞かせサークルの方々が学年ごとに読み聞かせを行っている。生徒も楽しみにしており、読書への意欲付けになっている。

③ ボランティア活動の推進

本校の学力向上の基本として生徒指導の充実による主体性の向上と心の育成を掲げている。その一環として早朝のあいさつ運動や校庭の掃き掃除などのボランティア活動、また、清掃時間の積極的な取組などを推進しており、心の教育、ひいては学力の向上に寄与している。

(4) 保護者・家庭、地域との連携

① 保護者の実態把握

基礎・基本の定着を図り、自ら進んで学習に取り組む生徒の育成を目指す中で、学習環境を視野に入れた場合、家庭との連携が不可欠である。そして、家庭との連携を深めるための方策を考えていく上では、保護者の家庭学習に対する考え方やその実態を把握しておくことが重要なことになる。そこで、保護者向けにアンケートを作成し、実施した。

② 外部評価の実施と考察

生徒の基本的マナーや社会的なエチケット等に関する状況を把握するために、学校評議委員、元PTA会長、民生児童委員、行政機関、郵便局、地域商店に協力をいただき、7項目からなるアンケートを実施し、考察を行った。

1 新田中の生徒は、友達を大切にしていると思われませんか。

生徒単独で行動する姿よりも、2・3人で連れ立って行動していることから「大切にしている」と判断されているようである。例えば、西体育館使用の際に新田支所でカギを借用する様子や、郵便局を訪れる時の仲の良い様子などが挙げられている。ただ、「わからない」の回答も多く、何らかの形で学校に関わりの深い方々ではあるが、生徒の様子を判断しかねている様子も伺える。

2 新田中の生徒は、周囲の人に思いやりをもって接していると思われませんか。

「思う」の回答の中に、道路等でのあいさつが挙げられている。これは、生徒・保護者アンケートにも共通して見られる事項である。地域の求めるものに「あいさつ」の占める割合が大きいことを表しているようである。

3 新田中の生徒は、地域の活動を積極的に行っていると思われませんか。

評価される項目として、美化活動・神楽等が挙げられている。一方で、行事等にも参加なし、地域活動が少ないので分からない等があり、地区によって生徒の参加の差、地区への連絡周知の差が大きいのではないかとと思われる。

【アンケート項目と考察《一部抜粋》】

3 成果と課題

(1) 成果

- 学力調査結果及び意識調査結果を分析することにより、生徒の実態が把握でき、今後の課題を明確にすることができた。
- 各教科とも、きめ細かな指導の充実を目指す指導法の研修に取り組んだ結果、生徒の興味・関心を高める指導過程を工夫することにつながった。
- 実態調査の課題をもとに自己評価表を作成し、全教科で行ったことにより、生徒の意識の高揚が見られた。また、各教科において学習内容まで評価できる発展させた自己評価表を作成することができ、一人一人の学力や特性に応じた教師の支援につなげることができた。
- 生徒指導面の充実や学習指導面の充実が互いに効果的に影響し合い、学校生活のレベルが高まった。

(2) 課題

- 与えられた課題などにはまじめに取り組むが、自ら進んで学習しようという姿勢が乏しいので、自学への意識向上を今後とも図る必要がある。
- 各教科で共通した自己評価表を活用したが、重視する内容に教科の特性があり、評価項目を細分化する必要がある。
- 家庭や地域、小学校との連携を一層深め、生徒の学力向上を支援するシステムを構築する必要がある。

延岡市立恒富中学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本県の学力調査及び意識調査から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

- 理科における科学的な見方・考え方の育成と実験技能の定着
- 全教科にわたる基本的学習内容の定着

(2) 意識調査からの課題

- 生徒の学習に関する実態分析や教師側の指導法の改善
- 家庭学習の習慣化とその内容の充実

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

- 生徒の学力を向上させるための手立てを、「学習指導方法の工夫改善」と「家庭学習の充実」の2つの観点からとらえ、それぞれの観点について研究班を立ち上げ、その班で現状分析・対策検討を行い、実施案に沿って各学年や各教科で実践していく。
- 小中連携（恒富小・西小・恒富中）を基盤とした基礎学力の習熟と家庭学習の習慣化を目指した授業研究会や協議会の充実を図り、連携体制をさらに強化する。

(2) 教育課程内の取組

- 理科授業において、実験で起きた現象についての考察に時間をかけ、その原因や過程を科学的に分析させ、正しい用語を使って要領よく説明できるように指導した。
- ワークシートを使った実験レポートを作成させ、具体的な実験のスキルを身に付けさせるとともに、実験の必要性について理解させ、科学的な技能・知識の定着を図った。
- 実験器具の基本的な操作方法についての小テストを実施し、繰り返して何回も覚えなおすことで学習内容を理解させた。
- 各教科で標準学力テストの結果を分析し、生徒の不得意な部分とその原因を考察するとともに、指導方法の改善や具体的な対策について検討した。
- 全職員で研究授業を行い、教科の指導方法の工夫をお互いに学び合うことで良質な授業のあり方についての共通理解をもつことができた。
- 小学校と連携して小中学校の学習内容の関連や系統的な指導方法についての研修を深めることができ、今までよりもきめの細かい丁寧な授業についてのビジョンをもつことができた。

(3) 教育課程外の取組

- 全学年で家庭での勉強方法についての実態調査を行い、家庭学習の問題点や改善すべき点を明らかにし、発達段階に応じた学習方法のあり方や教科の特性を踏まえた家庭学習の進め方について協議した。
- 実態調査の結果と延岡市常任研発行の学習の手引きを基盤にした「家庭学習の手引き」を作成し、各教科での家庭学習の具体的な方法の提案と、実態調査で明らかになった食育についての資料も掲載して全家庭に配付した。
- 学年で朝自習の時間の使い方を検討し、国語・社会・理科・英語・数学のプリント学習を計画的に実施し、各教科の基本的事項の復習や苦手な単元内容の強化を図った。また、さら

に基礎的内容を定着させるために全教室に2名以上の教師を割り当て、苦手意識をもつ生徒の個別指導に当たった。

- 学年で毎週金曜日の帰りの会に週末テストの時間を設定し、漢字・英単語・計算の基礎的な問題を解かせ、不合格者は個人的に指導した。

(4) 保護者・家庭・地域との連携

- 参観日に学校評議員や区長さん方にも声をかけ、保護者や地域の方々に学校を開放することで、風通しの良い開かれた学校を目指した。
- 家庭学習の習慣化を目指した宅習指導や生活ノートの返信、さらに学級通信や学年通信の発行など家庭との連携を強化して学習習慣の育成を図った。

3 成果と課題（今後の取組を含む）

(1) 成果

- 実験器具の小テストは定期的実施でき、全体的に学習内容の定着を図ることができた。
- 朝自習のプリント学習は生徒が集中して取り組み、早く終わった生徒は進んで読書をするなど学習意識の改善が見られた。
- 朝自習の個別指導では生徒の小さなつまづきが解消され、わずかではあるが確実に学力向上が図られている。
- 週末テストへの取組に個人差があったが、不合格者が徐々に減ってきた。今後はその効果的な個別指導の方法を考えていきたい。
- 各教科で標準学力テストや基礎学力調査・県テストなどの考察から生徒の苦手領域を把握し、すぐにその対策を教科で検討し、授業方法の改善や補充プリントの作成など素早く対応することができた。
- 研究授業については予定通り実施され、各教科で指導方法の改善がなされている。今後は指導技術を向上させる方法や良質な実践例・資料などを収集し、いつでも検索できるようにライブラリー化し整理したい。
- 小学校との連携では定期的に合同研修会をもつことができ、職員間の交流も盛んになってきている。特に小学校高学年と中学校1年生の各学校の職員の情報交換や生徒の実態把握・指導方法の検討など同じ児童生徒を育てる教師集団としての連帯意識が育ってきている。今後は小中9年間を見通した教科経営や総合的な学習の時間・英語教育・コンピュータリテラシーのあり方など多面的な観点から教育計画をとらえていきたい。
- 学習の手引きについては、各学年での実態把握・分析をもとに、各教科での学習の意義や勉強の効果的な進め方など実践にすぐに役立つような書き方でまとめることができた。今後はこの手引きを有効活用するための方法を検討し、各学級での家庭学習指導や各教科でのノート指導・予習復習の指導など、家庭学習と授業の融合が図られるように研究を深めたい。
- 家庭との情報交換は参観日や学校行事はもとより、学級通信や生活ノートを利用して常時行われており、保護者の関心も高い。今後は家庭での学習だけでなく、進路学習や食育の面からも家庭との連絡を緊密にし、さらに安定した協力体制を築いていきたい。

(2) 課題

- 理科授業における考察の時間は確保できたが、ワークシートの記入など自分の言葉でまとめるところで個人差があり、まだ不十分であった。
- 朝自習プリントや週末テスト・小テストなどプリント作成・印刷・配付が煩雑になっており、計画的に実施する必要がある。

門川町立西門川中学校の学力向上への取組

1 平成 17 年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

① 平成 17 年度学力調査の結果 ※()内は 18 年度

	国 語	社 会	数 学	理 科	英 語	計
自校の平均点	74.9(86.9)	65.2(70.5)	71.6(81.1)	66.7(75.6)	74.6(88.5)	353.0(402.6)
管内の平均点	77.4	57.2	63.4	63.2	72.2	333.4
県の平均点	80.6(79.2)	60.6(63.2)	67.8(68.6)	66.5(66.3)	75.7(74.3)	351.2(351.6)
来年度の目標 (平均点)	77.0(87.0)	62.0(75.0)	72.0(85.0)	70.0(75.0)	76.0(85.0)	357.0(407.0)

② 平成 17 年度学力調査の結果からの課題

- ・ 国語の平均到達度が他教科に比べてかなり低い。「話す力・聞く力」以外の分野はすべて県平均を下回っている。
- ・ 理科における自然事象についての知識・理解が県平均に比べやや低い。

(2) 意識調査結果からの課題

- ・ 生きる力は全項目とも県平均を上回っているが、学びに向かう力の中の感じ取る力と学習動機が特に低い。
- ・ 豊かな基礎体験の中では、本や新聞を読む生徒が非常に少ないことと、家庭学習のみで学力の向上を図っていることが分かった。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

- ① 指導方法の工夫・改善
- ② 学習環境の整備
- ③ 各種検定と作品展への応募の推進
- ④ 図書室の整備と読書活動の推進
- ⑤ 家庭と連携した宅習指導の充実

(2) 教育課程内の取組

- ① 時間割の柔軟な入れ替えで自習をなくす。
- ② 国語、数学、英語は、TT で授業を行い、個別指導を充実する。
(8割以上の生徒が、TTの方が分かると言っている)
- ③ 数学と英語に重点を置いた選択教科の開設。

(3) 教育課程外の取組

- ① 朝自習の読書活動で国語力の向上を目指す。(1・2年生)
(読書週間、多読賞などを設けた)
- ② 朝の学習で入試に向けた、学力の定着を目指す。(3年生)
- ③ 帰りの会の「スキルトレーニング」で基礎学力の定着を目指す。(1・2・3年生)
- ④ 漢字検定、数学検定、英語検定の積極的に受検を進める指導を行う。
- ⑤ 3年生は、夏季休業中に10日間(2時間ずつ)補習を実施した。
- ⑥ 1・2年生は、夏季休業中の部活動の前に毎日1時間教室で自学自習をした。
- ⑦ 各学期のはじめに「家庭学習のてびき」「家庭学習の3つのポイント」を用いて、家庭学習の仕方についての指導を行う。

(4) 保護者・家庭、地域との連携

家庭学習の3つのポイント

子供を伸ばすために（家庭掲示用）

① 家庭学習の充実のために

年度当初の参観日に「子どもを伸ばすために」（家庭掲示用）と「家庭学習の3つの約束」というプリントを配付し、学級懇談において説明し、基本的な事柄について家庭での協力を依頼した。

1. 決まった時間に
(早く取りかかる)
2. 決まった場所で
(勉強机に向かって)
3. 集中して
(テレビ・音楽などは消して)

1. 常に家族の会話をもちましよう。
2. 朝ご飯をしっかり食べさせましよう。
3. 規則正しい生活をさせましよう。
4. 勉強している時はテレビの音量を下げても集中できる環境をつくりましよう。
5. 家の手伝いや仕事をさせましよう。
6. 本に親しむ雰囲気をつくりましよう。

※ 忘れ物を無くすために、準備は寝る前に！

② 情報の発信

「学級通信」や「学校だより」で、家庭や地域に学校での生徒の様子や学校行事や部活動の成績、各種表彰などの情報を積極的に発信している。

③ 地域の皆さんとの意見交換の機会の設定

昨年度から各学期一回、学校とPTA、地域の各組織の代表者の方々と地域の教育について話し合う「西門川の教育を語る会」という会を開催している。

学校からの児童・生徒についての報告や説明、地域の皆さんからの質問や意見、そして協議をしていくことによって地域を巻き込んだ有意義な会となっている。



④ 読書活動の推進「23が60(にさんがろくまる)運動」

小中連携の取組の中で、読書活動を推進するために「23が60(にさんがろくまる)運動」を毎月実施している。

3 成果と課題(今後の取組を含む)

《成果》

- 年間を通じ、5教科の基礎・基本の定着をめざして「スキルトレーニング」を実施した。学級担任、副担任が個別指導を行うことにより、まとめのテストで8割程度の生徒が1回で合格することができた。
- 朝の読書の時間に読んだ本のページをカードに記入したり、読み終えた本の題名を掲示したりすることによって、本に関する話題が増え、読書意欲の喚起に結びついてきた。「1か月3冊以上読書をする」という目標は、3分の1の生徒が達成できている。漢字検定は50%受検を目指していたが、40%にとどまった。
- 英語検定の資格取得率も80%に達している。
- 授業についていけない生徒にT2の教師が援助する形を取って指導した。その結果、ほとんどの生徒が「TTで授業内容がわかるようになった」と答えていた。
- 若干であるが家庭学習の時間が増加した。しかし、全体的にまだまだ家庭学習の時間が少ないといえる。

《課題》

- 学力向上を目指していろいろな取組をすることにより、一定の成果が見られたといえる。今後も、学力向上を図るために、授業内容の充実と家庭学習の習慣化の充実が必要である。地域、家庭(保護者)と一体となった継続的な取組を推進しなければならない。
- すべての教科において学力向上の基礎となるべき、「読解力」「理解力」等の向上については、読書の習慣を身に付けさせる指導が不可欠であるので、小中連携の一環としても更に取り組んでいく必要がある。

椎葉村立椎葉中学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査の結果からの課題

- 各教科の平均到達度は県平均よりも超えている。
- 国語の書く力、読む力について改善を要する。(主語の指摘・文節の区別、文脈に即した内容の理解等)
- 数学の数量関係について改善を要する。(数量の関係を式で表現)
- 英語の応用・発展的な力を必要な内容について改善を要する。(表現、文法・表現・英作文、英語的表現、会話の状況把握)
- 理科の自然事象についての知識・理解について改善を要する。(実像と虚像、焦点距離、物体にはたらく力、地層の様子、気体の発生)
- 社会の中世の日本について改善を要する。(元寇と鎌倉幕府、武家と公家の関係)

(2) 意識調査結果からの課題

- 学びの基礎力について改善を要する項目
 - ・ 自ら学ぶ力：学習スキル・学習計画力
 - ・ 学びを律する力：学習のけじめ・学習継続力
- 生きる力について改善を要する項目
 - ・ 問題解決力：筋道を立てて、ものごとを考えることができる。自分の意見や考えを相手に分かりやすく伝えることができる。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

- 小学校の学習内容との関連を図り「読み」「書き」「計算」に関する意欲と能力の向上
- 数学・英語に関する基礎的・基本的な内容のくり返し指導の徹底
- 教師の指導力を高める研修の充実
- 家庭学習の習慣化を図るための指導と家庭との連携

(2) 教育課程内の取組

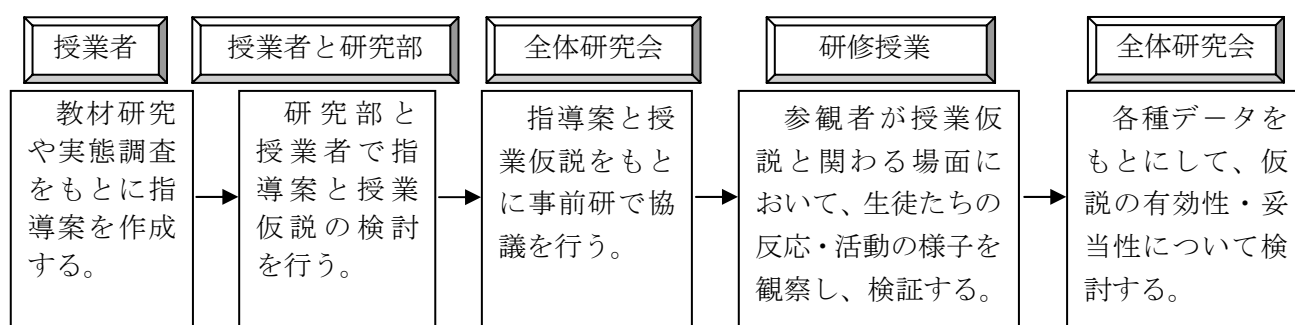
小学校の学習内容との関連を図りながら「読む能力」「書く能力」については、国語科を中心に「漢字等」に取り組んだ。「コミュニケーション能力」については、国語科と英語科での常時指導及び総合的な学習の時間での「テーマ学習」を通して育成を図った。「計算の能力」に関しては、数学科を中心として取り組んだ。それぞれ目標値を設定し、テストを作成・実施し、その結果の分析・考察を行い検証とした。

- 読む能力
 - ・ 学校生活の中に読書の時間をつくる。
- 書く能力
 - 「文章を書く能力に関すること」「言葉のきまりに関すること」「漢字等に関すること」の3つの観点から「到達目標値」を設定した。
 - ・ 漢字に関すること
 - 小学校で学習した漢字について1年生から3年生まで漢字テストを実施し定着を図った。1年生が900字、2年生が950字、3年生が1600字の漢字を目標とした。第1回目のテストを5月に実施し、その実態を確認した。第2回目のテスト(1月実施)結果の正答率により検証とした。
- コミュニケーション能力
 - ・ 国語科によるコミュニケーション能力
テーマ学習を推進する上で、読む・書く・話すの基本指導
 - ・ 英語科によるコミュニケーション能力
簡単な応答に関すること
 - ・ 毎日5分程度、教科書の英文を声に出して読むこと
 - ・ 基本文を含んだ教科書の文・重要基本英文や短い対話文の暗唱
 - ・ 英文を話す能力に関すること

- ・ ALT との積極的な対話
- ・ スピーチ (Show&Tell) や対話形式の文 (スキット) の作成及び発表会を実施し発表会での相互評価等を通して検証とした。
- 計算の能力
 - ・ 計算力向上のための手立て
毎日、A4 プリント 1 枚の課題を与え、既習内容の定着や計算スキルの向上を図った。教師がすべて添削し、間違えたところはヒントを与え、やり直しをさせて再提出させるようにした。また、正誤から理解度の実態を把握し、授業での個別指導に役立てた。
- ※ 連結する学年 (小 5・6、中 1・2) において算数・数学科の系統関係が分かる年間計画及び系統関係図の作成に取り組んだ。

(3) 教育課程外の取組

- 家庭学習の充実
 - ・ 学習のしおりを作成し、宅習の仕方について指導を行う。
- 読書活動の推進
 - ・ 朝登校後、学習準備ができたなら、各教室で各自読書を行いながら始業を待つ時間に位置づける。
- 委員会活動での啓発
 - ・ 委員会活動における月別読書数の平均冊数の状況を報告する。
- 教師の指導力を高める研修の充実
 - ・ 指導技術に関する研修と研究授業を連携させ、指導技術に関する意識を高め、授業の充実を図る。
 - ・ 研修授業は、6 回実施した。
 - ・ 研修授業実施にあたっては、下記の手順で事前・事後研修を行った。



(4) 保護者・家庭、地域との連携

- 毎月発行する学校新聞に啓発記事を掲載し、参観日等で実践状況に関する情報交換を充実させる。

3 成果と課題

<成果>

- 学力調査をもとに現状を把握し、対策を検討したので生徒に具体的に指導ができ学習効果を高めることにつながった。
- 教育課程外での読書活動や委員会活動での取組を通して、読書に対する啓発をすることができた。
- 連結する学年 (小 5・6、中 1・2) において算数・数学科の系統関係が分かる年間指導計画及び系統関係図の作成に取り組んだことにより小学校の学習内容との関連を図りながら細かな手立てを行うことができた。

<課題>

- 学力向上を目指した小・中連携の活性化をはかり、9 か年見通した学校の教育的課題を具体化し教育活動の改善につなげていく。

日之影町立日之影中学校の学力向上への取組

1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

(1) 学力調査結果からの課題

- 国語 … 「読むこと」では、文脈に即して読み取る力や心情を読み取る力が、「言語事項」では、文の成分を理解する力が十分に身に付いていない。
- 数学 … 数学的な見方や考え方、数学的な表現・処理についての達成率は高い数値を示しているが、数量、図形などについての知識・理解は低い。図形分野の定着を図る必要がある。
- 英語 … 文法事項が定着していない。語彙力が不足している。
- 理科 … 基礎的なことに関しては県平均と同じである。しかし、応用問題については下回っている。特に、身近な物理現象、植物の生活と種類に関しては基礎的なこと、応用的なこと、どちらにおいても手だてを講じていきたい。また、科学的思考を重視した授業もさらに進めていきたい。
- 社会 … 平均到達度、達成率でも県平均を大きく上回っているが、「中世の日本」だけが下回っている。応用、基礎にかかわらず低い数値を示しているため、基礎的事項をもう一度押さえ直す必要がある。

(2) 意識調査結果からの課題

- 「生きる力」の、自分で調べたことをまとめ発表する問題解決力が身に付いてない。
- 「学びの基礎力」の学習計画力や学習のけじめが身に付いてない。

2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

(1) 学力向上に向けた経営方針

地域に誇れる、信頼される学校として、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな生徒の育成をめざし、生徒が感動する、保護者が感動する、地域が感動する、教育活動を推進する。そのためには、自信をもち主体的に生きる力を育てる学習指導の展開に努め、生徒が意欲的に学習に取り組みながら基礎学力を高め、一人一人の能力・適性にに応じて可能性を最高に開発する教育を実践する。また、学校と家庭・地域との連携を図り、地域の教育への願いの実現に努める。

(2) 教育課程内の取組

ア 自習0への取組

本校は、一昨年までは学級数も各学年1学級であったが、統合により学級数が増え、固定時間割で時間割を組んでいる。

また、出張や年休などで自習が増えることが予想された。そこで、自習をなくすために、固定時間割を基本としながらも出張などを考慮しながら、時間割を毎週出すようにした。その際、【図1 週あたりの時数表】で時数の確認をし、時数の偏りを確認しながら時間割の操作を行っている。このため、自習はほとんどなくなり、授業時数の確保につながっている。

教科	月	1																		2	
		4		5				6				7				9				10	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	
国語	1	標テ	12	20	28	9	16	1	8	19	te	11	25	1	15						
	2	14	24	1	11	18	23	12	9	20	29	12	te	7							
	3	17	25	2	12	19	29	5	13	22	4	13	29	8							
	4	19	27	8	15	テ	30	6	16	25	10	14	31	11							
社会	5	標テ	12	24	1	12	19	2	9	19	te	7	14	31	5	16					
	6	17	26	8	15	テ	29	5	12	21	30	10	19	1	7						
	7	18	28	10	17	24	31	7	14	23	5	12	te	1	8						
数学	8	標テ	13	20	1	11	16	テ	31	7	14	te	7	13	te	5	16				
	9	数テ	14	26	8	9	17	24	1	8	21	3	10	19	29	6					
	10	19	27	10	15	18	22	29	5	12	25	5	11	28	30	13					
理科	11	標テ	14	25	8	12	19	31	7	14	23	30	5	12	30	6	15				
	12	18	28	9	16	テ	24	2	9	16	28	4	7	19	1	8					
	13	19	テ	10	17	23	30	6	13	20	te	4	11	te	4	11					

【図1 週あたりの時数表】

イ 「日之影タイム」の活用

教科等の週時数は28時間を実施できるが、学校行事等での授業ができなかった場合を考慮し、ゆとりある行事計画を編成したり、学力向上対策として授業時数を確保したりするねらいから、週時数を29時間とし、29コマ目の時間を日之影タイム「HT」の時間と設定している。

- HTの時間は、学校行事・学校の行事・生徒会行事等にあててを原則とする。そのため、行事の時間と入れ替えた場合は、授業を振り替えて行う。
- 予備時数として出てきたHTの時間の使い方については、授業の挿入を考える。その場合、授業実施時数集計表をもとに、授業時数の足りない教科等を優先して計画する。
- 予備時数として出てきたHTの時間の使い方については、授業を実施しない時数として考える。その場合、各種委員会等の職員会や職員研修を、時期に応じて計画するようにする。

ウ 授業実践における指導方法の工夫改善

全教科で教科経営案を作成し、指導方法の工夫改善、学力向上に取り組んでいる。特に数学科、英語科では、習熟度別少人数指導を実施して効果を上げている。数学科は各学年を3つのコース（青雲、竜天、天翔）に分け、英語科は各学級を2つのコース（基礎、標準）に分け、習熟度別の授業を実施することで、生徒の興味・関心を高め、個に応じた指導を実践している。

エ 日之影町テストの実施

日之影町は、確かな学力を身に付けた生徒の育成を目指し、町内小中学校（小学校は3年生以上）の全生徒を対象に、年に2回、同一問題によるテストを実施している。問題作成者は各学校の教師が担当し、基礎的・基本的内容の定着度を図り、授業方法の改善などにつなげる良い機会となっている。

(3) 教育課程外の取組

ア 小学校との連携

昨年度から、「明日の宮崎を担う子どもたちを育む戦略プロジェクト」の、小中連携推進事業の推進拠点校として研究を進めている。併せて「クリエイト西臼杵」の取組みとして、夏季休業中に、日之影中学校校区小中合同研修会を実施した。ここで①一貫性・系統性のある到達目標の設定、②連携する小・中学校での共通の課題について、③9年間を見通した一貫性・系統性のある具体的な指導（取組）について協議した。決まった共通実践事項については、A4判のプリントにまとめて各家庭に配布し共通して指導にあたることとした。

イ モニター会（生徒指導を中心とした地域の方との会）

日之影中学校校区の公民館長、警察、小学校PTA会長、民生児童委員、中学校PTA役員、中学校職員が、年に2回、児童・生徒の地区での様子、登下校の様子、非行防止の対策や安全対策などの情報交換を行い、生徒の健全育成に努めている。

ウ 漢字検定・英語検定（全校生徒が上級取得を目指す）

漢字検定および英語検定とも第3学年終了までに3級取得を目指して取り組んでいる。今後は、さらに合格率を上げる手だてを講じていきたい。

エ 「朝の読書」の指導

本校では、集会がある日を除いて朝の15分間読書に取り組んでいる。職朝がない日は全職員が各学年に分かれ、教室で一緒に読書をしている。読書は学力の基盤となる読解力をつけるほか、1日のはじめに行うことで心を落ち着かせ、「学習の構え」をもつ上でも有効な活動となっている。また、『朝の読書』をさらに充実させるために、「読書カード」に読んだ本の題名とページ数を毎日記入させ、月ごとに集めて個別指導に生かすようにしている。

(4) 保護者・家庭・地域との連携

ア 学校教育支援の会

本校では、「自ら学び、豊かな心で、たくましく活動できる生徒の育成を図るために、学校・家庭で連携し研究実践していく」という目的で、「学校教育支援の会」（校長、教頭、教務主任、研究主任、研究班班長、PTA役員）を設置している。ここでは、学校の学力向上の取組や生徒の実態、家庭学習における保護者の役割などについて意見交換を行っている。

また、「学校教育支援の会」の内容や出された意見等については、参観日の各学年委員長の話や、「学校教育支援の会だより」を通し、各家庭に伝わるように努めている。今後は、計画的・継続的に「学校教育支援の会」を開催することで、生徒の学習効果を上げるための協力体制を強化していく予定である。

イ 日之影町教育の日の実施

11月26日（日）は日之影町教育の日にあたり、学校を全面開放した。この日は中学校の保護者のみではなく、地域の方にも案内をして自由に学校を参観していただき、きたんのないご意見を伺う機会としている。保護者からも自由に参観でき、学校の様子がよく分かったということで大変好評であった。教育相談については、不安が解消されてよかったという感想や、家で何を勉強すべきかが分かったなどという感想が多く聞かれた。

3 成果と課題（今後の取組を含む）

(1) 成果

- 自習を出さない取組や「日之影タイム」の活用で授業を確保したことで、ゆとりある教育課程の実施につながった。
- 日之影町テストの実施や小中連携により、教師の指導方法の工夫改善や問題作成能力を高めることができ、基礎・基本の定着が図られ、確かな学力を身に付けさせることができた。
- 朝の読書で本を読む時間を確保したことで、本に親しむ生徒が増えてきた。

(2) 課題

- 自ら考え、学び、表現しようとする等のコミュニケーション能力を育成していく場を設定し、指導方法を工夫改善していく。
- 地域・家庭との連携を深め、教育力を高めていく。